

富岡竹ノ内・和田山寺久保遺跡

一般県道箕郷板鼻線地方特定道路整備事業

に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006

群馬県西部県民局 高崎土木事務所

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

富岡竹ノ内・和田山寺久保遺跡

一般県道箕郷板鼻線地方特定道路整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006

群馬県西部県民局 高崎土木事務所

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

一般県道箕郷板鼻線は、榛名山の南麓を通過する西毛の幹線です。

沿道には、関東有数の規模を誇る箕郷の梅林、長野氏が活躍した箕輪城、坂東霊場十五番札所白岩観音長谷寺など、豊かな自然とともに歴史的環境にも恵まれています。四季を問わず、県の内外の人たちが訪れています。

この道路改築工事に伴い、高崎市箕郷町富岡に所在する富岡竹ノ内遺跡が埋蔵文化財の記録保存対象地となりました。平成17年度、18年度の2箇年にわたり財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団により発掘調査および整理事業を行いました。

ここに「富岡竹ノ内遺跡・和田山寺久保遺跡」の発掘調査報告書を上梓することになりました。

本報告書には、古墳時代前期の住居跡、7世紀の古墳が報告されています。発掘調査から報告書の刊行に至るまで、群馬県西部県民局高崎土木事務所、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会（旧箕郷町教育委員会）等に種々ご指導、ご協力をいただきました。これら関係者に衷心より感謝申し上げますとともに、本書が地域の歴史を解明するための資料として充分にご活用されることを願い、序といたします。

平成18年7月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 高橋 勇 夫

例 言

1 本書は一般県道箕郷板鼻線地方特定道路整備事業に伴い、記録保存のため発掘調査が実施された富岡竹ノ内（とみおかたけのうち）遺跡・和田山寺久保（わだやまてらくぼ）遺跡の発掘調査報告書である。

2 遺跡の所在地は以下のとおりである。

富岡竹ノ内遺跡 高崎市箕郷町富岡1741-2
高崎市箕郷町和田山542-2、545-2、546、547-2、547-7、
596-5

和田山寺久保遺跡 高崎市箕郷町和田山525-1、544-1、545-1、547-4、549-1

古墳の所在地は、上毛古墳総覧と対照させるため、合併前の表記のままとした。

3 遺跡の名称は、県教育委員会が決定した。

4 事業主体者 県西部県民局高崎土木事務所

5 発掘調査は、県西部県民局高崎土木事務所の委託により、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。発掘調査時の組織体制は次の通りである。

調査期間 平成17年8月1日～平成17年11月30日

管理・指導 高橋勇夫、木村裕紀、津金澤吉茂、矢崎俊夫、中東耕志、西田健彦

事務担当 関 晴彦、宮前結城雄、石井 清、竹内 宏、須田朋子、吉田有光、今泉大作、佐藤聖行、
清水秀紀、栗原幸代

今井もと子、内山佳子、若田 誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子

調査担当 女屋和志雄、藍澤友美

6 発掘資料の整理および報告書の作成は、県西部県民局高崎土木事務所の委託により、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。期間、体制は次の通りである。

整理期間 平成17年12月1日～平成18年4月30日

履行期間 平成17年 8月1日～平成18年7月31日

事務担当 平成17年度 高橋勇夫、木村裕紀、津金澤吉茂、矢崎俊夫、中東耕志、西田健彦

平成18年度 高橋勇夫、木村裕紀、津金澤吉茂、萩原 勉、中東耕志、西田健彦

整理担当 女屋和志雄

資料整理 平成17年度 高橋裕美、宮沢房子、大嶋 緑、吉川えり子、小池益美

平成18年度 高橋裕美、宮沢房子、大嶋 緑、吉川えり子、小池益美、中越裕子

遺構写真 藍澤友美、女屋和志雄

遺物写真 佐藤元彦

遺物観察 女屋和志雄

保存処理 関 邦一、土橋まり子、小材浩一、森田智子、津久井桂一、多田ひさ子、長岡久幸

機械実測 伊東博子、岸 弘子、田所順子

- 7 出土遺物および遺構、遺物の図面、写真類は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターおよび財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が保管している。
- 8 発掘調査および本書の作成にあたり、下記の諸氏よりご協力、ご指導をいただいた。記して感謝の意を表したい。
群馬県教育委員会、高崎市教育委員会（旧箕郷町教育委員会）、坂口修二、松本淳二、田口一郎、井田秀樹、間庭 稔、杉山秀 宏

凡 例

- 1 本書で使用した国家座標は、世界測地系による。
- 2 本書における遺構番号は、調査当時のままであり欠番がある。
- 3 遺構図、遺物図の縮尺は、原則として以下の通りである。縮尺の異なる場合は、それぞれにスケールを付すか、遺物番号に縮尺率を併記した。
遺構図 竪穴住居 1 : 60 土坑 1 : 40 古墳墳丘 1 : 100 石室 1 : 60 溝 1 : 100 道 1 : 100
L = ○○は、断面図の水糸標高を示す。
遺物図 杯・椀、石器、鉄器 1 : 3 甕・壺 1 : 4 石鎌、銭 1 : 1
- 4 遺物番号は、本文、挿図、写真図版と一致する。なお、写真図版のキャプションでは、富岡竹ノ内遺跡を「富岡」、和田山寺久保遺跡を「和田山」と略称した。
- 5 遺構図の土層は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色彩監修「新版標準土色帖1994年版」による。
- 6 第2図の群馬県中央部地質図は、当事業団報告書第330集「波志江西宿Ⅱ遺跡」（2004）第3図に加筆転載した。
なお、その図は「群馬県史通史編1原始古代1」付図2をもとに作成された。
- 7 第3図は、国土交通省国土地理院発行2万5千分の1地形図「下室田」「前橋」を使用した。第4図は、同5万分の1地形図「榛名山」「前橋」を使用した。第56図は、箕郷町発行の「箕郷町平面図」24・26を使用した。
- 8 富岡竹ノ内遺跡1号古墳の石材計測は、石室で使われている状態で厚さを「縦」、正面間口を「横」、そして「奥行き」の3箇所とした。各箇所の最大値、単位はセンチメートルである。
- 9 本書では、浅間山の噴出物である浅間A軽石をAs-A、浅間B軽石をAs-B、浅間C軽石をAs-Cと表記した。

目 次

序

例言

凡例

目次

挿図目次

写真図版目次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	3
1 遺跡の位置と地形	3
2 周辺の遺跡	3
第3章 調査の経過	10
第4章 調査の方法と基本土層	11
第5章 富岡竹ノ内遺跡の調査	13
1 概要	13
2 旧石器確認調査	13
3 竪穴住居跡	14
4 古墳	32
5 1号土坑	58
6 1号石槨	58
7 溝	59
8 1号道	62
第6章 和田山寺久保遺跡の調査	65
1 概要	65
2 旧石器確認調査	66
3 縄文トレンチ調査	66
4 古墳	68
5 道	72
6 1号土器埋納土坑	74
第7章 調査の成果と課題	75

遺物観察表

写真図版

奥付

挿図目次

第1図	試掘トレンチ位置図	2
第2図	群馬県中央部地質図	4
第3図	富岡竹ノ内・和田山寺久保遺跡周辺地形図	4
第4図	周辺遺跡位置図	9
第5図	富岡竹ノ内・和田山寺久保遺跡グリッド配置図	11
第6図	富岡竹ノ内・和田山寺久保遺跡土層柱状図	12
第7図	富岡竹ノ内遺跡旧石器試掘トレンチ配置図	14
第8図	富岡竹ノ内遺跡1号住居跡平面・断面・出土遺物分布図	15
第9図	富岡竹ノ内遺跡1号住居跡出土遺物図	16
第10図	富岡竹ノ内遺跡2号・3号住居跡平面・断面図	17
第11図	富岡竹ノ内遺跡4号・5号住居跡平面・断面図	19
第12図	富岡竹ノ内遺跡4号・5号住居跡掘り方平面・断面図	20
第13図	富岡竹ノ内遺跡4号・5号住居跡出土遺物分布図	21
第14図	富岡竹ノ内遺跡4号・5号住居跡土層断面・出土遺物図	22
第15図	富岡竹ノ内遺跡6号住居跡平面・断面図	24
第16図	富岡竹ノ内遺跡6号住居跡掘り方平面・断面・遺物分布・出土遺物図	25
第17図	富岡竹ノ内遺跡7号住居跡平面・断面図	27
第18図	富岡竹ノ内遺跡7号住居跡掘り方平面・断面図	28
第19図	富岡竹ノ内遺跡7号住居跡遺物分布・出土遺物図	29
第20図	富岡竹ノ内遺跡8号住居跡平面・断面・出土遺物分布図	31
第21図	富岡竹ノ内遺跡1号古墳平面図	33
第22図	富岡竹ノ内遺跡1号古墳土層断面図	34
第23図	富岡竹ノ内遺跡1号古墳石室平面・断面図	35
第24図	富岡竹ノ内遺跡1号古墳石室展開図	36
第25図	富岡竹ノ内遺跡1号古墳石室掘り方平面・断面図	37
第26図	富岡竹ノ内遺跡1号古墳出土遺物分布図	38
第27図	富岡竹ノ内遺跡1号古墳出土遺物図(1)	39
第28図	富岡竹ノ内遺跡1号古墳出土遺物図(2)	40
第29図	富岡竹ノ内遺跡1号古墳出土遺物図(3)	41
第30図	富岡竹ノ内遺跡1号古墳出土遺物図(4)	42
第31図	富岡竹ノ内遺跡1号古墳出土遺物図(5)	43
第32図	富岡竹ノ内遺跡3号古墳平面・断面図	45
第33図	富岡竹ノ内遺跡3号古墳石室平面・断面図	46
第34図	富岡竹ノ内遺跡3号古墳石室掘り方平面・断面図	47
第35図	富岡竹ノ内遺跡3号古墳出土遺物分布図	48
第36図	富岡竹ノ内遺跡3号古墳出土遺物図	49
第37図	富岡竹ノ内遺跡4号古墳平面図	51
第38図	富岡竹ノ内遺跡4号古墳石室掘り方平面・断面・周堀断面図	52
第39図	富岡竹ノ内遺跡4号古墳出土遺物分布・出土遺物図	53
第40図	富岡竹ノ内遺跡5号古墳平面・断面図	55
第41図	富岡竹ノ内遺跡5号古墳石室平面・断面・掘り方平面図	56
第42図	富岡竹ノ内遺跡5号古墳出土遺物分布・出土遺物図	57
第43図	富岡竹ノ内遺跡1号土坑平面・断面図、1号石槨平面・断面図	58
第44図	富岡竹ノ内遺跡1号溝平面・断面図	59
第45図	富岡竹ノ内遺跡2号溝平面・断面・立面図	60
第46図	富岡竹ノ内遺跡2号溝平面・断面図	61
第47図	富岡竹ノ内遺跡2号溝出土遺物図	62
第48図	富岡竹ノ内遺跡1号道平面・断面図	63
第49図	遺構外出土遺物図	64
第50図	和田山寺久保遺跡旧石器試掘トレンチ配置・土層柱状図	65
第51図	和田山寺久保遺跡1号～5号土坑平面・断面図	67
第52図	和田山寺久保遺跡1号古墳平面・断面図	69
第53図	和田山寺久保遺跡2号古墳平面・断面図	71
第54図	和田山寺久保遺跡1号・2号道平面・断面図	73
第55図	和田山寺久保遺跡1号土器埋納土坑平面・断面・出土遺物図	74
第56図	和田山古墳群古墳分布図	76

写真図版目次

- PL. 1 1 東上空からの富岡竹ノ内遺跡全景
2 和田山寺久保遺跡南西上空から富岡竹ノ内遺跡を望む
- PL. 2 1 富岡竹ノ内遺跡4号古墳、5号古墳上空からの全景
2 北上空からの和田山寺久保遺跡全景
- PL. 3 1 富岡竹ノ内遺跡1号住居跡全景 西から
2 富岡竹ノ内遺跡1号住居跡遺物出土状態 西から
3 富岡竹ノ内遺跡1号住居跡炉全景 北から
4 富岡竹ノ内遺跡1号住居跡セクション 南から
5 富岡竹ノ内遺跡2号住居跡全景 西から
6 富岡竹ノ内遺跡2号住居跡セクション 西から
7 富岡竹ノ内遺跡3号住居跡全景 北から
8 富岡竹ノ内遺跡3号住居跡全景 西から
- PL. 4 1 富岡竹ノ内遺跡4号住居跡全景 北から
2 富岡竹ノ内遺跡4号住居跡Eセクション 東から
3 富岡竹ノ内遺跡4号住居跡遺物出土状態 北西から
4 富岡竹ノ内遺跡4号住居跡遺物出土状態 北から
5 富岡竹ノ内遺跡4号住居跡全景 東から
6 富岡竹ノ内遺跡4・5号住居跡全景 南から
7 富岡竹ノ内遺跡4・5号住居跡掘り方全景 東から
8 富岡竹ノ内遺跡4・5号住居跡掘り方全景 東から
- PL. 5 1 富岡竹ノ内遺跡5号住居跡全景 東から
2 富岡竹ノ内遺跡5号住居跡遺物出土状態 東から
3 富岡竹ノ内遺跡6号住居跡遺物出土状態 南から
4 富岡竹ノ内遺跡6号住居跡炉セクション 南から
5 富岡竹ノ内遺跡6号住居跡Aセクション 東から
6 富岡竹ノ内遺跡6号住居跡掘り方全景 南から
7 富岡竹ノ内遺跡7号住居跡遺物出土状態 南から
8 富岡竹ノ内遺跡7号住居跡全景 西から
- PL. 6 1 富岡竹ノ内遺跡7号住居跡掘り方全景 南から
2 富岡竹ノ内遺跡7号住居跡Bセクション 南から
3 富岡竹ノ内遺跡7号住居跡全景 東から
4 富岡竹ノ内遺跡7号住居跡炉確認状態 東から
5 富岡竹ノ内遺跡7号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 南から
6 富岡竹ノ内遺跡8号住居跡全景 南東から
7 富岡竹ノ内遺跡8号住居跡遺物出土状態 南東から
8 富岡竹ノ内遺跡8号住居跡Aセクション 南東から
- PL. 7 1 富岡竹ノ内遺跡4号住居跡南東隅遺物出土状態 北から
2 富岡竹ノ内遺跡1号溝全景 南から
3 富岡竹ノ内遺跡2号溝全景 東から
4 富岡竹ノ内遺跡2号溝全景 西から
5 富岡竹ノ内遺跡2号溝石垣近影 西から
6 富岡竹ノ内遺跡2号溝石垣近影 南から
7 富岡竹ノ内遺跡1号土坑全景 西から
8 富岡竹ノ内遺跡1号道Aセクション 東から
- PL. 8 1 富岡竹ノ内遺跡1号古墳上空からの全景
2 富岡竹ノ内遺跡1号古墳上空からの石室全景
3 富岡竹ノ内遺跡1号古墳石室全景 南西から
4 富岡竹ノ内遺跡1号古墳石室全景 西から

- 5 富岡竹ノ内遺跡1号古墳石室掘り方北西隅検出状況 西から
- 6 富岡竹ノ内遺跡1号古墳石室西側掘り方 南から
- 7 富岡竹ノ内遺跡1号古墳石室掘り方全景 南から
- 8 富岡竹ノ内遺跡1号古墳石室掘り方全景 南から
- P L . 9 1 富岡竹ノ内遺跡1号古墳石室掘り方セクション 南から
- 2 富岡竹ノ内遺跡1号古墳石室掘り方セクション 南から
- 3 富岡竹ノ内遺跡1号古墳石室掘り方セクション 南から
- 4 富岡竹ノ内遺跡1号古墳周堀Aセクション 南から
- 5 富岡竹ノ内遺跡1号古墳周堀遺物出土状態 北西から
- 6 富岡竹ノ内遺跡1号古墳作業風景 南から
- 7 富岡竹ノ内遺跡1号古墳作業風景 西から
- 8 富岡竹ノ内遺跡1号古墳作業風景 北から
- P L . 10 1 富岡竹ノ内遺跡3号古墳上空からの全景
- 2 富岡竹ノ内遺跡3号古墳石室上空からの全景
- 3 富岡竹ノ内遺跡3号古墳石室全景 北から
- 4 富岡竹ノ内遺跡3号古墳石室掘り方セクション 南から
- 5 富岡竹ノ内遺跡3号古墳石室掘り方セクション 南から
- 6 富岡竹ノ内遺跡3号古墳石室掘り方裏込め被覆の状態 南西から
- 7 富岡竹ノ内遺跡3号古墳石室掘り方裏込め被覆の状態 西から
- 8 富岡竹ノ内遺跡3号古墳玄室北西隅検出状況 東から
- P L . 11 1 富岡竹ノ内遺跡3号古墳掘り方全景 南から
- 2 富岡竹ノ内遺跡3号古墳石室掘り方全景 南から
- 3 富岡竹ノ内遺跡3号古墳前庭遺物出土状態 南から
- 4 富岡竹ノ内遺跡3号古墳周堀遺物出土状態 南西から
- 5 富岡竹ノ内遺跡3号古墳Aセクション 東から
- 6 富岡竹ノ内遺跡3号古墳作業風景 北から
- 7 富岡竹ノ内遺跡4号古墳上空からの全景
- 8 富岡竹ノ内遺跡4号古墳全景 南から
- P L . 12 1 富岡竹ノ内遺跡4号古墳Dセクション 西から
- 2 富岡竹ノ内遺跡4号古墳Cセクション 北から
- 3 富岡竹ノ内遺跡4号古墳周堀遺物出土状態 東から
- 4 富岡竹ノ内遺跡4号古墳作業風景 北から
- 5 富岡竹ノ内遺跡5号古墳上空からの全景
- 6 富岡竹ノ内遺跡5号古墳石室上空からの全景
- 7 富岡竹ノ内遺跡5号古墳石室全景 南から
- 8 富岡竹ノ内遺跡5号古墳石室全景 東から
- P L . 13 1 富岡竹ノ内遺跡5号古墳石室閉塞状態 南から
- 2 富岡竹ノ内遺跡5号古墳石室西玄門 北東から
- 3 富岡竹ノ内遺跡5号古墳石室掘り方全景 南から
- 4 富岡竹ノ内遺跡5号古墳石室作業風景 南から
- 5 富岡竹ノ内遺跡1号石槨全景 北西から
- 6 富岡竹ノ内遺跡1号古墳石室作業風景 南西から
- 7 富岡竹ノ内遺跡3号古墳玄室西壁 南東から
- 8 富岡竹ノ内遺跡3号古墳周堀遺物出土状態 北西から
- P L . 14 1 富岡竹ノ内遺跡旧石器試掘1号トレンチ 東から
- 2 富岡竹ノ内遺跡旧石器試掘2号トレンチ 南から
- 3 富岡竹ノ内遺跡旧石器試掘3号トレンチ 南から
- 4 富岡竹ノ内遺跡全景 北西から
- 5 富岡竹ノ内遺跡作業風景 北西から
- 6 富岡竹ノ内遺跡作業風景 北西から

- 7 富岡竹ノ内遺跡作業風景 東から
 8 富岡竹ノ内遺跡作業風景 南西から
- P L . 15 1 富岡竹ノ内遺跡作業風景 南から
 2 富岡竹ノ内遺跡作業風景 東から
 3 富岡竹ノ内遺跡作業風景 北から
 4 富岡竹ノ内遺跡作業風景 東から
 5 富岡竹ノ内遺跡作業風景 北西から
 6 富岡竹ノ内遺跡作業風景 北東から
 7 富岡竹ノ内遺跡作業風景 南から
 8 富岡竹ノ内遺跡作業風景 北東から
- P L . 16 1 和田山寺久保遺跡全景 南から
 2 和田山寺久保遺跡1号古墳全景 南から
 3 和田山寺久保遺跡1号古墳南側セクション 北東から
 4 和田山寺久保遺跡1号古墳北側セクション 東から
 5 和田山寺久保遺跡1号古墳近影 北東から
 6 和田山寺久保遺跡1号古墳近影 東から
 7 和田山寺久保遺跡1号古墳墳丘断面 南から
 8 和田山寺久保遺跡1号古墳と1号道全景 南から
- P L . 17 1 和田山寺久保遺跡2号古墳全景 南から
 2 和田山寺久保遺跡2号古墳南側セクション 南東から
 3 和田山寺久保遺跡2号古墳北側セクション 南東から
 4 和田山寺久保遺跡1号土器埋納土坑遺物出土状態 南から
 5 和田山寺久保遺跡1号土器埋納土坑セクション 南から
 6 和田山寺久保遺跡1号土器埋納土坑遺物出土状態 南から
 7 和田山寺久保遺跡1号土器埋納土坑掘り方 南から
 8 和田山寺久保遺跡2号土坑全景 南から
- P L . 18 1 和田山寺久保遺跡3号土坑全景 南から
 2 和田山寺久保遺跡4号土坑全景 南から
 3 和田山寺久保遺跡5号土坑全景 南から
 4 和田山寺久保遺跡1号道Bセクション 西から
 5 和田山寺久保遺跡2号道確認状態 北から
 6 和田山寺久保遺跡2号道全景 北から
 7 和田山寺久保遺跡2号道Dセクション 南から
 8 和田山寺久保遺跡1号トレンチ全景 北から
- P L . 19 1 和田山寺久保遺跡旧石器試掘1号トレンチ 南から
 2 和田山寺久保遺跡旧石器試掘1号トレンチ 南西から
 3 和田山寺久保遺跡2号トレンチ全景 北から
 4 和田山寺久保遺跡旧石器試掘2号トレンチ 南から
 5 和田山寺久保遺跡3号トレンチ全景 南から
 6 和田山寺久保遺跡旧石器試掘3号トレンチ 南西から
 7 和田山寺久保遺跡旧石器試掘4号トレンチ 南西から
 8 和田山寺久保遺跡作業風景 北から
- P L . 20 富岡竹ノ内遺跡1号・4号・5号～7号住居、1号古墳
- P L . 21 富岡竹ノ内遺跡1号古墳
- P L . 22 富岡竹ノ内遺跡1号古墳、3号古墳、4号古墳
- P L . 23 富岡竹ノ内遺跡5号古墳、2号溝
 富岡竹ノ内遺跡遺構外、和田山寺久保遺跡遺構外
 和田山寺久保遺跡1号土器埋納土坑

報告書抄録

書名ふりがな	とみおかたけのうち・わだやまてらくほいせき
書名	富岡竹ノ内・和田山寺久保遺跡
副書名	一般県道箕郷板鼻線地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	380
編著者名	女屋和志雄
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20060728
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	とみおかたけのうち・わだやまてらくほいせき
遺跡名	富岡竹ノ内・和田山寺久保遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんたかさきしみさとまちとみおか・わだやま
遺跡所在地	群馬県高崎市箕郷町富岡・和田山
市町村コード	10202
遺跡番号	
北緯（日本測地系）	362249
東経（日本測地系）	1385670
北緯（世界測地系）	362259
東経（世界測地系）	1385658
調査期間	20050801-20051130
調査面積	2616.3
調査原因	道路建設工事
種別	集落／墳墓／交通
主な時代	古墳／中世／江戸
遺跡概要	集落-古墳-竪穴住居8+土坑1-土師器／墳墓-古墳-古墳6+石槨1+土器埋納土坑1+墓道1-土師器+須恵器+鉄製品／交通-中世-道1／その他-溝2+道1
特記事項	和田山古墳群の北端にあたる。古墳だけではなく、墓道や土器を埋納した祭祀跡は注目される。

第1章 調査に至る経過

本事業は、高崎土木事務所により計画された一般県道箕郷板鼻線地方特定道路整備事業に伴うものである。県道の整備は、箕郷の市街地を迂回させる道路の新設と現道の改良が目的である。榛名白川の東、箕郷町下芝地内では工事が始まり、川の西でも施工の動きが出たのを受けて、平成16年11月17日～19日、県教育委員会文化課が試掘し、その後関係機関との協議をへて決定したものである。

試掘は、榛名白川の西から整備区間の終点まで、県道用地と町道用地あわせて面積15,539.2㎡が対象である。遺構確認面の設定、遺構および遺物包含の確認を目的に、重機で幅1mの試掘溝を20箇所を設定した。台地上が1～15、榛名白川沿いの沖積低地が16～20である（第1図）。

群馬県文化財情報システムによると、対象とした範囲の台地上には縄文、古墳、奈良、平安の包蔵地竹ノ内遺跡があり、石室の露出した古墳もあるなど、周知された所である。試掘では、古墳4基、中世の溝1条のあることが明らかとなった。

この結果は、県文化課より高崎土木事務所長、箕郷町教育委員会教育長に通知された。工事の設計も完了し、包蔵地の現状変更が余儀なくされることから、県文化課と高崎土木事務所との間で協議、平成17年度事業として本調査する運びとなった。

平成17年4月、当事業団は調査を8月から10月に計画、調査担当などを決定し準備に入る。

同年6月10日、県文化課より下記の3点が当事業団に通知された。

- 1 遺跡の名称は、県道用地を富岡竹ノ内遺跡、町道用地を和田山寺久保遺跡とする。
- 2 調査の面積は、2,865㎡とする。
- 3 経費は、調査と整理報告を一括とする。

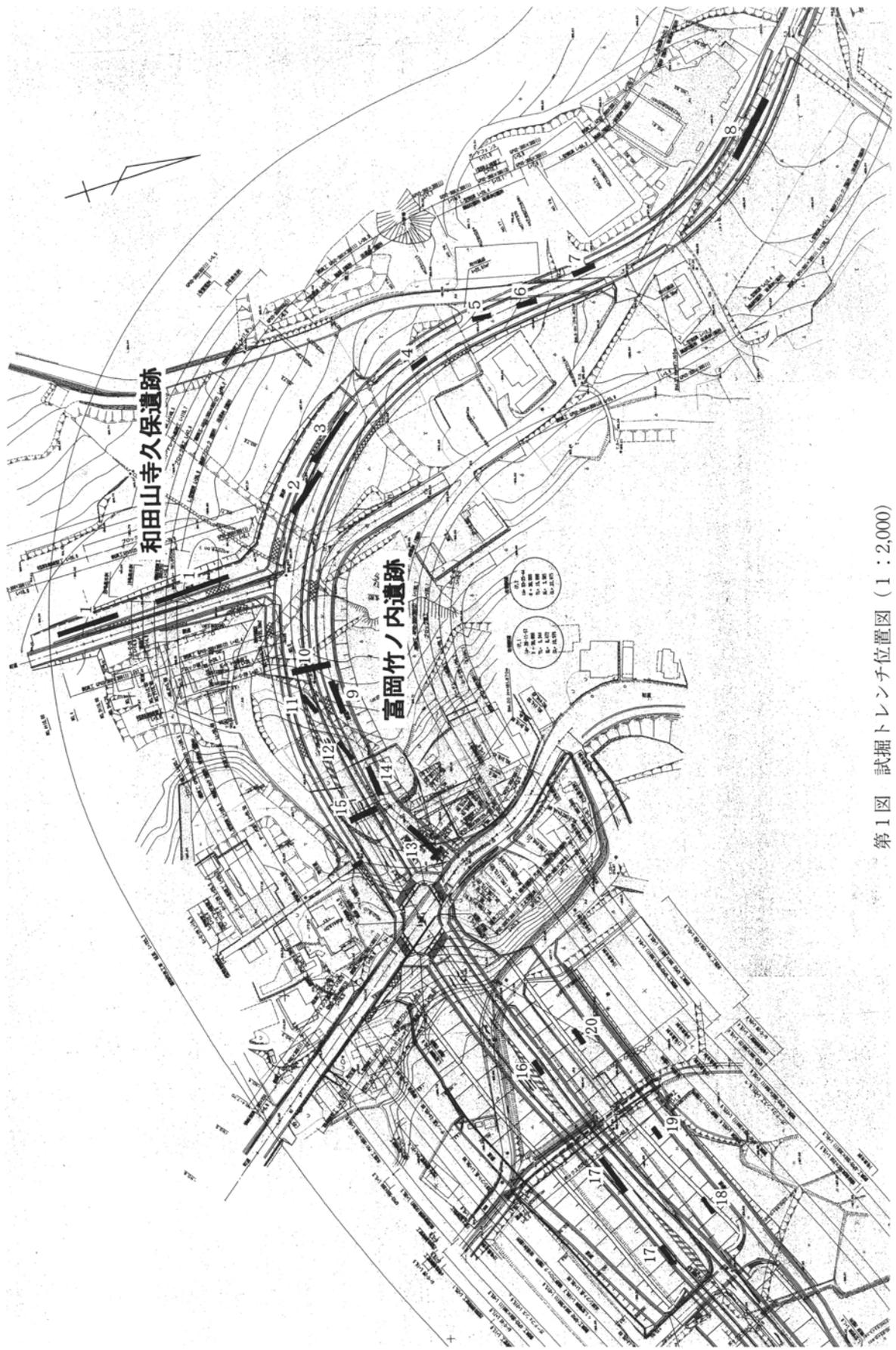
その後、調査の対象面積が拡張のため3,032㎡に変更された。このうち、2,616㎡を調査した。

6月17日、調査の開始が迫りこれまでの内容をうけて、県文化課、高崎土木事務所、当事業団の三者ではじめての現地立ち会いが行われた。協議の内容は、事務所用地、残土置き場、上物、草刈り、関係事務の5点である。ここで確認されたのは、事務所は、県道用地内、調査区に隣接した一画に設置する。残土は、榛名白川沿いの用地内に仮置きする。上物は、地元優先とする。草刈りは、高崎土木事務所が実施する。の以上4点である。

また、改めて確認した内容は以下である。調査に伴う契約は7月1日付とすること。平成17年度中の工事施工はないこと。調査終了後、工事施工に際して現道下の立ち会いは県文化課が行うこと。報告は、遺構量にもよるが平成17年度に実施、刊行は18年度とすること。の4点である。

7月1日、高崎土木事務所と当事業団との間で発掘調査・整理の受託契約を締結。

同日、当事業団と株式会社シン技術コンサル前橋支店との間で埋蔵文化財遺跡掘削工事の受託契約を締結する。



第1図 試掘トレンチ位置図 (1:2,000)

第2章 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置と地形

富岡竹ノ内遺跡・和田山寺久保遺跡は、和田山古墳群の一画、高崎市箕郷町富岡、同和田山に位置する（箕郷町は、群馬郡に属していたが平成18年1月23日高崎市に編入合併した）。榛名山の東南麓、十文字面と呼ぶ丘陵性台地上のひとつで、足元には一級河川榛名白川が流れ、台地を一步西に入ると関東随一といわれる箕郷梅林がある。台地の最高点は標高192m、そこに立てば相馬ヶ原扇状地、遠くは利根川沿いの前橋、高崎の市街地まで見渡すことができる（第3図）。

榛名山は、おおよそ30万年以上前からの活動歴をもつ複合火山である。最高峰は標高1449mの掃部ヶ岳、連なる峰は10を越す。それらは火口を次々と移してできた峰々で、噴火のたびに押し出された火砕流や泥流は麓に特徴ある地形を作った。

箕郷町付近の地形は、大きく3つに分けられる（第3図）。

榛名白川の西に、約20万年前ころの大火砕流でできた十文字面、井野川の東には約1万4千年前の陣馬岩屑なだれでできた相馬ヶ原扇状地、この2つの中間、榛名白川と井野川の間小さくクサビのようにあるのが、6世紀二ッ岳の噴火による泥流が堆積してできた白川扇状地である。

十文字面は、北の車川から南端の烏川まで、細くて長い丘陵性台地が特徴で、深い沢や谷で樹枝状に開析されている。戦後になり中部用水、さらに群馬用水が完成するまでは、細々とした沢水だけが頼りの乏水地帯であった。現在では、養蚕から転換した果樹の栽培が盛んで、安中市秋間と並ぶ群馬を代表する梅の産地に発展している。

相馬ヶ原扇状地の特徴は、東南麓全体をすっぽりと覆うほどの広さである。東は利根川、南端は高崎市北部にまで達している。西の一画に箕郷町の市街がある。中腹から流れ出す井野川をはじめとした、中小の河川にも恵まれてはいるものの、いずれも水量に乏しく、最近でこそ前橋、高崎の近郊では変貌著しいが、ひと昔前までは養蚕に米麦の複合経営が一般の純農地帯である。

東南麓ではめずらしく、水田が続くのが白川扇状地である。これも戦後の食糧増産、圃場整備、それ以前江戸時代の新田開発による積み重ねの結果である。しかし、ここを通過する北陸新幹線の建設に伴う発掘調査では、厚い泥流の下から被災前の水田や畠、それを基盤にした村の跡が発見されている。今も昔も、穀倉地帯といったところであろうか。

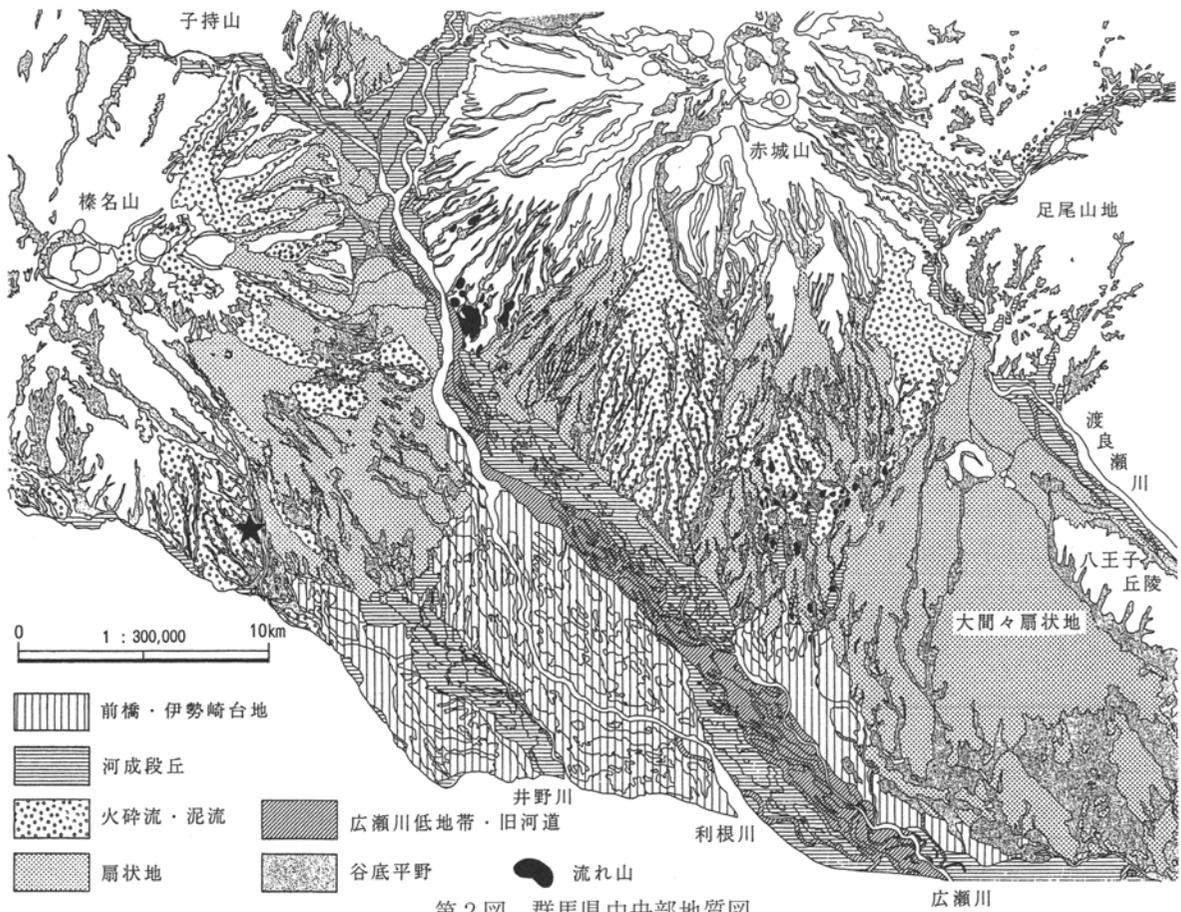
2 周辺の遺跡

榛名山は、東にある赤城山とよく対比して語られる。似たもの同士、榛名の側に優る点があるとすれば、西から伝わる文化の窓口、玄関という地の利であろうか。米、鉄、須恵器、時代をかえた革新技術はどれもこの山麓を通過した。東山道をここまで来た人々には、山また山の信濃をぬけて、ようやくたどりついた待望の地である。広々とした平野を実感したことだろう。

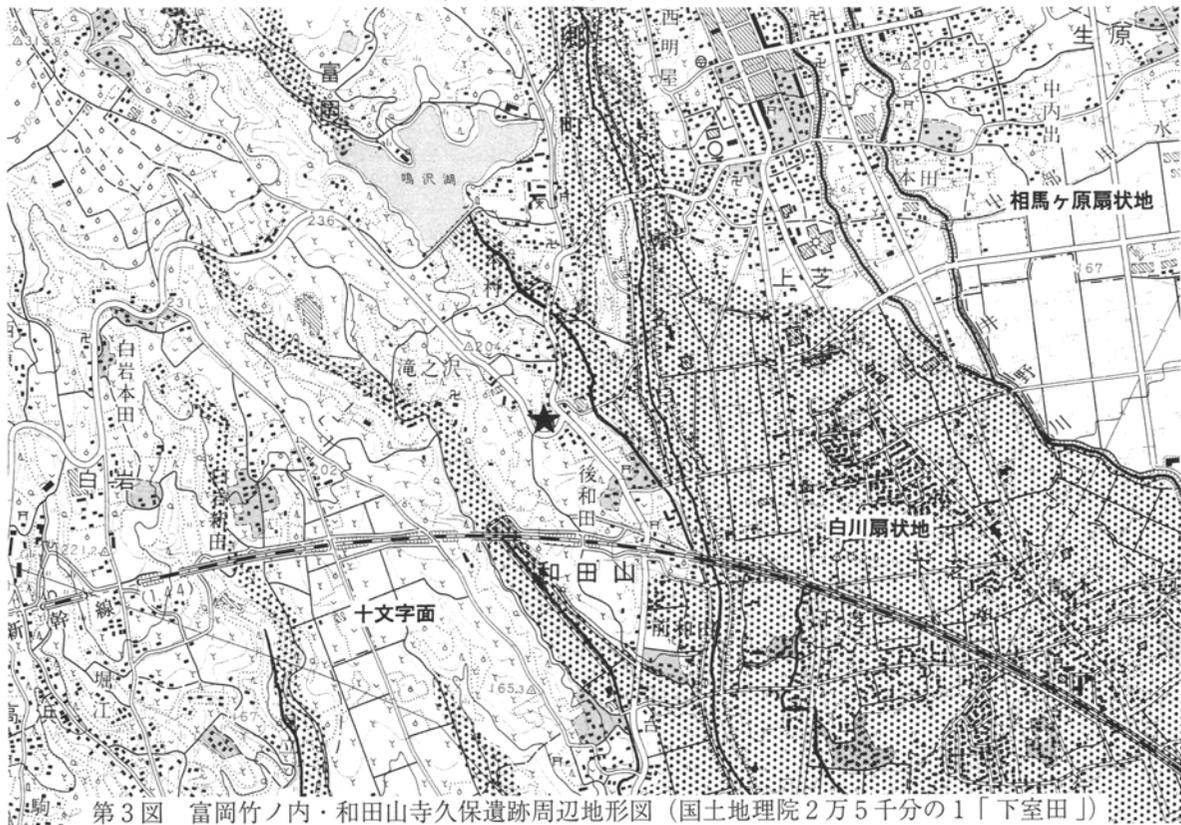
榛名山の東南麓は、昭和50年代以降、各種の開発に伴い、発掘調査が盛んに行われてきた。前橋、高崎の市街地に近いこと、周知された遺跡や包蔵地の多いことが理由である。発掘調査の多さはここだけに限った

群馬県史通史編1付図2を簡略化

★ 富岡竹ノ内遺跡・和田山寺久保遺跡



第2図 群馬県中央部地質図



第3図 富岡竹ノ内・和田山寺久保遺跡周辺地形図 (国土地理院2万5千分の1「下室田」)

わけではないが、周知された遺跡には国指定だけでも、群馬町の保渡田古墳群や北谷遺跡、上野国分寺、箕郷町の箕輪城など、地域の拠点や広い社会基盤なくしては成り立たないものばかりである。この顔ぶれを見るだけでも、井野川流域から群馬郡への発展ぶり、そして西上野の動向を左右する中心地域であったことがわかる（第4図の番号は、本文の各遺跡と対応する）。

旧石器時代

鐮川流域と赤城山麓の間にぽっかりとできた空白、それが榛名の山麓であった。広い裾野、厚く堆積したローム層、どれをとっても不足はない。長野県産黒曜石の流通問題ひとつをとってみても、欠くことができない地域である。最近になって、十文字面にある5遺跡で待望のまとまった資料が出土した。研究は、始まったばかりである。

遺跡は、開析谷の谷頭に近い所と反対に平野を望む台地の先端にもある。異なる2つのタイプは、今後の目安となるだろう。榛名町三ツ子沢中遺跡（5）は、谷頭の例である。約3万年前の暗色帯から、黒色安山岩を素材にしたナイフ形石器を特徴とする環状ブロックが発見されている。これを大きなムラとすれば、類例は同じ榛名町の白岩民部遺跡（7）、白川傘松遺跡（9）である。まだ、台地ごとに、とは言い切れないが、赤城山麓と似た地形環境にあるだけに遺跡が分布する密度は高そうだ。

同じ暗色帯でも、箕郷町和田山天神前遺跡（25）からは黒曜石を素材にした石器が出土している。台地の先端で規模は小さく、さしあたり狩りの途中のキャンプ跡であろうか。この時期、県内ではきわめて稀な黒曜石使用例だけに、流通経路を知る貴重な1地点となっている。

このほかには、榛名町白川笹塚遺跡（8）や箕郷町宮地遺跡から槍先形尖頭器や細石刃が出土している。

縄文時代

群馬町誌によれば、東南麓の遺跡のことを、前期中葉～後半（黒浜式期～諸磯a式期）と中期後半の2つの時期にピークがあること。相馬ヶ原扇状地に遺跡が少ないのは、この時代の半ばまで扇状地の形成が続き、以後もやや湿潤な環境であったためと指摘している。高燥な台地に恵まれた十文字面に遺跡が多い。鬼形芳夫氏は、十文字面を歩いた一人、地表からの観察とはいえ足で稼いだ実感が、一台地に一遺跡である。

榛名町の三ツ子沢中遺跡、白川傘松遺跡は、中期後半の大集落である。ともに住居の数は50を越し、拠点集落らしくヒスイの大珠や玉斧といった威信財を持ち、広い交流範囲を物語っている。この周囲には、鬼形氏が指摘しているように小さなムラが点在したであろうことは十分考えられる。白川傘松遺跡と谷ひとつ隔てた本遺跡などは、その例のひとつである。

早期の箕郷町はるな郷遺跡は、標高600mという高所にある。一方烏川沿いの沖積地には、晩期氷式土器と石鍬が出土した榛名町中里見根岸遺跡がある。そして上流には、弥生時代中期の倉測村の遺跡がある。はるな郷遺跡までの間は当然としても、次の時代を予感させる低地には今後注目である。

弥生時代

農耕の開始で、井野川流域がこれまでと打って変わって活況を呈する。湿潤だったといわれる地形が好まれたのである。弥生時代の水田と呼べる資料はまだないが、川筋に沿った沖積地を点々と開墾していったようだ。一例を群馬町南部遺跡群にみると、中核となるムラは熊野堂遺跡（19）。規模は大きく、中期後半から後期まで長期にわたる。そこで使われた栗林系土器は、櫛描文を特徴とし中部高地の影響を受けている。こ

のように、時代の波は西からやって来た。

西からの新規参入は、地域に緊張状態を生んだらしく、防禦上濠で囲ったムラ、環濠集落が出現する。近くでは高崎市浜尻遺跡、前橋市清里庚申塚遺跡が好例で、数キロ置きという適度な距離感に拠点らしさが現れている。次の後期には、防禦する必要も薄れたのか、環濠を持った集落は姿を消す。樽式土器の時代、開発も点から面へと幅を広げたのであろう。遺跡は、流域の支流ごとに数を増している。井野川でいえば、中流域から下流域までがひとつの社会にまとまりだした。方形周溝墓に眠るのはムラのリーダーである。熊野堂遺跡には、頭ひとつ飛び抜けた、前方後方型の周溝墓がある。

その頃の十文字面は、箕郷町中善地遺跡（2）で再葬墓が発見されている。狭い谷底の平野に見合った小さなムラがある景色だろう。それでも遺跡の数は多い。尾根筋が古く、後期になると下流の勢いに取り込まれて行くのか、遺跡は台地の先端に集まる。

古墳時代

地域最大の出来事は、二ッ岳の噴火である。集落の移動や畠作への転換、豪族居館の廃絶、大型前方後円墳の築造停止など、地域が受けた影響は大きい。

噴火前、井野川沿いには水田が多く、川の東には畠が続いていた。弥生時代の伝統の上に、さらに肥沃さを増したというのがこの頃の姿であろう。これを象徴するのが、保渡田にあるこの時期県内最大級井出二子山（15）、八幡塚（17）、薬師塚（16）の3古墳と三ッ寺の豪族居館（18）である。保渡田では、現在も発掘が続く、県内ここでしか見られない中島や王権交代の場を表現した埴輪配列など、次々と興味深い事実が明らかになっている。最大級だけでなく、被葬者は革新的な人物でもあったようだ。最近も新発見があった。もう一つの豪族居館北谷遺跡（22）である。発掘は始まったばかり、どんな新事実が飛び出すか、期待は大きい。

5世紀は、全国的に開発の世紀といわれる。鉄器の普及、農耕技術の向上が、それまでの動きを加速させたのである。ここでは、4世紀浅間の噴火をのりこえたのも小区画水田という工夫があった。二ッ岳1度目の噴火も克服したかにみえる。この間の動きは、芦田貝戸（29）、御布呂（28）、同道（27）、熊野堂の各遺跡で広く知られたところである。

しかし、その影にいた技術者集団、渡来人の存在を忘れることはできない。豪華な飾履を出した積石塚の箕郷町谷ツ古墳（13）、そばにある下芝五反田遺跡（12）の漢式土器を見て、若狭徹氏は在日1世がいたと推定している。高崎市剣崎長瀬西古墳からは半島製の馬具も出た。ここも積石塚が群をなしている。早くも5世紀に馬の飼育か、と話題になるのも渡来人の姿がちらつくからだ。5世紀の躍進の裏には渡来人の、まさに人馬一体となって活躍する姿があったのであろう。

そこに2度目の噴火が起きた。前兆は1度目から続いていたのだろう。箕郷町下芝天神遺跡（26）では、土器を山のように積み上げて祈りを捧げている。しかし、その甲斐もなく肝心の水田は厚い泥流の下、復旧は絶望的である。一時は途方に暮れたことであろう。残る畠で急場をしのぎ、いつしか本腰据えてというのが転換の真相ではないか。噴火後、台地の奥に遺跡が増えるのは、新天地を求めた結果である。

保渡田古墳群のような大型の古墳は姿を消した。代わって登場するのが、平野を取り巻くように作られた群集墳である。群馬町金古、箕郷町生原、そして榛名白川沿いの箕郷町和田山、金敷平（3）、榛名町本郷に数十基ずつがまとまっている。泥流で荒廃した水田地帯をとりまく開発前線である。

群集墳の背景には、全国的な中小農民の自立がある。古墳は、開発の世紀を経てようやく手に入れること

ができた特権だった。しかし、古墳という形はとるが、かつての姿はない。山寄せとよぶ省力化工法を採用して量産化、さらに追葬を繰り返して需要にこたえてきた。最大の特徴は、耕地が何より大事、墓は決められた場所を作ること。これが新しい社会のルールである。

噴火後に見えてきたのは、土地の利用が規制される、という次の時代である。

古代

律令制度のもと、榛名山麓の一带は群馬郡となる。中心には国府や国分寺が置かれ、その南を東山道が東西に通過していた。和名抄によると、長野、井出、小野、八木、上郊、畦切、鳥名、群馬、桃井、有馬、利刈、駅家、白衣の13郷からなる。これに八木院、小野院と呼ぶ役所や、官牧の有馬鳥牧、利刈牧が加わる。さすがに大郡である。しかし、これは平安時代の史料にあることで、律令当初の奈良時代のままなのか検証が必要だ。例えば、藤原京からでた木簡には、上毛野国車評桃井里とある。記録と実態の間に差があるようだ。発掘が果たす役割は大きい。

東南麓は、地名をたよりにすれば長野、井出、上郊、3つの郷のあたりであろうか。国府(24)の西1里という距離では、国分寺(23)の七重の塔はいやでも目に入るであろうし、国府に通うことも十分可能だ。国府、国分寺を支えた地域、こんな表現がお似合いか。

八木院と推定されるのが、高崎市大八木屋敷遺跡(20)である。8世紀代の軒を並べた掘立群は見事で、堀に囲われたところはいかにもお役所らしい。すぐ近くにある下小鳥遺跡では漆紙文書、同じく熊野堂遺跡では奈良三彩小壺、和銅開珎が出土している。そして小八木志志貝戸遺跡(21)には富豪の居宅がある。どれも、庶民にはなじみの少ないものばかりである。八木院に直接関係したか、それとも国府などとの往来があったことを示す。この地域ならではの興味深い資料である。

掘立群は、榛名町高浜天神遺跡(6)にもある。ここは奥原古墳群(10)に近く、鳥川の南は須恵器を焼く碓氷郡秋間の谷である。須恵器の流通した範囲は、群馬郡一円にも及んでいる。八木院が田地を管理したとすれば、高浜天神遺跡は秋間産の土器かそれとも牧の馬だらうか。箕郷町唐松廃寺は、ヤマの奥深く標高700mの高所にある。山頂を意識していた時代である。伊香保、甲波宿弥、榛名の三座は延喜式内社である。信仰に生きた人たちだけでなく、この頃にもなればヤマへの出入りは、案外多かったのではなかろうか。

最後に田畠の様子はどうか。どこを掘っても水田が出る。ややオーバーな表現であるが、発掘された面積だけでも相当のものである。扇状地の細い沢、十文字面の深い谷筋にまで進出している。これが天仁元年(1108)、浅間山噴火前の景色である。

左大臣藤原宗忠の日記「中右記」には、その噴火のことが書かれている。冒頭は上野国内壊滅という惨状を伝えるが、結びではおらが領地からの上がりかどうなるのか、と本音がのぞいている。京の都でこう心配したのは、宗忠ひとりだけではあるまい。その後の記録には、租税免除とある。それでも復旧の形跡に乏しく、宗忠の不安は的中した。しばらくは、上野国内中、鳴りをひそめたかのようである。

中世

ふたたび山麓の時代がやってきた。箕輪築城、長野氏の台頭である。

長野氏は、国庁在庁官人が長野郷に土着したとする説が有力である。しかし、鎌倉時代をうめる史料は少なく、史実でたどれるのは15世紀の末から永禄九年の滅亡までのおよそ百年間、箕輪城を本拠にした尚業―憲業―業政―業盛の4代である。その箕輪城(4)は、一説に明応から大永年間、榛名町鷹留城とともに尚

業により築城される。それまでは、箕輪城にも程近い高崎市北部の水田地帯に、長野氏当人や家臣団も居館を構えた。そんな一つが高崎市史跡北新波の砦跡（11）である。方一町あまり、箕輪城とは格段の差だが濠と土塁で日頃の備えを忘れていない。むしろ、その差に飛躍の跡が読める。

長野氏といえば上州一揆の有力者、箕輪城を代名詞とするが、農民領主としての堅実な一面がある。烏川の水を高崎北部一帯に引いた、長野堰用水である。今もって現役、榛名町本郷から、東は倉賀野まで延びている。山に籠もる姿が強調されるが、平野にも縄張りを広げている。根は、農民なのだ。

高崎市浜川町の時宗来迎寺（14）には、長野氏の墓といわれるものがある。榛名塔と呼ぶ独特の多宝塔には、至徳、明德、応永、長禄、明応などの室町時代の年号が刻んであり、箕輪城内御前曲輪の井戸から出土した石造物とともに、長野氏の活躍年代を知る傍証となっている。しかし、禅尼、阿弥陀仏といった「名号」程度で長野氏の誰と特定できるものはなく、課題は多い。ちなみに来迎寺で出土した瓦は、剣頭文と三巴文が特徴で13世紀代までさかのぼる。

同じ頃、箕郷町和田山天神前遺跡には浄土系寺院が開かれている。銅製の信貴型水瓶が出土して話題となった。来迎寺とともに、空白の鎌倉時代に迫る資料である。榛名塔は、東南麓に点々と残されている。戦国の世と無縁ではあるまい。「講中」や「結縁」の文字に極楽浄土を願う庶民の願いがこめられている。長野氏を支えた無名の人たちがいる。

落城後の箕輪には、武田氏、織田氏、北条氏とめまぐるしく代替わりした後、天正18年徳川家康の命を受け井伊直政が入城する。これで落ち着いたかみえたが、早くも慶長3年には高崎城に移っている。短い時間ではあったが、城内や城下町の整備をすすめ、溜池の浚渫、用水の修築を命ずるなど経営に意欲のあるところを見せていた。その後、地域を守ったのは帰農した武士たちである。

参考文献

- 箕郷町誌編纂委員会「箕郷町誌」1975
- 群馬町誌編纂委員会「群馬町誌通史編上 原始古代中世・近世」2001
- 群馬県文化事業振興会「新世紀ぐんま郷土史辞典」2003
- 群馬県史編纂委員会「群馬県史通史編1 原始古代1」1990
- 若狭 徹「古墳時代の地域社会復元 三ッ寺I遺跡」新泉社 2004
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の遺跡1～7」上毛新聞社 2004・2005
- 鬼形芳夫「遺跡の動態と集団関係―榛名山東南麓における縄文時代遺跡の現状と課題」
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「年報」5 1988



第4図 周辺遺跡位置図 (1:50,000)

第3章 調査の経過

調査は、平成17年8月から11月まで、のべ4箇月をかけて行われた。台風の影響などあったが、この間天候にも恵まれ、作業は順調に推移した。縄文までが1面、旧石器試掘を2面として作業した。検出した遺構は、下記のとおりである。

富岡竹ノ内遺跡は、円墳4基、石槨1基、古墳時代の住居8軒、土坑1基、溝2条、道1条である。

和田山寺久保遺跡は、円墳2基、土坑5基、道2条、土器埋納土坑1基である。

出土した遺物は、2つの遺跡を合わせて遺物収納箱13箱である。

8月

1日、和田山寺久保遺跡の表土掘削をもって調査を開始する。その後、富岡竹ノ内遺跡に移り17日終了した。3日から17日まで遺構確認をする。遺構は、試掘の予測とは異なり、2つの遺跡あわせて円墳6基のほか土坑と溝、道さらに住居までであることが判明した。

和田山寺久保遺跡は、12日から遺構の精査を開始する。作業は、平坦なことから順調に進む。この間、縄文土器が古墳の周堀などから出土していたため、1面の終了後に改めて遺構確認を行うことにした。

富岡竹ノ内遺跡は、15日から精査を開始する。東西で10mもの高低差、これに3段の削平面までであることから作業は苦慮する場面が多く、各遺構から出る残土の移動は重機で不足を補った。遺構は調査区の東ほど多くなり、4号古墳は半分以上を調査区外に残していた。4号古墳を完掘するため、期間延長をふくむ調査区の拡張案が浮上する。この状況は、ただちに担当課長を通じて高崎土木事務所に報告する。24日には県文化課が現状を確認、結論を急ぐこととした。

26日、和田山寺久保遺跡の1面全景撮影を行う。富岡竹ノ内遺跡では、1号古墳の石室調査を開始する。

9月

和田山天神前遺跡では、縄文時代の遺構確認のため4箇所のトレンチ調査を行う。期待をしたが、検出したのはしみ状の土坑だけであった。トレンチをそのまま利用して、旧石器の試掘を開始する。暗色帯までを対象にしたが、遺物は出土せず、断面の記録をして終了した。

富岡竹ノ内遺跡は、拡張を前提に各遺構の調査を急ぐ。15日、当初の範囲で1面全景撮影を行う。以後、掘り方調査にむけて補足の作業をする。

10月

4日、高崎土木事務所と県文化課、当事業団との協議で、300m²の拡張と1箇月の期間延長が決定する。調査工程は変更、旧石器試掘と重機搬入路に面した3号古墳、5号古墳を最優先に作業した。この間の17日から27日まで拡張部分の表土を掘削し、次の準備にはいる。

11月

上旬に旧石器試掘が終了し、拡張部分の調査が始まる。全貌を現した4号古墳には住居4軒が重複していた。搬入路の下には2号溝があり、予想外の展開に時間を要したが16日拡張部分を中心に全景撮影を行う。以後、古墳と住居の掘り方の調査を行い、28日にすべての作業を終了した。

整地は、和田山寺久保遺跡が11月21日から24日まで、富岡竹ノ内遺跡が24日から12月2日まで行い終了した。

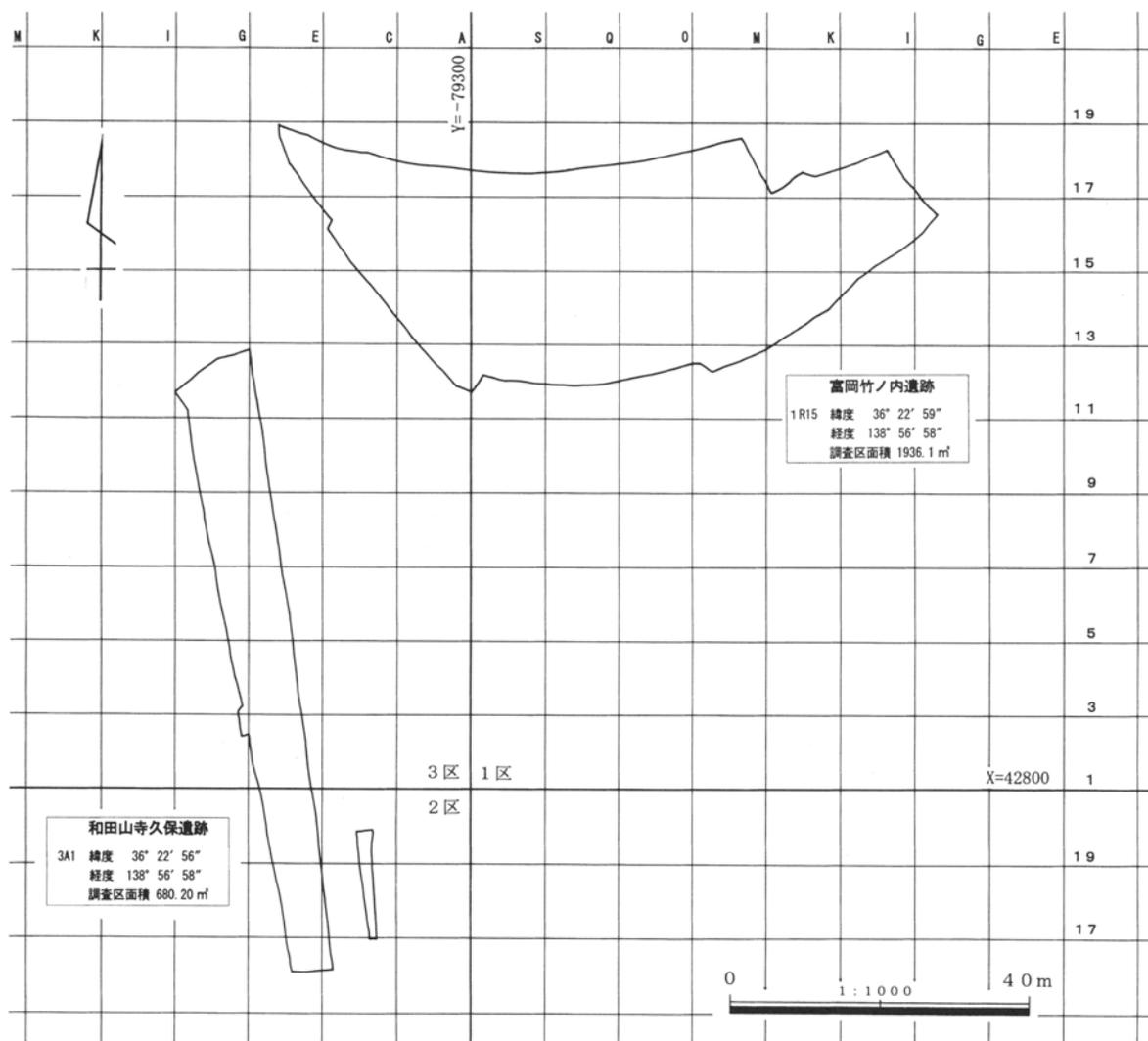
第4章 調査の方法と基本土層

2つの遺跡は、県道をはさんで隣接している。試掘により、土層の堆積状態も同じであることが報告されていた。上記の内容から調査の方法、基準土層を統一して作業した。

1 調査用のグリッドの表記について

グリッドは、国家座標第IX系（2002年4月改正世界測地系）を用いて5mを基準に設定した。グリッドの表記は、第5図のように100m単位で大区画を設定。この中を5m単位で細分し、東から西にA～T、南から北に1～20をつけた。グリッドを特定するには、一例として3A1グリッドとした。遺構図の作成をはじめ、遺物の取り上げや注記、遺構の記録写真の撮影など、諸作業で使用した。

水準点は、和田山寺久保遺跡が192.00m、富岡竹ノ内遺跡が191.50m、188.70m、183.70mである。



第5図 富岡竹ノ内・和田山寺久保遺跡グリッド配置図

2 調査記録の作成方法について

遺構の図化は、上記グリッド杭を使い、平面、断面ともに1:20、1:40を基本として個別に作成した。平板測量と電子平板測量を併用、一部を除き測量会社に委託した。全体図は、個別図をもとに編集作成した。

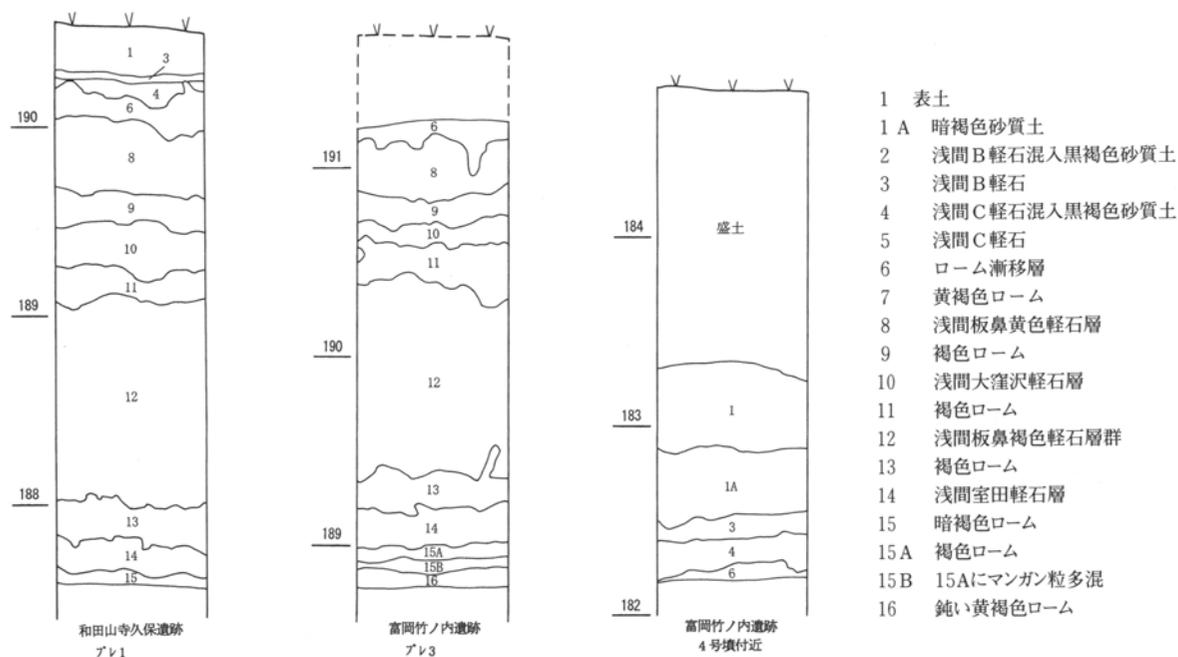
写真撮影は、中型と小型のカメラを併用し、白黒フィルム、カラースライドフィルムを使用した。撮影後のフィルムは、シート番号、コマ番号をつけて、各遺構のネガフィルム検索カードを作成した。

3 基本土層について

基本土層は、2つの遺跡で1箇所以上を原則に記録した。総合しての所見は、馬の背状の台地であること。わずかに開けた頂上部の平坦面では、厚いローム層の上に黒ボク土、耕作土がほぼ均一に被覆する状態が見られたがどれも一様に薄い。斜面では下位になるほど土層は安定し、倍近い厚さの黒ボク土が堆積していた。ローム層は、漸移層以下厚く堆積していたが、斜面中段以下では薄くなる。

重機による掘削は、4層下位から6層上位までとし、これを遺構の確認面及び旧石器試掘の開始面とした。

- 1層 表土 暗褐色～褐色の細粒砂質土 上層は耕作土に相当し、浅間A軽石（As-A）など軽石と砂粒を多混、しまりが弱い。斜面では、下位にやや褐色でしまりのある砂質土が分布するが一括した。
- 2層 浅間B軽石（As-B）混入黒褐色砂質土 細粒、密、調査区では古墳の周堀にのみ分布する。
- 3層 浅間B軽石（As-B）純層、層厚10～15cm、上位に暗紫色の灰、下位は灰色の軽石である。
- 4層 浅間C軽石（As-C）混入黒褐色砂質土 弾力のある細粒土、密、硬、浅間C軽石は径1～2mm大、調査区全体に見られ、斜面の下位になるほど厚くなる。古墳や住居の覆土である。
- 5層 浅間C軽石（As-C）純層、層厚5cm前後、淡い黄褐色、径1～5mm大。
- 6層 ローム漸移層 上位は黒褐色の黒ボク土、下位にはぶい黄褐色の砂質土で漸移的に変化、細粒、密、下位には浅間板鼻黄色浮石層（As-YP）がまばらに混入する。
- 7層 ローム層



第6図 富岡竹ノ内・和田山寺久保遺跡土層柱状図

第5章 富岡竹ノ内遺跡の調査

1 概要

県道の改良用地が、調査の対象である。調査区は、台地頂上部から南面する斜面中段にある。旧地形の面影を残すものの、斜面中段以下は切土と盛土の跡が歴然としており、大きく3段に整地されていた。最上段には1号古墳の石室がむき出しにされ、各段の法面には古墳の石で作られた石垣が点々と顔を出していた。標高にして182m以上は切土が多く、それ以下は県道よりも低くなり逆に盛土をするという対照的な状態である。遺構の残り方も、これに大きく左右されている。

調査は、重機による表土掘削後、遺構確認、そして精査、さらに旧石器試掘の順とした。作業は順調に推移したが、試掘の予想を上回った遺構量と4号古墳を完掘するため東側に拡張した。検出した遺構は、古墳時代前期の住居8軒、土坑1基、7世紀の円墳4基、石槨1基、江戸時代～近世の溝2条、道1条である。調査した面積は1936m²である。

古墳は、台地の上から下へと順に作られている。和田山古墳群の中でも最北端にあたり、7世紀に入り新たに形成が始まった。構築技術は、この時期流行した山寄せ工法ならではのもので、数を重ねるに従い巧みになっている。一方、古墳時代でも前期の集落は、箕郷地区では初めての例となった。和田山にも方形周溝墓のあることは知られていたが、これで同時期の集落立地が明らかとなり、続く谷地に水田や畠があることを推定させてくれる。

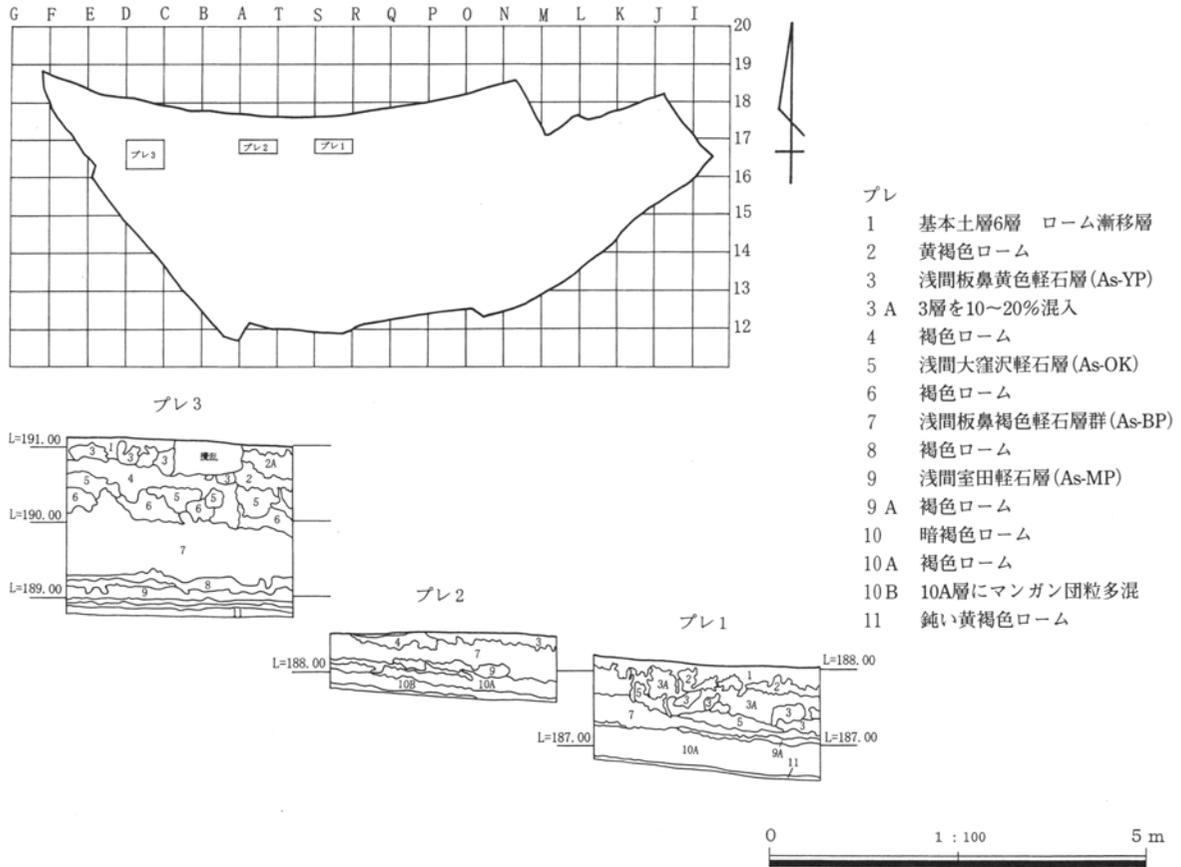
2 旧石器確認調査

試掘は、台地の最上段に5m×4mのトレンチを1箇所、同じく中段に5m×2mのトレンチを2箇所設定して行った(第7図)。その結果、暗色帯の上部までの間、出土した遺物はなかった。

唯一、最上段のトレンチ11層から粗粒輝石安山岩の拳大の礫1点が出土した。同質のものは、3号古墳脇の攪乱坑で基盤層に点々と含まれていた。検討の結果、拳大のものは基盤層から浮上した自然の礫と判断し、出土位置を記録するだけに留めた。

最上段では、ローム層だけで厚さは優に2mを越している。厚いだけでなく水平に堆積し、安定した状態そのものである。それが中段の東に行くほど傾斜とともに薄くなり、5層あたりからは層序も乱れている。5層は、最も冷涼な時期といわれる浅間大窪沢軽石層である。この間の寒暖の差で谷の開析は一気に進み、現在見られる台地の姿は、この頃までに出来上がったことがわかる。頂上部の平坦面から斜面を覆う板鼻黄色軽石層は、これを裏付けるかのようである。

以上のほかに、時間の都合で試掘できなかった斜面の中段以下では、攪乱坑や古墳の周堀を利用して土層の観察を行い、試掘に代えた。一部は4号住居の土層断面に示してあるが、中段にくらべると傾斜が緩やかになること、ローム漸移層以上が厚みを増して、ちょっとした棚状になっていたことがわかる。古墳やそれ以前に住居が作られたのも、この棚が持つ安定感に理由の一端があろう。旧石器が出土する可能性は、台地の頂上部よりは棚状の台地先端部にある。



第7図 富岡竹ノ内遺跡旧石器試掘トレンチ配置図

3 竪穴住居跡

1号住居跡 (第8・9図 P L. 3・20)

位置 1 M・N-15・16 台地の南斜面中段に作られている。検出した中では2号住居、3号住居と並んで最も高い所にある。3軒は、東西ほぼ一直線に並び、直角方向の南には6号住居、1号土坑がある。

形状 方形 住居全体が宅地造成のため床面の近くまで削平された上、東南の隅が攪乱されていた。周溝の検出状況からすると、東南側に少し広がる可能性がある。

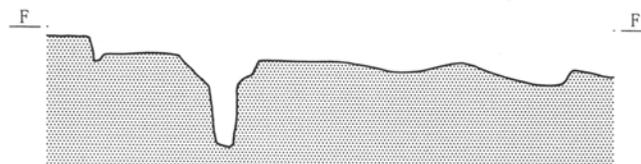
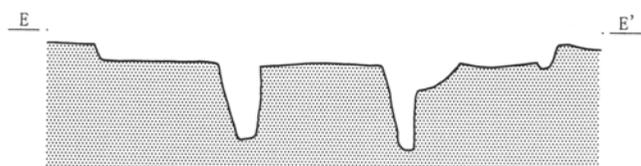
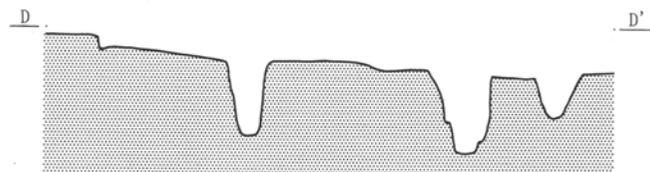
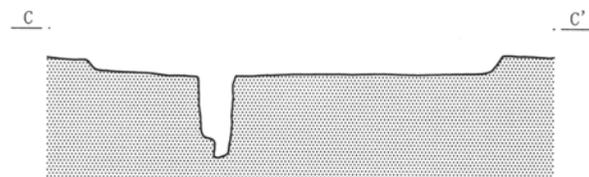
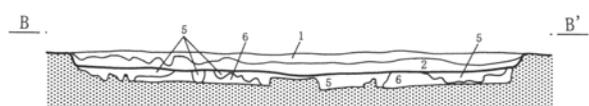
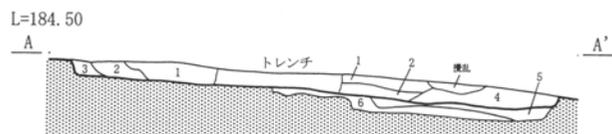
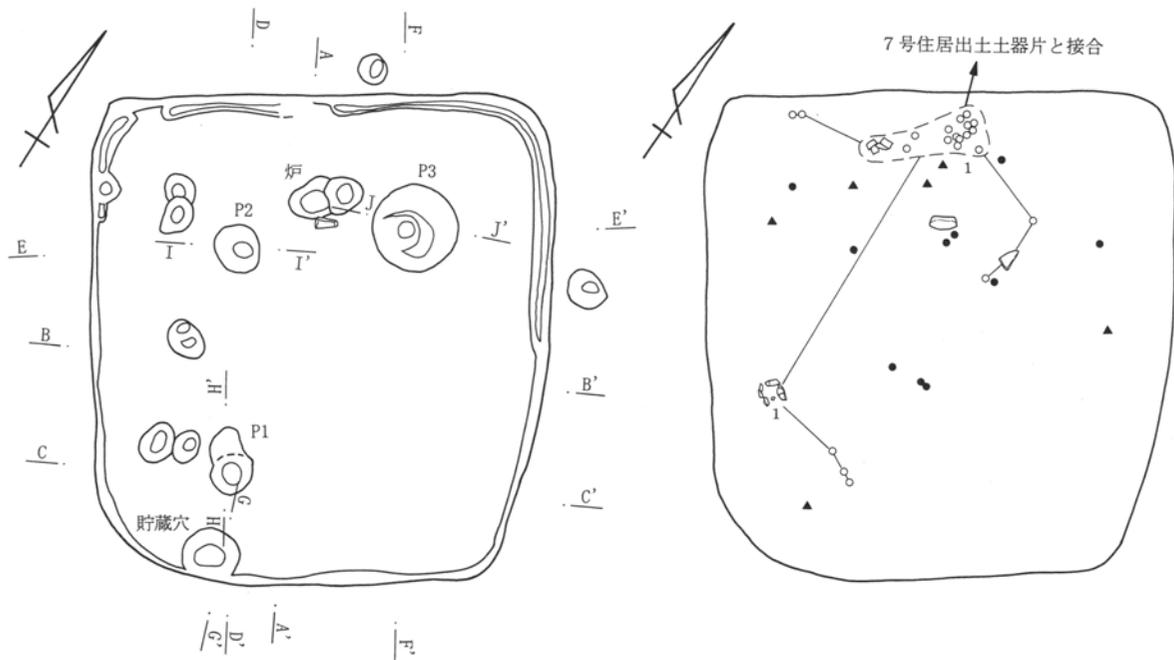
規模 長軸3.84m、短軸3.66m、壁高18cm

面積 14.05m²

長軸方位 N41° W

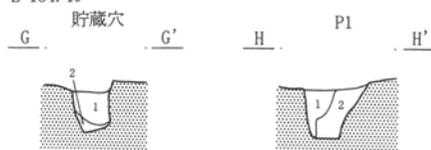
炉 中央よりやや北、壁からは50cm内側にある。円形に浅く掘りくぼめた地床炉で、長軸27cm、短軸20cm、深さ6cm、南側に拳大、棒状の粗粒輝石安山岩の枕石が残されていた。炉内には、炭化物こそ少なかったが塊状の焼土が残る。

柱穴 主柱穴3本を検出、残る東南隅の1本は攪乱されていた。それぞれの長径×短径×深さは、P1が32×32×69cm、P2が50×45×61cm、P3が74×68×73cmである。どれも一様に深い円筒形で、P1は北側に舌状の掘りこみがつき、P3は大きな掘り方の中に円筒がつくロート状で底面に暗色帯ブロックが貼付され



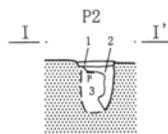
- 1 基本土層4層 ローム粒少混
- 2 基本土層6層 ローム漸移層
- 3 基本土層7層 ローム
- 4 暗褐色土 As-Cローム粒少混
- 5 黒褐色砂質土 細粒、密、As-YP混
- 6 黒色砂質土 細粒、密、As-YP混

L=184.40

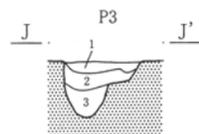


- 1 基本土層4層
- 2 基本土層6層

- 1 基本土層4層
- 2 暗褐色土 1層に類似、As-YP、褐色砂質土混



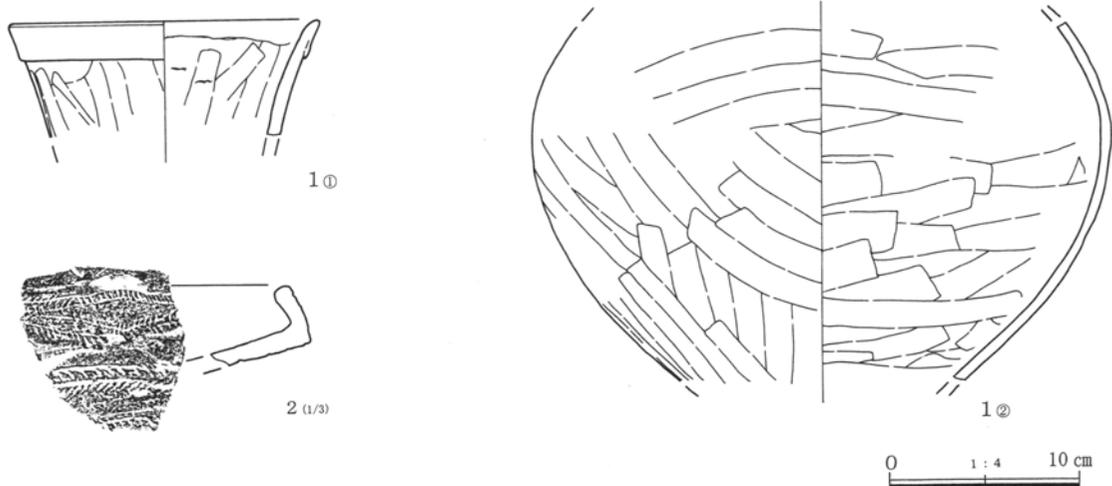
- 1 基本土層4層
- 2 基本土層6層
- 3 基本土層7層



- 1 基本土層4層
- 2 基本土層6層
- 3 基本土層7層



第8図 1号住居跡平面・断面・出土遺物分布図



第9図 1号住居跡出土遺物図

ていた。支柱穴3本のほか、壁の周辺を含め10本のピットがある。覆土の点では、住居よりも新しいと判断した。直線列に並んでおり、住居のプランを利用した掘立柱建物の可能性がある。

周溝 北側とそれに続く東側、さらに西側の一部を検出した。幅は10cm前後と一定、底面の凹凸は掘削痕そのままである。台地側に限られることから、湧水を止める目的が主であろう。

貯蔵穴 南西の隅、壁に接している。しっかりとした方形で長軸46cm、短軸44cm、床からの深さ31cmである。中から出土した遺物はない。

床面 ローム層まで掘りこんで貼床をしている。平坦、支柱穴を結んだ内側にはうすい硬化面が残る。

遺物と出土状況 床面の全体で出土したが、いずれも細片で接合率は低い。報告1の壺は、炉の周辺と南西とで接合した。図示したほかにも甕3個体以上がある。

所見 プラン全体が検出されただけでなく、炉以下貯蔵穴まですべてが揃い、方形住居の中では、典型例となる。削平がなければ、6号住居のように壁高が1m近い状態であったであろう。時期は、土器の特徴から古墳時代前期、浅間C軽石降下後である。

2号住居跡(第10図 P L. 3)

位置 1L・M-16・17 1号住居の東2mにあり、南側は4号古墳の周堀で切られている。西壁は、倒木と重複している。東側は、宅地に伴う造成で削られている。

形状 推定方形 北西隅を中心とした全体の4分の1を検出したにとどまる。

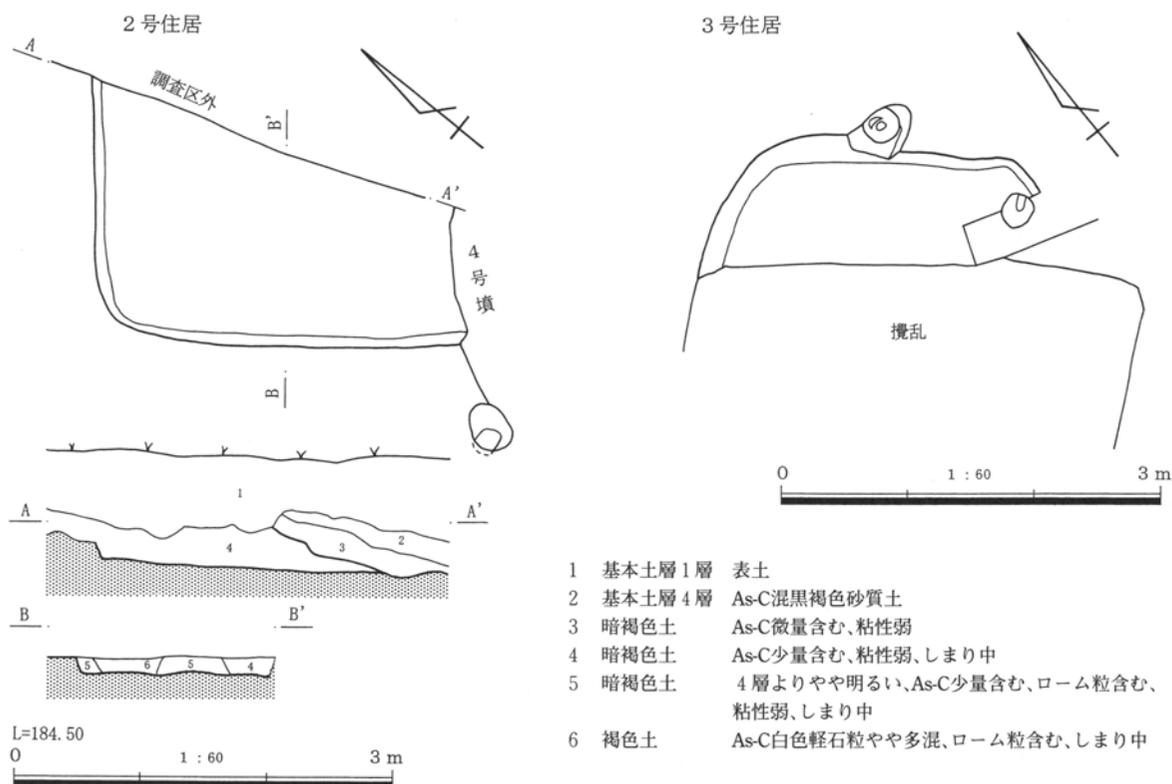
規模 長軸2.84m、短軸1.87m、壁高30cm

面積 5.31m² **長軸方位** N39° W **炉** 未検出 **柱穴** 未検出 **周溝** なし **貯蔵穴** 未検出

床面 平坦、特に硬化した状態はない。

遺物と出土状況 床から出土した遺物はなく、覆土からも混入程度の土器の細片が少量あるだけである。

所見 南斜面の中段に作られた住居である。4号古墳の周堀精査中に検出した。規模や方位の点で1号住居の類例とみだが、炉や柱穴が検出できず、覆土に焼土や炭化物もない。その上、遺物もないなど生活痕跡に乏しく、住居としては推定要素が強い。時期は、覆土や重複関係から古墳時代前期と考えられる。



第10図 2号・3号住居跡平面・断面図

3号住居跡 (第10図 P.L.3)

位置 1Q-14 3号古墳石室の西2mにあり、当初は3号古墳の周堀として調査した。

形状 推定方形 北東隅を中心とした3分の1を検出、西側の大半は攪乱で消失し、南側は3号古墳の前庭か周堀で消失している。

規模 長軸2.70m、短軸1.02m、壁高27cm 面積 2.75m² 長軸方位 N48° W 炉 未検出

柱穴 東南寄りでピット1本を検出したが、主柱穴とするには対応するものがなく確定できない。

周溝 はっきりとした掘り方ではないが、北から東の壁際が他に比べて軟弱である。

貯蔵穴 未検出

床面 浅間大窪沢軽石層をブロックで含む。平坦で堅緻、南に傾斜するのは掘りすぎである。

遺物と出土状況 出土した遺物はない。5号古墳の西側周堀で、報告した古墳時代前期の土器が出土している。3号古墳構築時に本住居が削平されていることを考えると、3号住居の伴出土器であった可能性がある。

所見 南斜面の中段にある。覆土の特徴から周辺にある住居と同じものとした。北東隅がしっかりとした方形であること、そこから延びる2辺が直線的、そして床らしきやや硬化した平坦面のあることが理由である。長方形のプランも推定できるが、等高線に平行する立地とすれば一辺が3mならず、1号土坑ほどの規模であろう。時期は、判断する資料に乏しいが古墳時代前期である。

4号住居跡（第11～14図 P L. 4・7・20）

位置 1 K・L—15・16 4号古墳の周堀として調査、床面の近くになってから住居に変更した。7号住居とは東西に並び、東側に2mずれただけで5号住居が重複している。

形状 長方形 上半部は周堀で削平され、南西隅だけが墳丘下に良好な状態で残っていた。南東隅は、当初9号住居として調査したが検討の結果4号住居に含めた。5号住居が重複している東側は、掘り方から推定した。中央部は地山まで攪乱されている。5号住居との関係は、4号住居が古い。

北側に続く法面は、4号古墳の周堀のようでもあるが覆土に明瞭な区別はつけられず、プランの一部として掲載した。周溝のように、北側だけが壁面の養生のために中段を持つのであろうか。この段を持つのは、5号住居も同様である。

規模 長軸6.77m、短軸4.55m、壁高35cm **面積** 30.46m² **長軸方位** N46° E

炉 未検出 7号住居を例にとると、攪乱を受けた中央部にあったと推定される。

柱穴 床と掘り方の両面、さらに周囲の法面を含めて17本を検出した。覆土は黒褐色砂質土でほぼ共通しているが、すべて住居に伴うものか決め手に欠ける。P1～P3が主柱穴である。それぞれの長径×短径×深さは、P1が28×17×51cm、P2が19×18×25cm、P3が20×18×11cmである。難点は深さが一定しないことである。住居のプランにたいしての配置を理由に決定した。残りについては、北と南の高低差解消のために壁際を補強するか上屋を支えるのが目的ではないだろうか。

周溝 西壁全体とそれに続く北の一部を検出した。幅は10cm 前後と一定し、深さは10～12cmである。全体にめぐるかどうかは疑問で、むしろ1号住居のように止水目的に北側だけにコの字にめぐるのでないだろうか。西壁の掘り方では、二重になっていた箇所もある。

貯蔵穴 床でははっきりとせず、南西隅の掘り方で長軸64cm、短軸50cm、床からの深さ19cmの円形土坑が検出された。台付甕と器台が出土した下面にあたる。

床面 斜面に対して水平にするため、北西側がロームまで深く掘り込み、南東側が浅いローム漸移層までと掘り方が二分されている。このうちロームの範囲が、よく攪拌されている黒褐色砂質土混じりのロームで厚く貼床されている。地山との区別がつけにくく、平坦で堅緻。掘り方は、1m四方面程度の土坑状のものがほぼ連続しているが、中は掘削痕を残したままである。土坑状にみえるのは1回あたりの掘削単位を意味し、湿気対策の天地返しを兼ねた貼床材採取が目的であろう。

遺物と出土状況 報告の台付甕と器台は、南西隅の床で折り重なって出土した。ほかには小破片のみであるが、S字口縁台付甕はない。

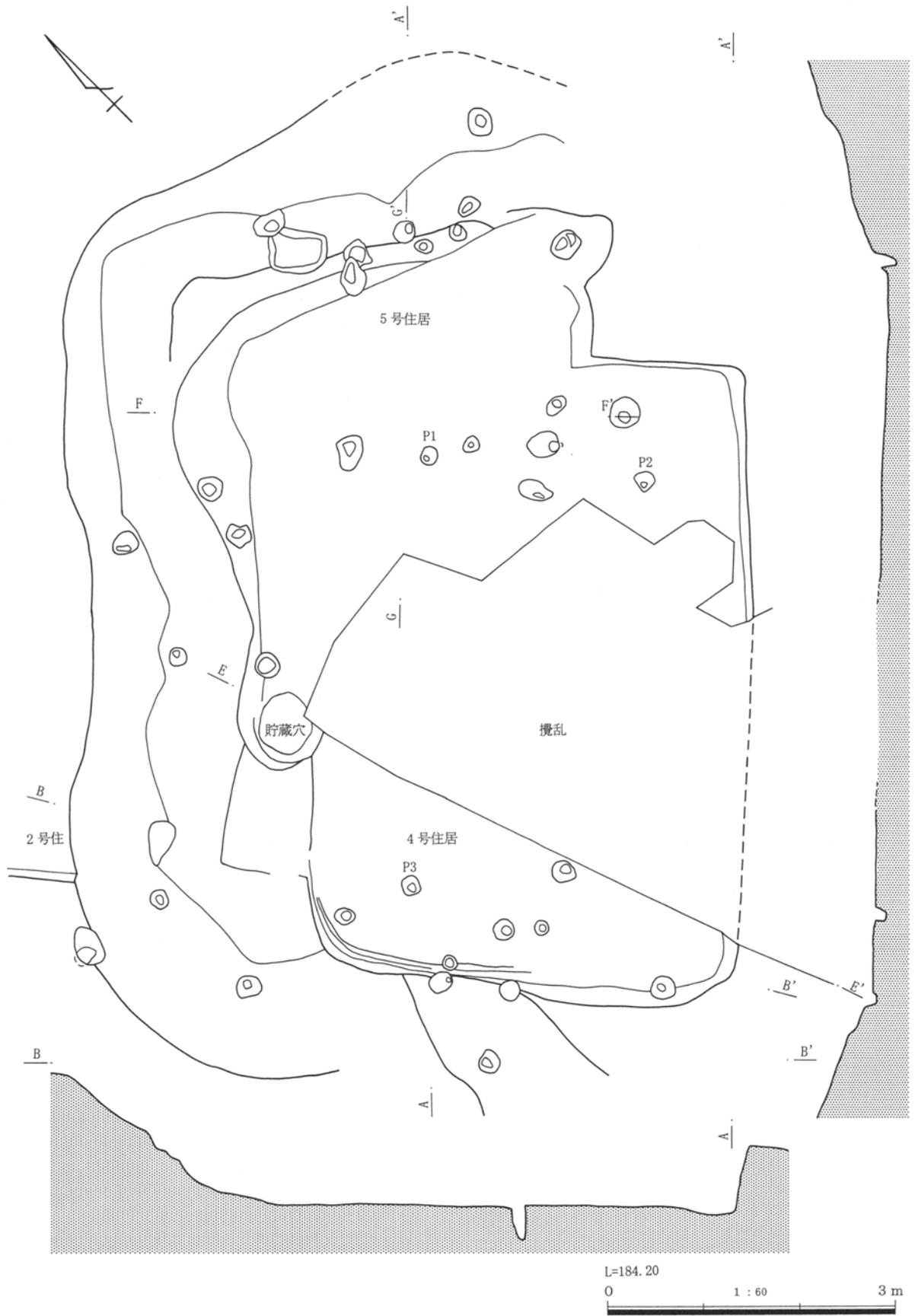
所見 南斜面の中段につくられた住居である。形状や規模が隣接する7号住居と類似している。一群を構成するのであろう。時期は、土器の特徴から古墳時代前期、浅間C軽石降下後である。

5号住居跡（第11～14図 P L. 4・5・20）

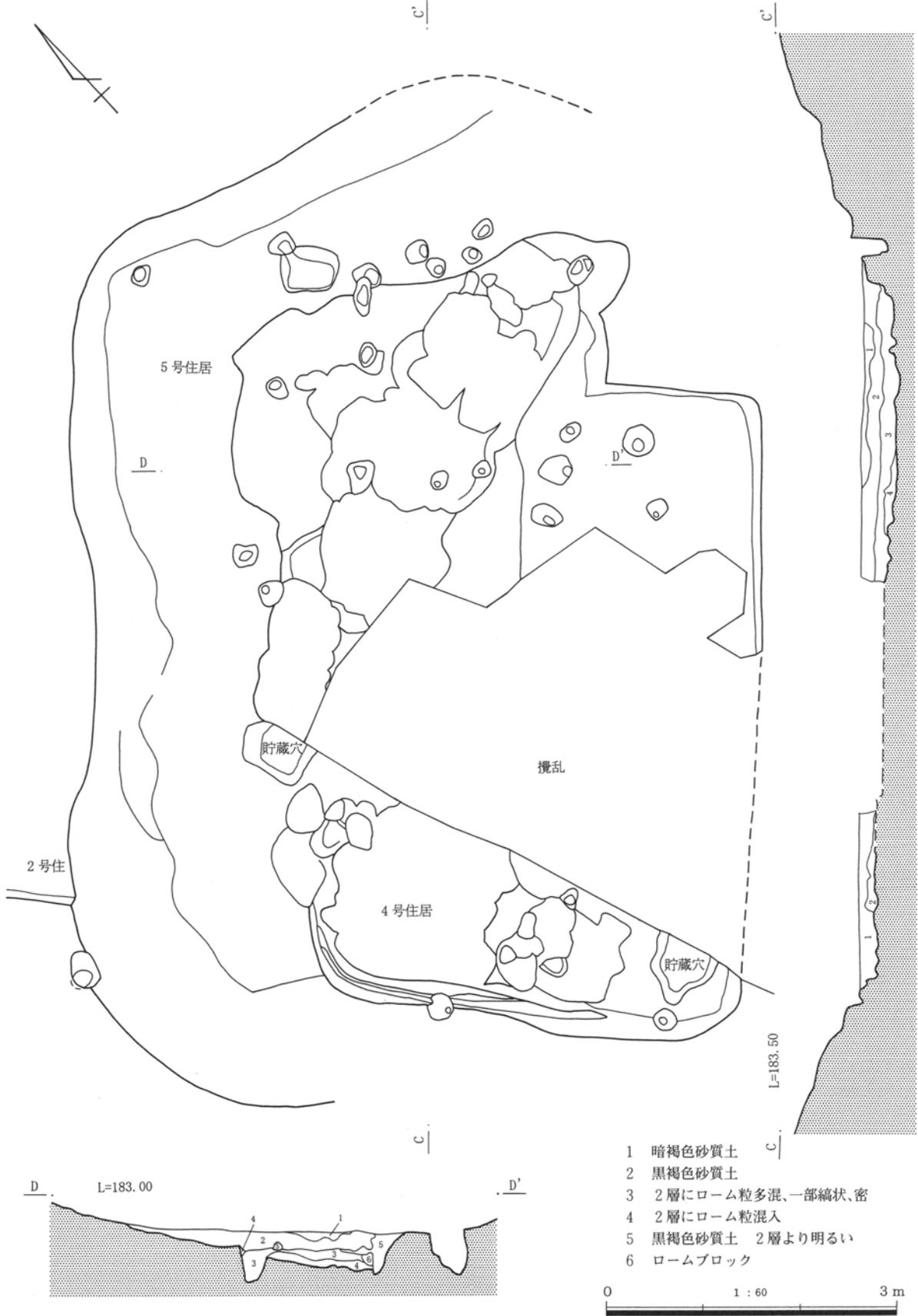
位置 1 K・L—16・17 4号古墳の周堀として調査、4号住居と同じく床面近くになって住居に変更した。西側の大半が4号住居に重複している。

形状 長方形 掘り方で貯蔵穴が検出され、新旧2軒になる可能性を残している。

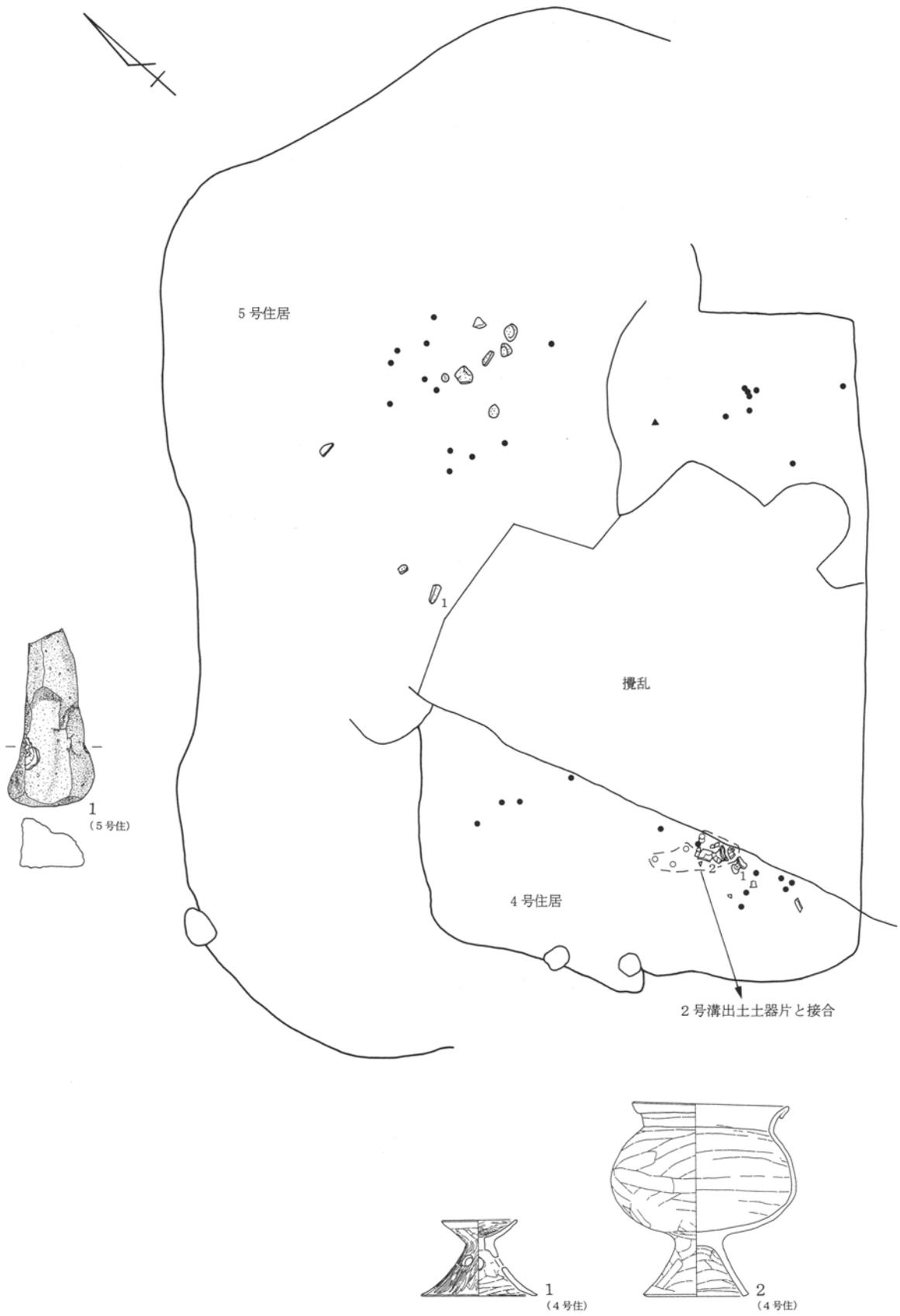
規模 新期は長軸9.86m、短軸5.54m、壁高118cm、古期は長軸5.30m、短軸4.20mである。



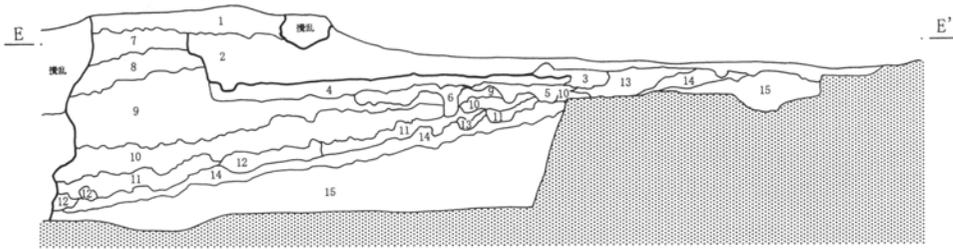
第11图 4号·5号住居迹平面·断面图



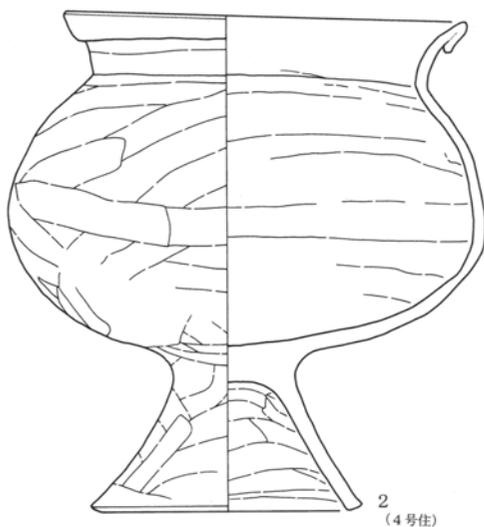
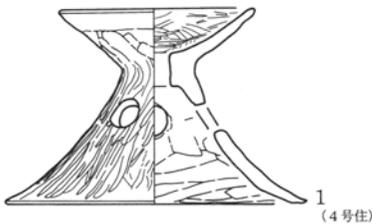
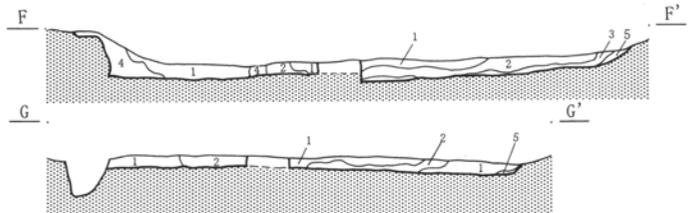
第12図 4号・5号住居跡掘り方平面・断面図



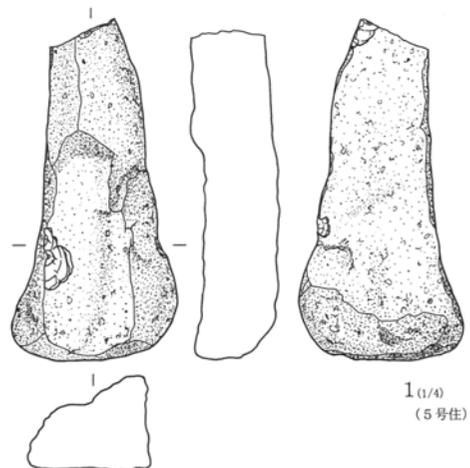
第13図 4号・5号住居跡出土遺物分布図



- 1 黒褐色砂質土 弾力のある細粒土、密、As-C混入
- 2 黒褐色砂質土 弾力のある細粒、密、1層を給源とし、暗褐色砂質土が斑混するほかにローム粒、灰白色・橙色の砂粒を全体に混入
- 3 黒褐色砂質土 2層に14層が混入する
- 4 黒褐色砂質土 直径1~2 cm大のローム斑混、貼床、やや堅緻
- 5 黒褐色砂質土 弾力のある細粒土、密、ローム粒混入、ロームの混入量は6層より少ないので分けた
- 6 〃 弾力のある細粒土、密、最大2 cmまでのローム粒混入
- 7 黒色砂質土 弾力のある細粒土、密、黒ボク土
- 8 黒褐色砂質土 弾力のある細粒土、密、暗褐色砂質土の斑混あり、灰白色、濁橙色をした砂粒混入
- 9 〃 弾力のある細粒土、密、黒ボク土、As-YP下位に多い
- 10 〃 細粒、密、やや堅緻、As-BPが全体に攪拌混入し、As-YP、As-MPもまばらに混入
- 11 にぶい黄褐色土 10層と12層の混土 12層が主体、密、やや堅緻
- 12 浅間板鼻褐色軽石層群(As-BP)ブロック 黄褐色、直径1 mm前後で均質
- 13 14層の粘土化したブロック
- 14 浅間室田軽石層(As-MP)相当 黄褐色、密、弾力があり13層とは堅さで明瞭に区別可
- 15 褐色ローム 暗色帯相当、強粘性、わずかにマンガン粒混入、プレ①~③の10層にあたる。A'がある北端辺りでは基盤に近いのか直径1~3 cm大の粗粒安山岩の角礫が浮上している



- 1 黒色砂質土 弾力のある細粒土、As-C少混
- 2 黒褐色砂質土 弾力のある細粒土、密、暗褐色のローム漸移土が最大1 cm大で斑混、As-C (1~3 mm) 10%混入
- 3 黒褐色砂質土 2層に壁からのローム粒混入
- 4 黒色砂質土 弾力のある細粒土、暗褐色のローム漸移土が混入、As-C 5%混入
- 5 ローム(地山) As-BP相当



第14図 4号・5号住居跡土層断面・出土遺物図

面積 新期54.62㎡、古期22.26㎡ 長軸方位 N44° E 炉 未検出

柱穴 15本以上、主柱穴を特定できなかった。壁に続く法面の中段に多くあいている。

周溝 なし

貯蔵穴 古期の北西隅で、長径80cm、短径64cm、深さ5cmの円形の貯蔵穴が検出された。建て替えをへて新旧2軒とした根拠である。ただし、新期のものは不明である。

床面 第12図の断面Dにみられる、薄いロームと暗褐色砂質土の互層が貼床の一部である。面としては確認がむずかしく、掘りすぎて検出できなかった。掘り方は、4号住居にくらべると個々が深くてはっきりとしている。径1m前後の土坑状のものが一面に続いている。

遺物と出土状況 掘り方から敲石が出土した。

所見 南斜面の中段につくられた住居である。4号住居よりも新しい。時期は、出土した土器の特徴と4号住居との重複関係から古墳時代前期、浅間C軽石降下後である。

6号住居跡（第15・16図 P L. 5・20）

位置 1 L—13・14 5号古墳の東周堀の調査中に検出した。8号住居と東西に並び、1号住居、1号土坑とは南北の線上にある。

形状 方形 検出した部分は、5号古墳の周堀と墳丘の下にあり良好な遺存状態であった。それに対して、南半分は2号溝で削平されていた。図示したのは、調査中の観察所見や遺物の出土状態などからの推定である。柱穴と周溝の様子から建て替えも考えられる。

規模 長軸3.80m、短軸3.77m、壁高90cm 面積 14.3㎡ 長軸方位 N36° W

炉 中央の少し北側、壁に寄って焼土が集中していた。浅い掘りこみを持つ地床炉らしいが確認できなかった。枕石も抜かれていた。周囲には、大粒の炭化物が分布していた。これとは別に、炉から北西に30cm離れた所と床よりもやや高い位置とで2箇所の焼土塊がある。

柱穴 掘り方を含めて25本を検出した。このうち、四隅に近い4本が主柱穴である。それぞれの長径×短径×深さは、P1が28×22×50cm、P2が34×32×37cm、P3が20×16×17cm、P4が27×24×24cmである。北壁に近いP5とP6にも主柱穴の可能性を残している。同一形状の1号住居にくらべると、深さの点で差が大きく、隅に寄せ付けているという特徴がある。建て替え後の主柱穴の可能性はある。

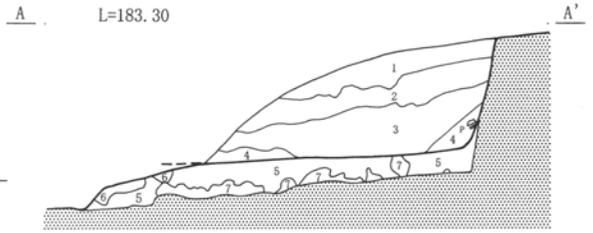
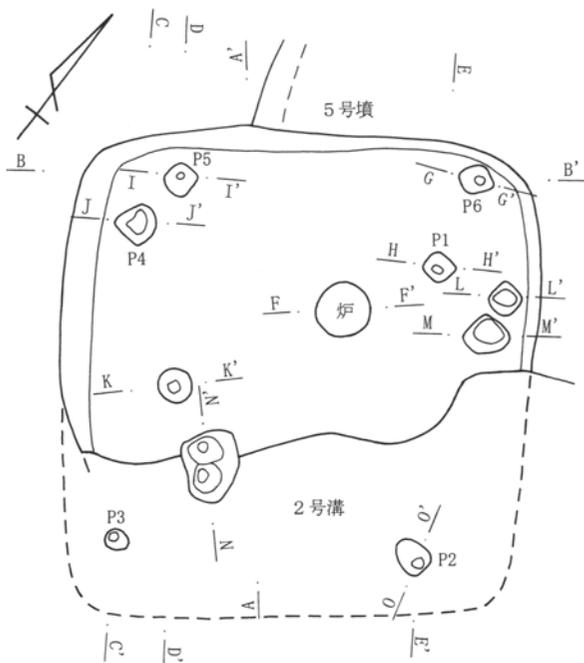
周溝 北側と西側の壁際で少しくぼむ様子が見られたが、はっきりとした掘り方はない。床面下では、北側と北西側が溝状に掘られていた。そのうち北側は二重になっており、建て替えの一つの根拠になっている。

貯蔵穴 検出した床の範囲にはなく、2号溝の重複で削平された南西隅か南東の隅に推定される。

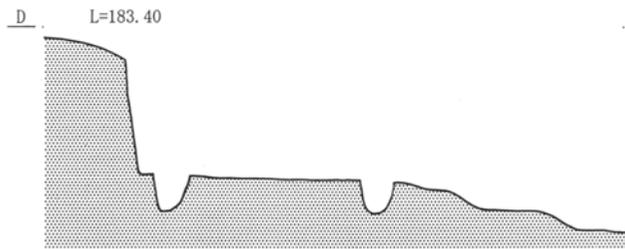
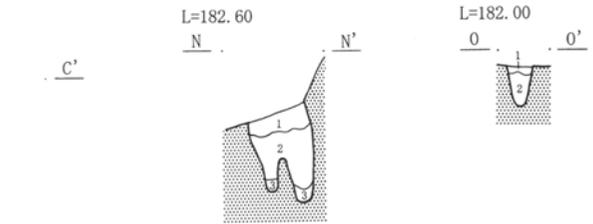
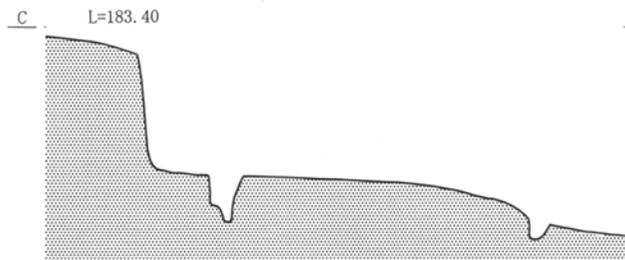
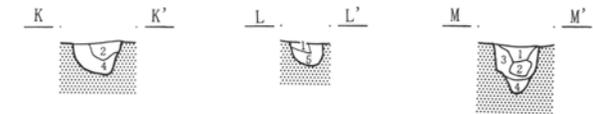
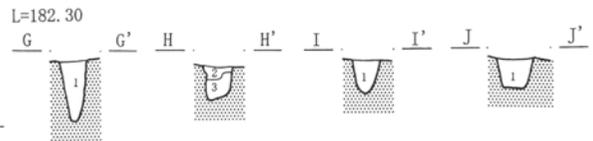
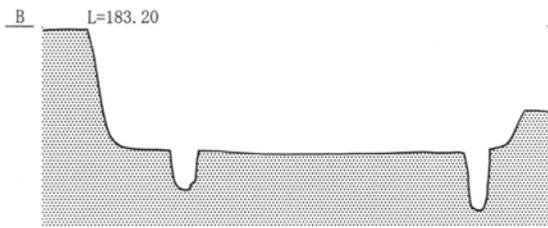
床面 平坦である。ローム漸移層まで天地返しのように鋤き起こし、貼床をしているのはまちがいないが硬化面を検出できなかった。焼土の分布状態をもとに決めた。

遺物と出土状況 住居全体から出土した。床直は少ないが、床上10cm付近までと安定した状態にある。完形やそれに近いものは皆無で、大きいものでもたばこの箱大、杯や器台などの小破片で床に近いほど接合率が高い。報告1の小型甕は、7号住居出土の破片とも接合している。このほかにくの字口縁の甕、丸胴甕がある。

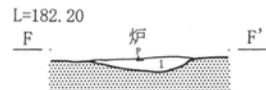
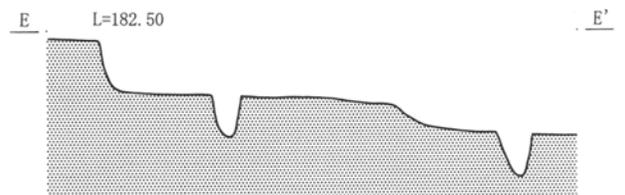
所見 南斜面の中段につくられた住居である。時期は、土器の特徴から古墳時代前期、浅間C軽石降下後である。



- | | |
|---------------|---|
| 1 黒褐色砂質土 | ローム粒、ローム漸移層が混入する、黒ボク給源の弾力のある細粒土（5号墳の盛土） |
| 2 As-C混黒褐色砂質土 | 細粒、密、ローム粒、ローム漸移層混入（5号墳の盛土） |
| 3 As-C混黒褐色砂質土 | 細粒、密、硬、基本土層4層の2次堆積 |
| 4 黒褐色砂質土 | 弾力のある細粒土、灰色やや粘性の帯びる土が混入 |
| 5 黒褐色砂質土 | 弾力のある細粒土、均質、ローム粒を少し混入する |
| 6 にぶい黄褐色砂質土 | 弾力のある細粒土、均質 |
| 7 明黄褐色砂質土 | 堅緻 |



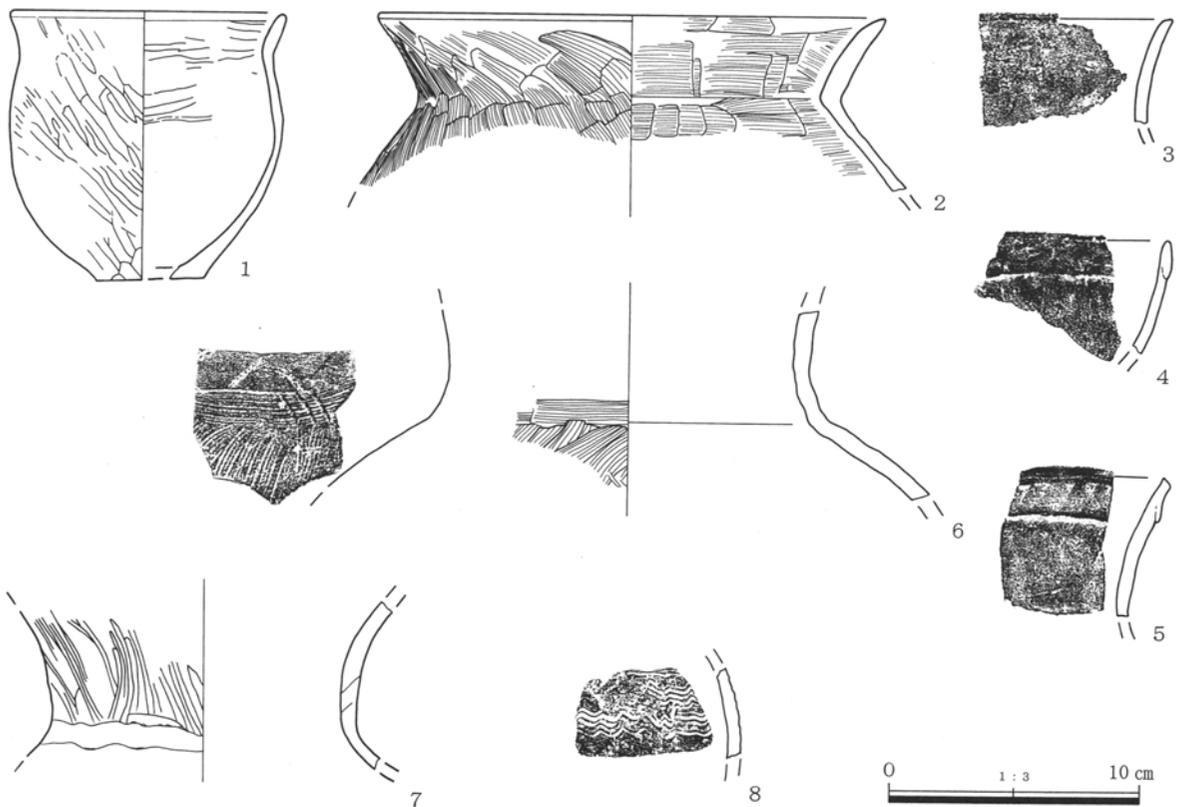
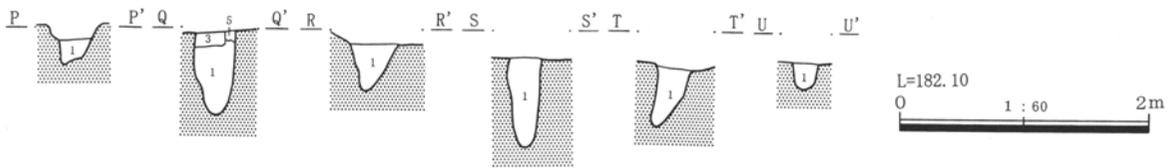
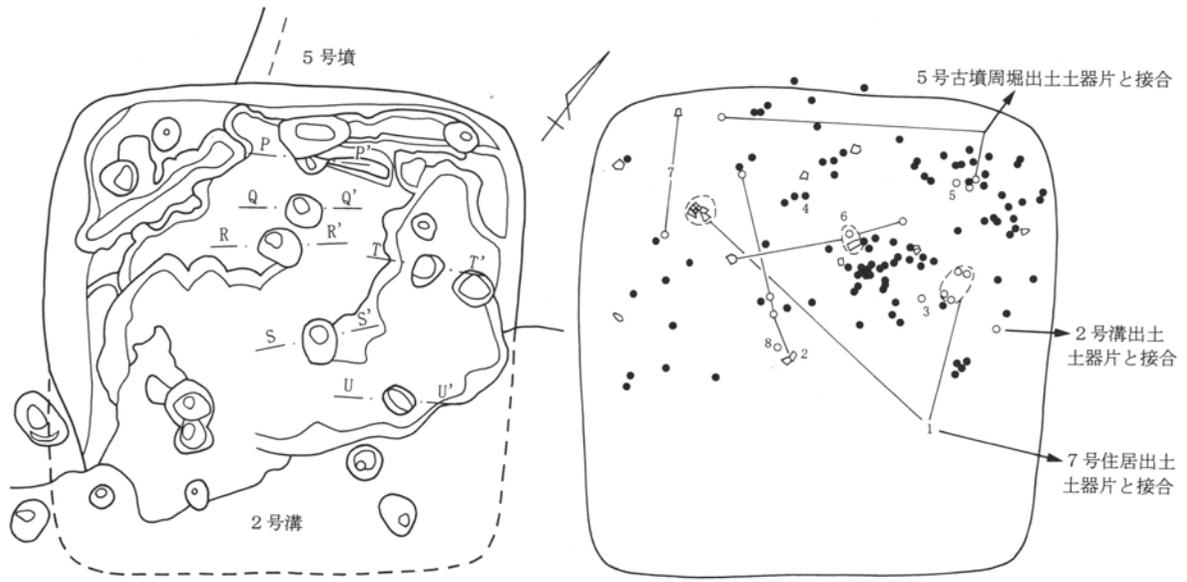
- G-G' ~ U-U'
- | | |
|---------------|-----------------------|
| 1 As-C混黒褐色砂質土 | 弾力のある細粒土、均質、密 |
| 2 黒褐色砂質土 | 弾力のある細粒土、均質、密 |
| 3 2層にローム粒混入、密 | |
| 4 黒褐色砂質土 | 弾力のある細粒土、均質、密 |
| 5 褐色砂質土 | 弾力のある細粒土、密、上面にブロックで堆積 |



- | | |
|----------|---------------|
| 1 暗褐色砂質土 | 細粒、淡く赤変、炭化物少混 |
|----------|---------------|



第15図 6号住居跡平面・断面図



第16図 6号住居跡掘り方平面・断面・出土遺物分布・出土遺物図

7号住居跡（第17～19図 P L. 5・6・20）

位置 1 I・J—16・17 西壁が4号古墳周堀と重複、7号住居が古い。西に同時期の4号・5号住居があり、南に8号住居がある。このうち8号住居を除いて、2軒が重複している。台地の先端まで30mたらず、標高も頂上部からみれば10mも低くなる南斜面の中断にある。

周辺では、住居の構築に関係するのかわかりませんが、およそ南北10m、東西30mの範囲で浅間C軽石がない。本来ならば、斜面の崩落土やさらに古墳の盛土で被覆されて、厚さ10cm前後、攪乱のない純層状態で見られるはずである。住居を構築する際、斜面をより水平にするため削平したと見るのが妥当であろう。住居を個々に検出したが、それぞれが独立したものではなく、2棟で対になるような位置関係だったのではないだろうか。この範囲には、当然住居まわりの周堤帯と共有する庭のような空間までを含んでいる。

形状 長方形 建て替えをしている。新旧があるとしたのは、周溝と2基の貯蔵穴があること。さらに炉と考えられる焼土が3箇所あることを、判断の理由とした。南辺側は、第17図の断面Aで示したように、地形勾配で消失している。プランや規模については、推定を含んでいる。

古いプランは、4本主柱穴、東南隅に貯蔵穴をもち、周溝が全周している。炉は、1と3の2基である。

新しいプランは、同じ柱穴の位置で南に1m拡張している。貯蔵穴を南西隅に移し、炉は中央に2の1基だけである。

壁は、中段までが直立、そこから上が緩い斜面となる。崩落したのか、それとも壁まわりの棚か周堤帯の跡かと考えられる。崩落したにしては一定の幅で整っている。これに覆土の点でも差のないことから、上屋が接地する内側の棚とみるのが妥当ではないだろうか。この外側が周堤帯になり、さらに当初に述べた浅間C軽石の純層がないという範囲につながる。4号住居や5号住居も同様で、8号住居にもその傾向がある。ここでは、斜面での路肩養成策として普及していたと考えられる。

規模 古期が長軸6.08m、短軸3.95m、壁高65cm、新期が長軸6.08m、短軸4.50m

面積 古期が24.01㎡、新期が27.36㎡ **長軸方位** N54° E

炉 建て替えに伴う3基がある。古期が1と3、新規が2である。それぞれの長径×短径×深さは、中軸線上にある炉1が57×43×10cm、ここだけが2基重複している。北が古く、南に作り替えている。中には焼土が層になって残っていた。炉2が36×35×18cmとやや小型、建て替え後のものである。炉3が45×40×12cmである。どれも焼け方は弱く、わずかに赤みを帯びる程度である。炉3が枕石を残していた。

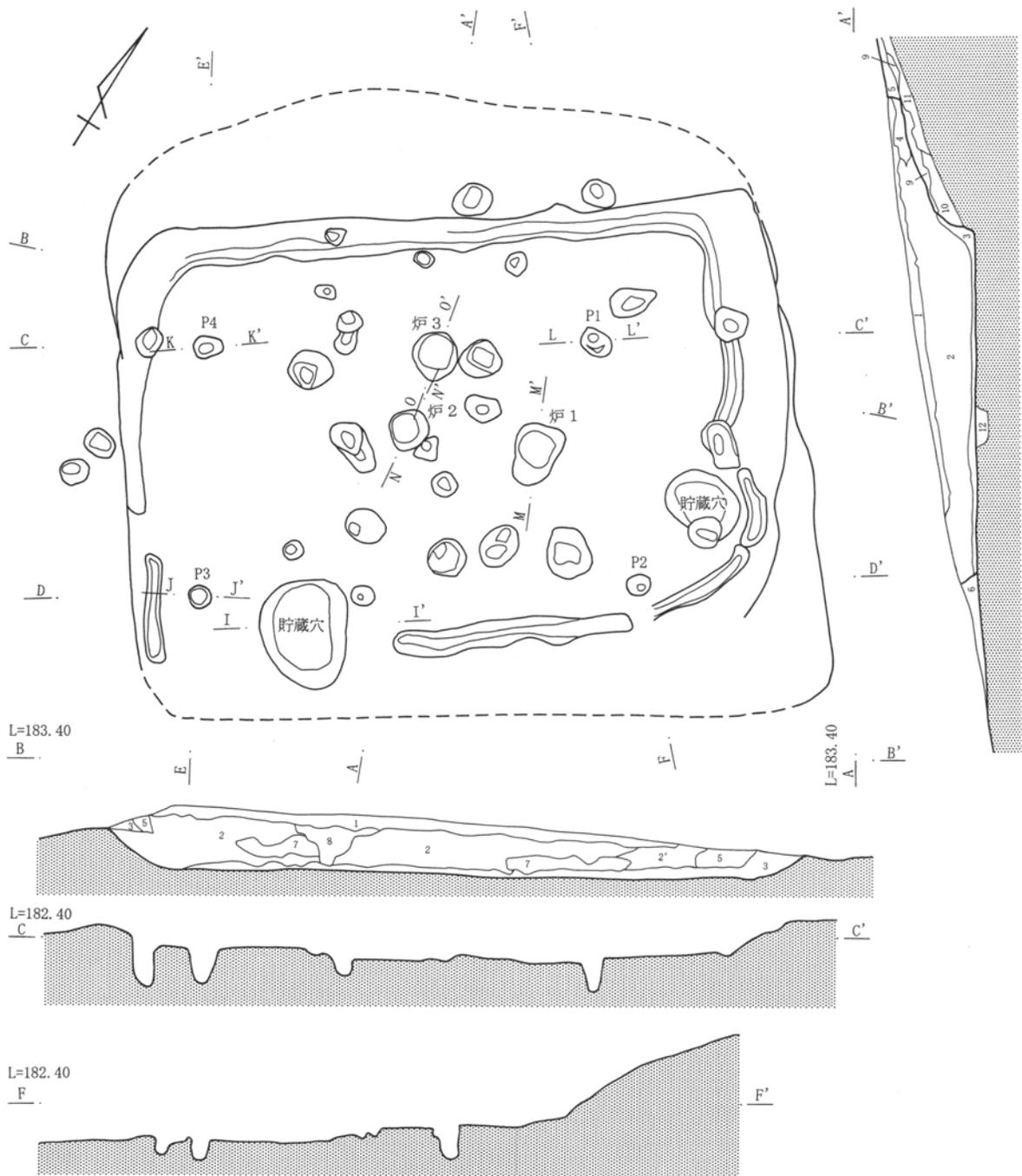
柱穴 主柱穴4本がある。それぞれの長径×短径×深さは、P1が29×24×50cm、P2が23×18×10cm、P3が20×20×14cm、P4が24×19×36cmである。このほかに21本を検出した。中軸線上にあるものや北の壁際に並んでいるものがある。

周溝 古期の住居で全周している。幅は、15～25cm、深さ5～10cmである。

貯蔵穴 新旧2基ある。それぞれの長径×短径×深さは、古い東南隅が70×53×9cmの円形、新しい南西隅が100×80×23cm、同じく円形である。

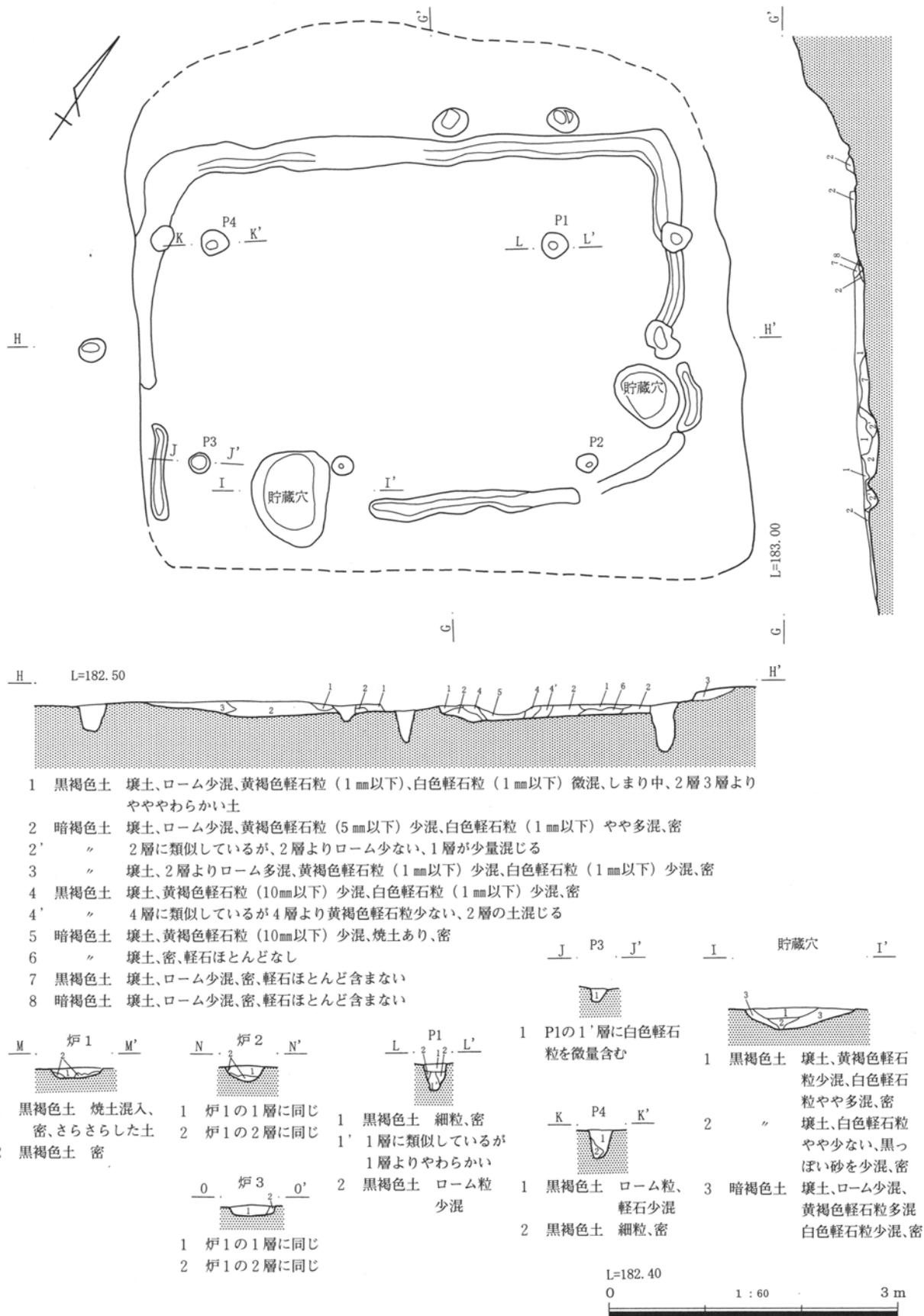
床面 ローム漸移層下位まで掘りこみ、それを戻して貼床にしている。特に硬化した様子は見られないが、3箇所に着点していた焼土を床面の判断材料とした。掘り方は、4号住居や5号住居のように土坑状に波打つのではなく、掘削の鋤跡なのか小さな凹凸が続いている。

遺物と出土状況 覆土の2層と床面から出土した。2層のものは、北から流れ込んだ状態である。床面出土の遺物は、炉の周辺と南西隅の貯蔵穴内に多い。

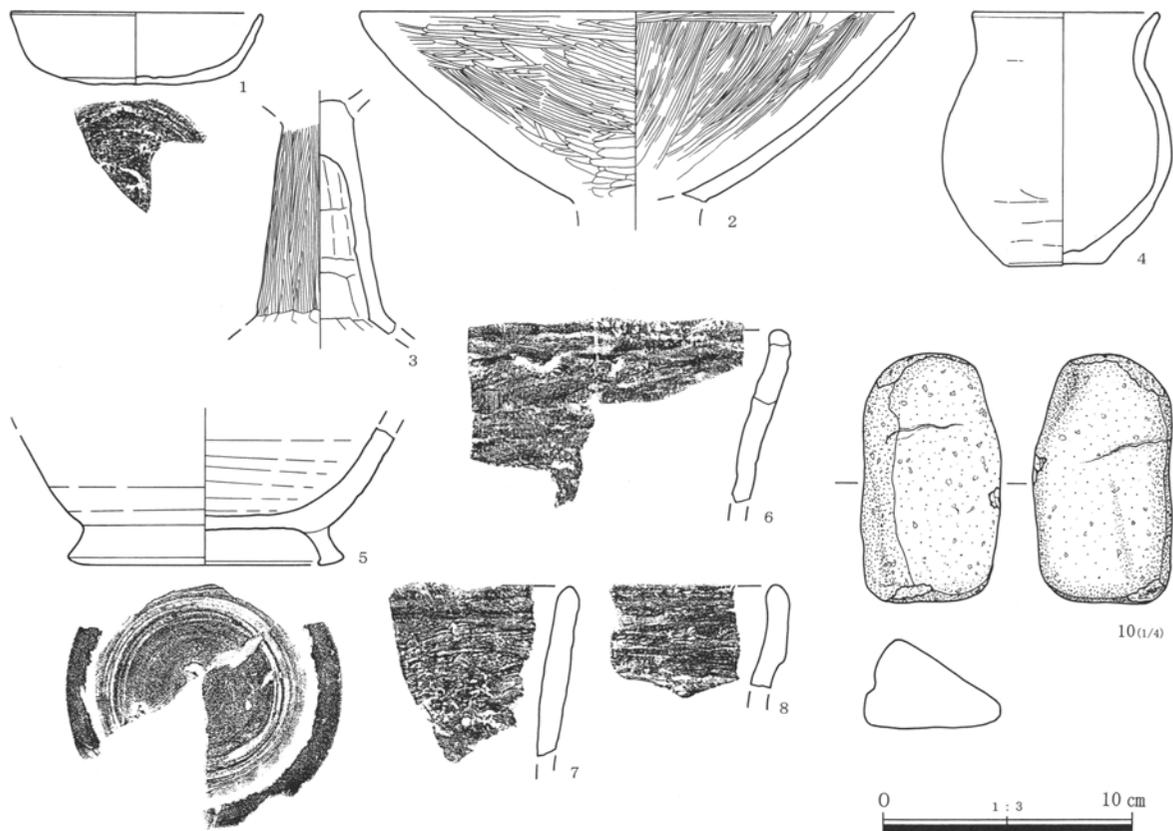
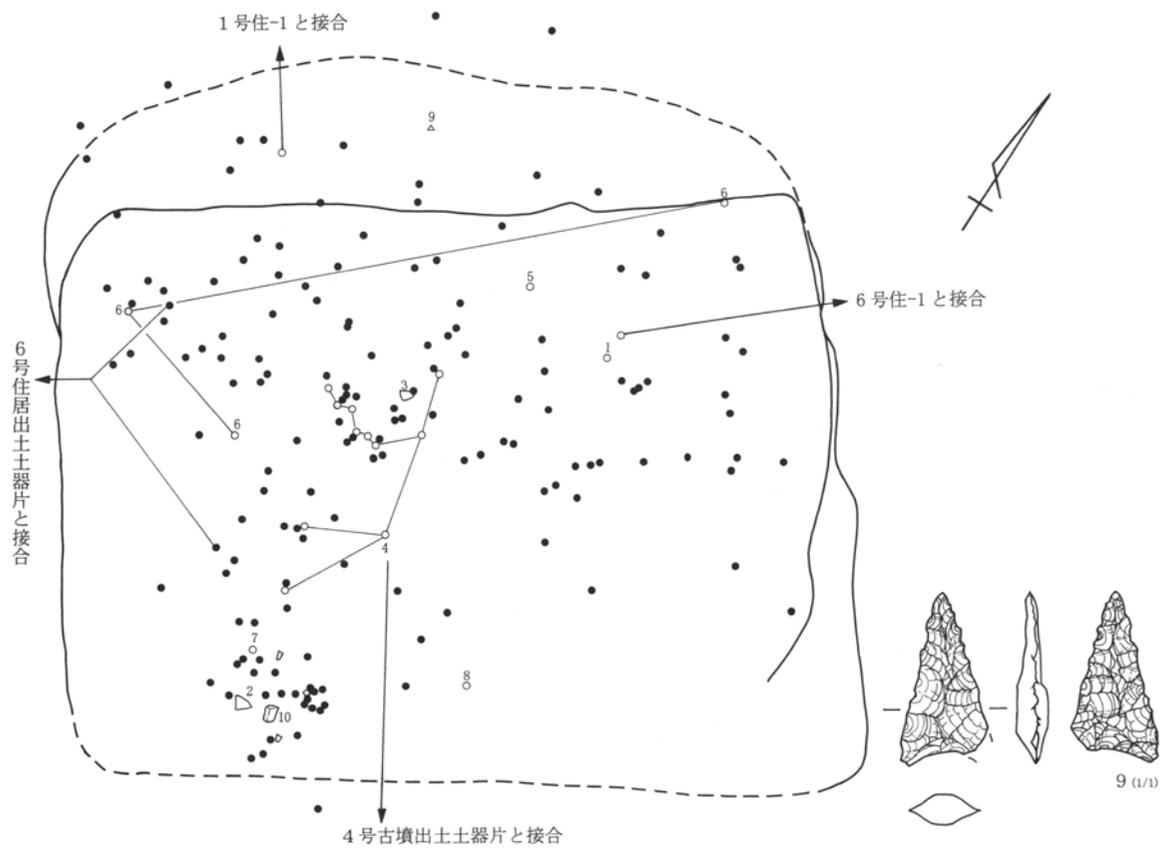


- 1 黒褐色土 基本土層4層、赤味がかっている
- 2 " 基本土層4層にところどころにロームを含む
- 2' " 2層に類似しているが2層よりローム少ない
- 3 暗褐色土 基本土層6層
- 4 黒褐色土 As-C軽石、ローム少混、密
- 5 " 4層よりAs-C軽石をやや多混、基本土層4層、ローム少混、密
- 6 暗褐色土 As-C軽石、ローム少混、密
- 7 黒褐色土 基本土層4層、1層、2層より黒い
- 8 " 基本土層4層にローム少混、1層、2層より軽石やや少ない
- 9 " 基本土層4層に暗褐色砂質土を含む、しまり弱、さらさらしてやわらかい
- 10 暗褐色土 ローム、白色軽石粒少混、粘性弱、しまり中
- 11 " 10層より明るい、ローム混、白色軽石粒を少混、黄褐色軽石粒を微混、粘性やや弱、密
- 12 黒褐色土 全体に焼土混入、密

第17図 7号住居跡平面・断面図



第18図 7号住居跡掘り方平面・断面図



第19図 7号住居跡出土遺物分布・出土遺物図

所見 南斜面の中段につくられた住居である。隣接する4号住居と形状、規模が類似、一群を構成するのであろう。時期は、土器の特徴から古墳時代前期、浅間C軽石降下後である。

8号住居跡（第20図 P L. 6）

位置 1 I・J—15・16、4号古墳の周堀に重複して検出した。周堀との区別はむずかしい。覆土の3層まで石や遺物が集中して住居らしく見えたが、作業が進むにつれて地山との差がなくなる。特に南側の掘り方が不明瞭である。1層は4号古墳周堀の覆土としたが、3層との区別は浅間C軽石の混入量のわずかな差である。全体が、4号古墳の周堀の中に収まる。

形状 推定方形 南斜面に直交するように作られ、南東側は地形勾配の中で削平されている。プランの復元は直線的な北壁と西壁を基準とした。北壁の外側は、7号住居のような棚になっていたのか、相当する帯状の範囲だけ浅間C軽石層が途切れていた。

規模 長軸4.10m、短軸4.0m、壁高50cm

面積 16.4m²

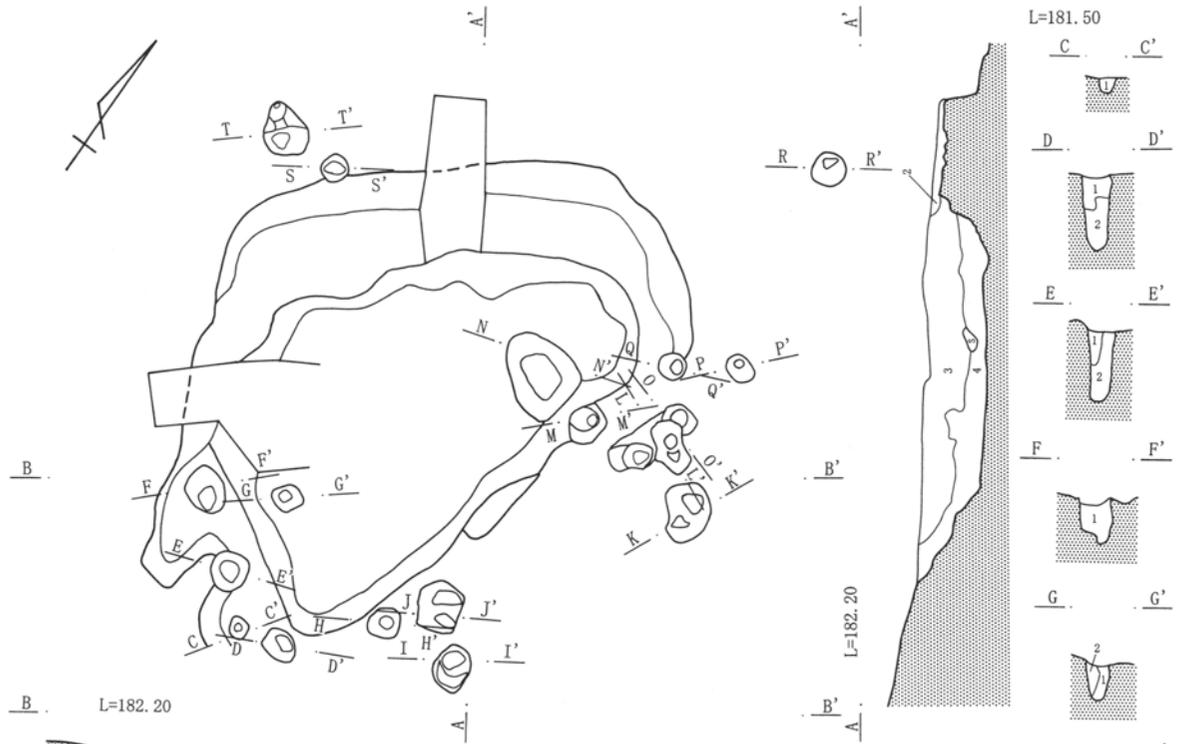
長軸方位 N50° E

柱穴 周辺を含めて直径30cm前後のピットが18本検出されている。住居に伴うものかは不明である。

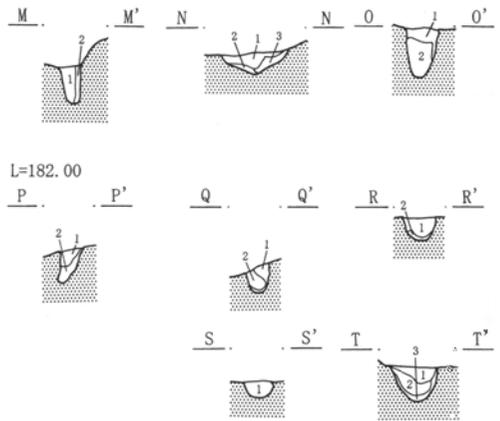
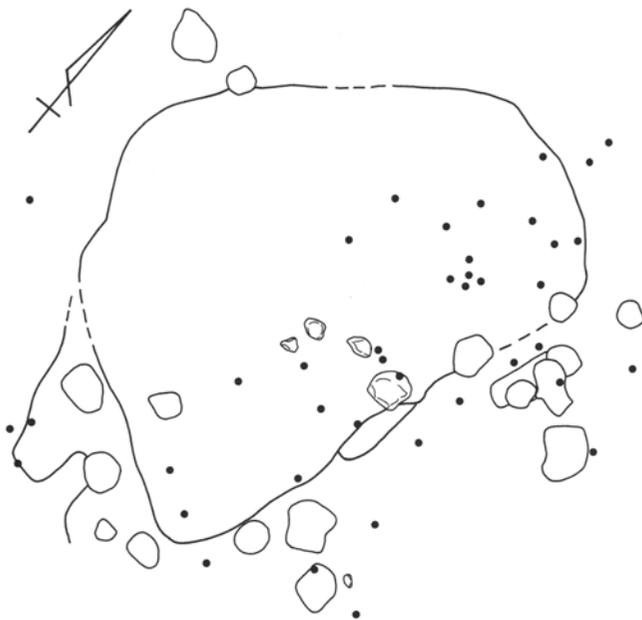
床面 不明のまま、掘り抜いている。覆土4層の上面が相当したのだろう。

遺物と出土状況 覆土の3層に、窪みに溜まるように集中している。石は4号古墳の崩落した葺石で、土器は7号住居からの流れ込みである。細片がほとんどで、接合したものは少ない。

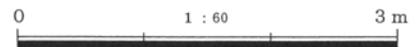
所見 確認時のプランと覆土の様子は、周囲にある住居と大差がないことから8号住居としたが、生活痕跡に乏しい。炉はなく、共伴する土器もない。3号住居のような堅穴である。



- 1 As-C混黒褐色砂質土 弾力のある細粒土、均質、密、As-C径1~2mm (4号墳フク土)
- 2 As-B混黒色砂質土 弾力のある細粒土、均質、密
- 3 As-C混黒褐色砂質土 弾力のある細粒土、均質、密、暗褐色砂質土の3~5cm大斑混
- 4 As-C混黒褐色砂質土 弾力のある細粒土、均質、密、硬 (基本土層4層の2次堆積)



- 1 黒褐色土 弾力のある細粒土、均質、密
- 2 1層にローム粒混入
- 3 1層に黄褐色、白色軽石粒の混入



第20図 8号住居跡平面・断面・出土遺物分布図

4 古墳

1号古墳（第21～31図 P L. 8・9・13・20～22）

位置 1Q～T-13～17、3A～C-13～17 調査区の西の端、台地の最上段にある。地権者等の話では、昭和40年代までは墳丘を残していたという。ぼつんと立つ奥壁や攪乱の様子からすると事実のようで、天井石が崩落した程度だったのではないか。

形状 東側に残った周堀の形状から円墳と考えられる。規模は、直径20m前後である。

墳丘と外部施設 標高190m前後、基本土層4層中位が整地面で、石室の西から北にかけて盛土がわずかに残る。ロームを主として黒褐色土との互層で周堀にむかって傾斜していた。主体部の壁の段にあわせた作業の跡である。葺石自身は残っていないが、周堀から人頭大までの軽石約30点が出土した。和田山寺久保遺跡1号古墳に共通した石材で、葺石である可能性が高い。

前庭 重機で削平したため不明である。

周堀 東側だけで検出した。平坦な頂上面から斜面への落ち際を一段と深く掘り込んだ形になり、墳丘をより一層高く見せる視覚効果がある。幅が10mをこし、深さは現状の最大で80cmである。全周していたとしても、東をのぞいて墳丘の裾まわりを削る程度の浅いものであったろう。

主体部の構造 粗粒輝石安山岩の自然石を乱石積みした両袖型横穴式石室である。開口方向はS6°Eである。石室の規模は、掘り方からの推定で全長6mを測る。

玄室は、全長3.20mの短冊形、幅は中央で1.92m、奥壁、玄門付近との差は10cm以下である。東壁が構築の基準辺で直線的、石の大きさにも統一感がある。一方の西壁は少し胴張りをみせる。壁面構成は、奥壁が2段構成で1段目が2石、2段目が1石である。東壁は部分的に3段が残り、1段目が横積、2段目からが小口積の推定4段、転の構造である。西壁も同様であるが、東に比べてやや不揃いである。床面は、小石が敷き詰められていた。室内の高さは推定190cm、天井部の幅は120～130cmである。

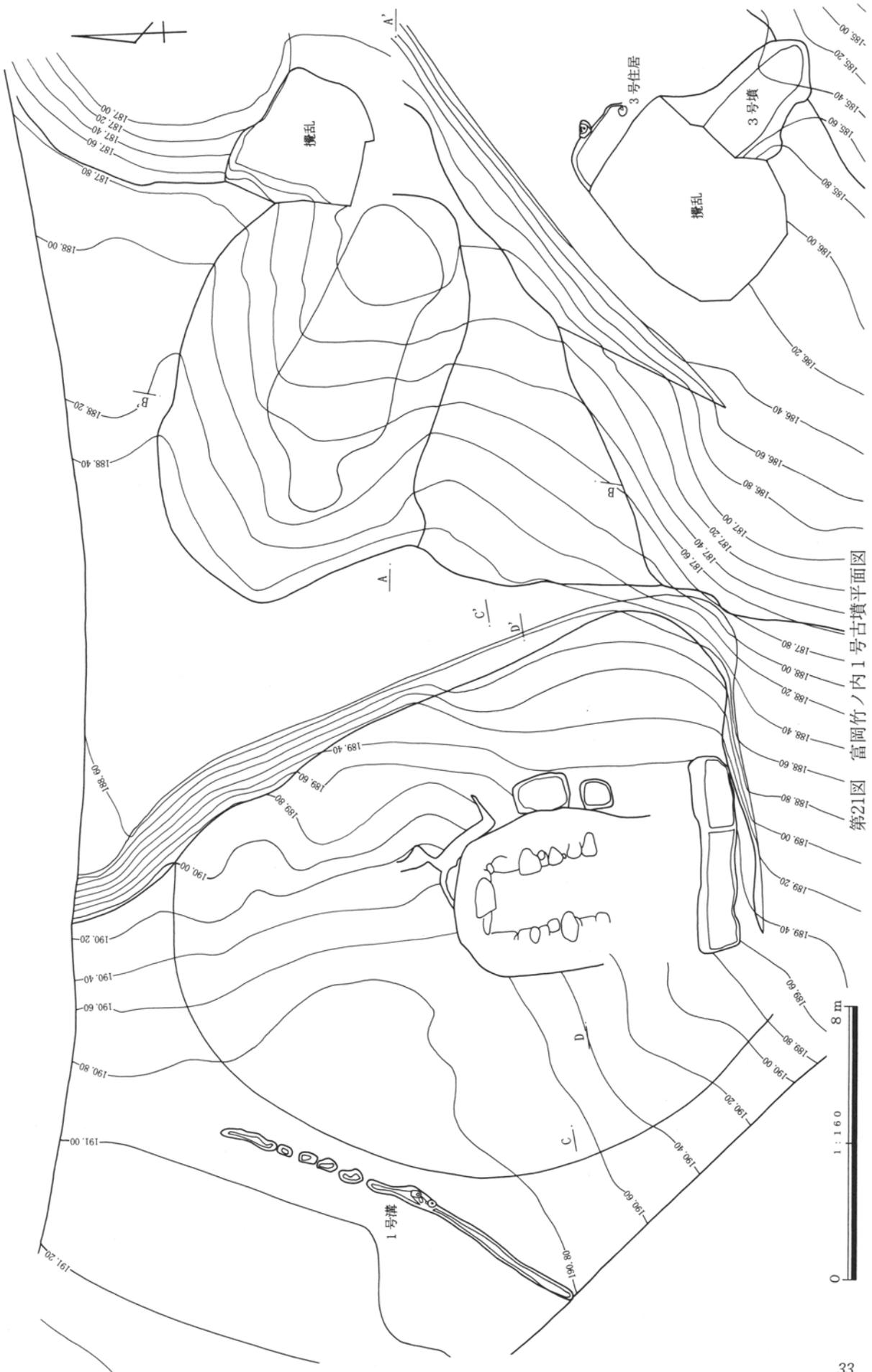
羨道 全て攪乱されていたが、掘り方をみると玄室と同じく短冊形である。

出土遺物 玄室の北東隅で刀装具1点、南東隅の攪乱中で鉄鏃の頸部2点、南西隅の攪乱中で大刀の柄1点が出土。石室の攪乱中と周辺から須恵器の甕3個体と長頸壺1点が出土。前庭で須恵器杯1点が出土。周堀では、8世紀中頃から後半の須恵器杯と円筒埴輪が出土している。埴輪を副葬していたかどうかは、掲載した1点だけで断定できない。

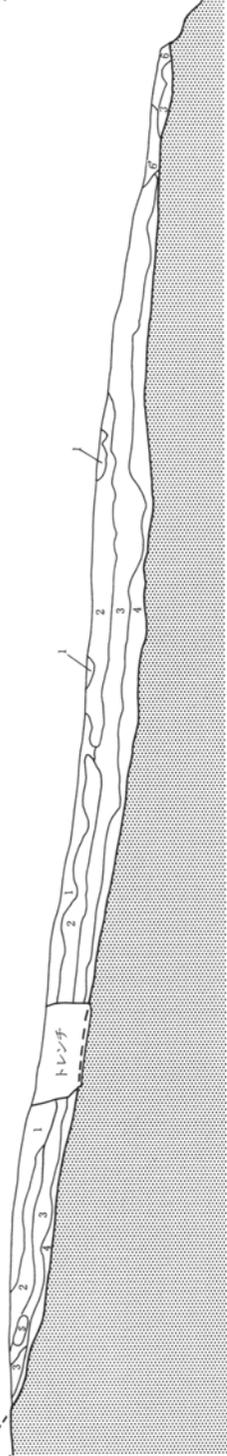
石室の構築状況 掘り方は、ロームまで掘りこみ全長9m、幅7.40m、深さ70cmの長方形である。西側が2段の掘りこみであること、一方の東側は旧地表の上に貼床されている点に特徴がある。東南への緩斜面をとりこむ形に選地されている。一旦、ローム層前後まで掘り下げられ、黒褐色土との互層にして床を作る。石室に相当する範囲に拳大前後の玉石を敷き、まず奥壁から東西1石目を基準にすえ、これに奥壁を直交させて1段目を構築する。そして裏込めと養生土で充てん後、全体を人頭大の転石で被覆する。この要領で2段目以降を繰り返す。壁石の固定には、支え石が効果的に使われていた。また、石は玄室が羨道より大きく、玄室では基準辺である東壁の方が粒揃いである。

所見 大字和田山字後和田545番地の2、同546番地に所在、上毛古墳綜覧車郷村第44号墳に該当する。

眺望のきいた台地頂上部に選地しやや大型である。調査した台地の中では盟主的な存在と考えられる。時期は、葺石から推察すれば軽石を多用した点から7世紀はじめから前半にかけてである。



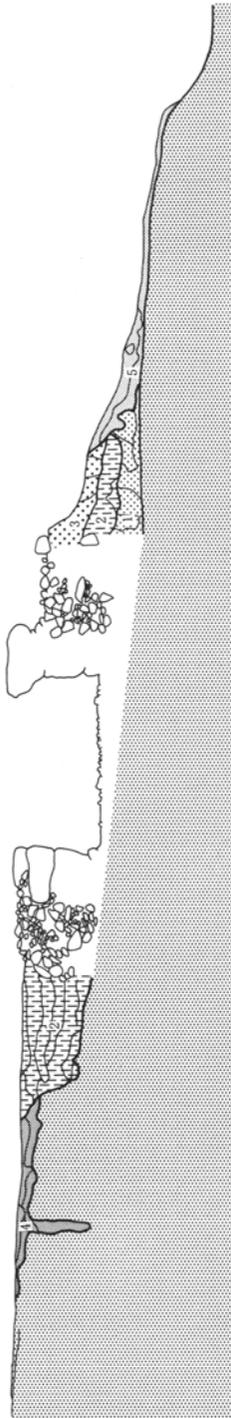
L=188.60 A A'



L=188.60 B B'



L=191.00 C C'



L=190.40 D D'

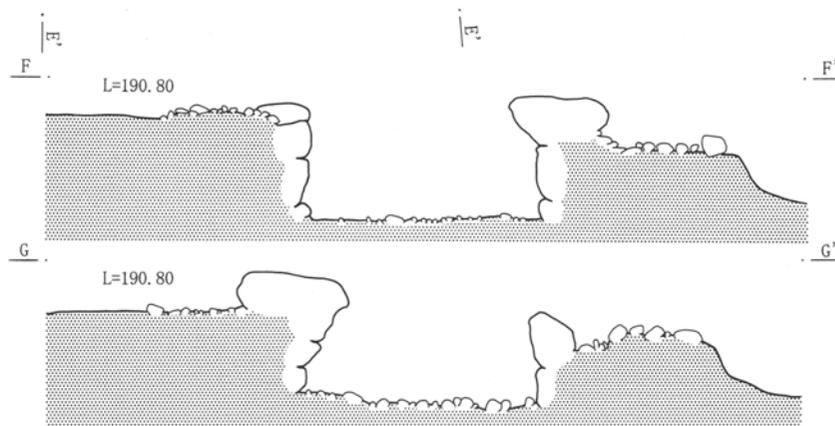


- A-A'
- 1 基本土層2層 As-B混入黒褐色砂質土
 - 2 基本土層3層 As-B軽石純層
 - 3 基本土層4層 As-C混黒褐色砂質土
 - 4 基本土層6層 ローム漸移層
 - 5 基本土層7層 ローム層
 - 6 基本土層1層 カクランか
 - 6' 基本土層6層にローム混じる カクランか

- C-C' D-D'
- 1 地業面 基本土層4層と基本土層6層、7層の攪拌土、堅緻
 - 2 盛土1 基本土層4層と基本土層6層、7層の互層、堅緻
 - 3 盛土2 基本土層4層と基本土層6層の攪拌土
 - 4 盛土3 基本土層4層に基本土層6層混入
 - 5 盛土4 基本土層4層にロームほか少混

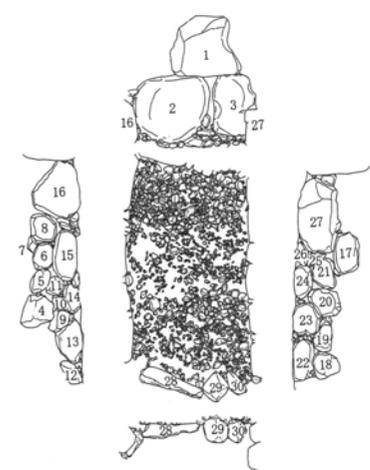
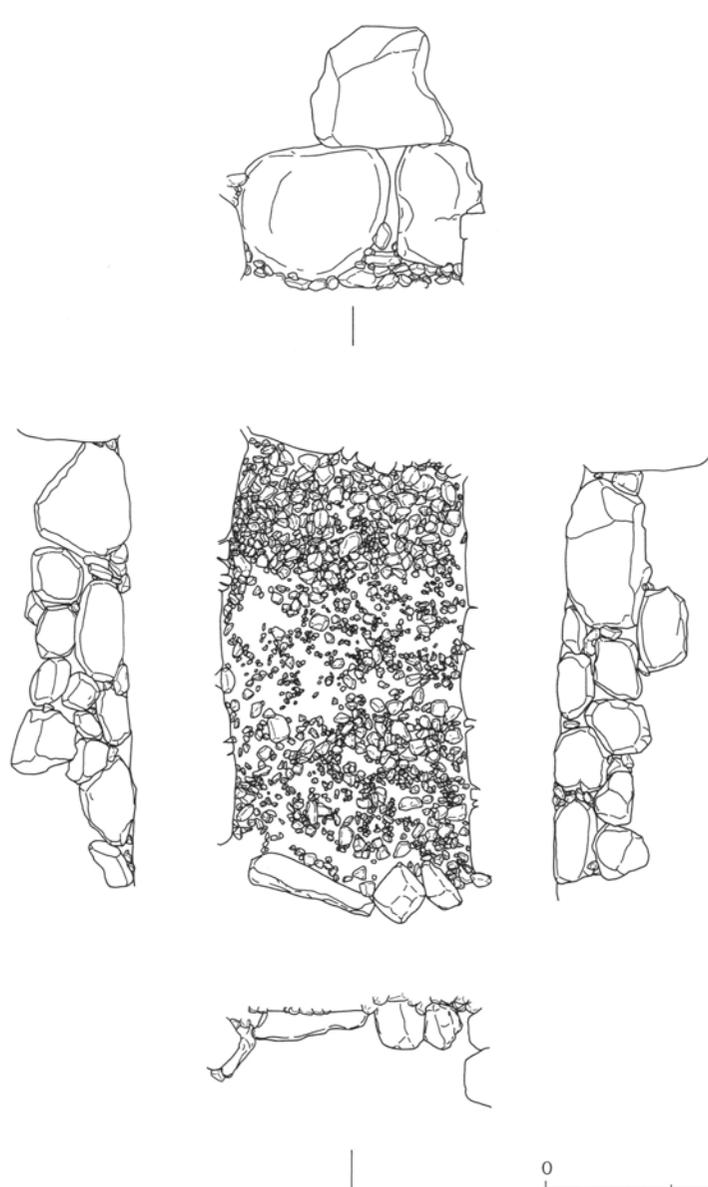


第22図 富岡竹ノ内1号古墳土層断面図



0 1 : 60 2 m

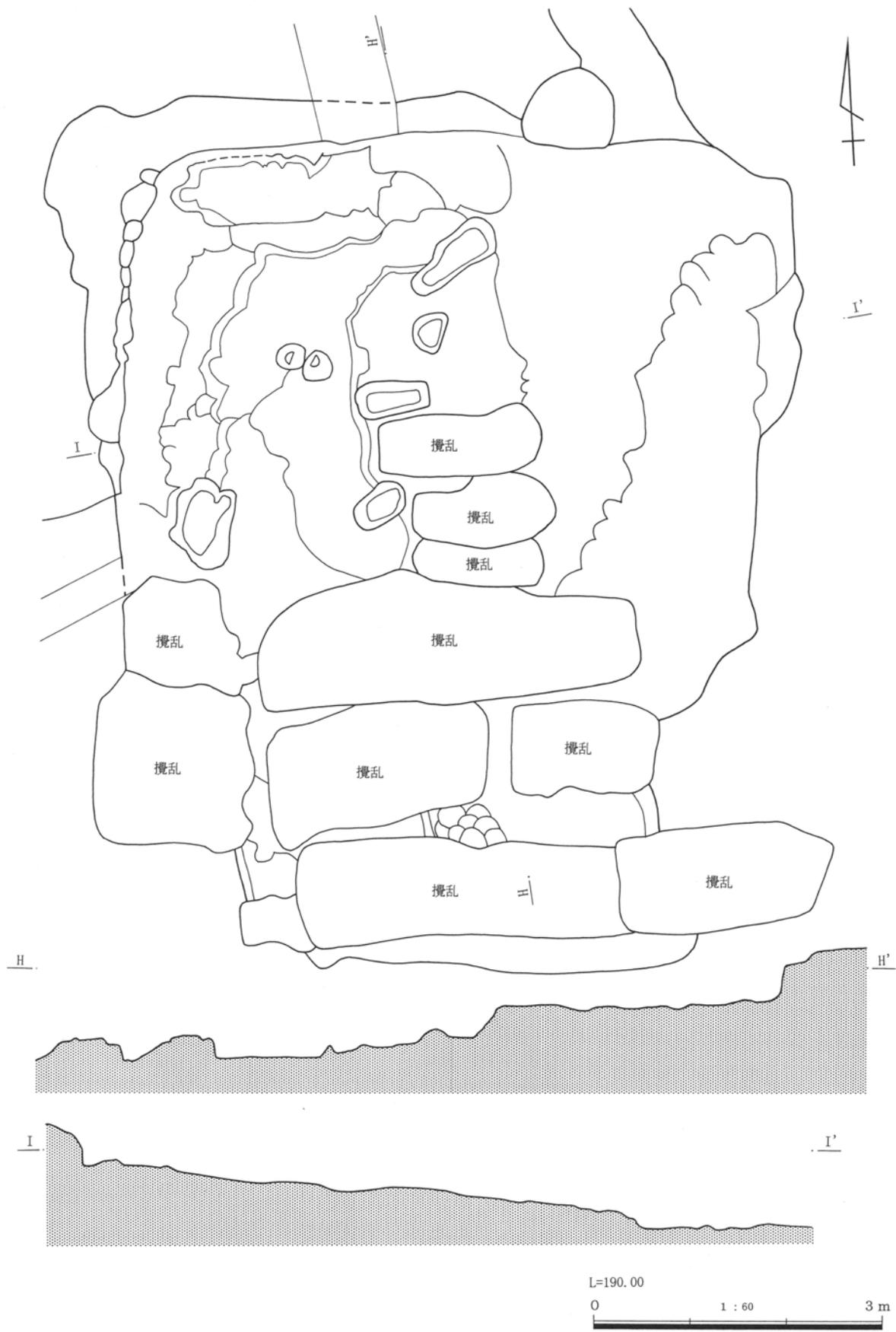
第23図 富岡竹ノ内1号古墳石室平面・断面図



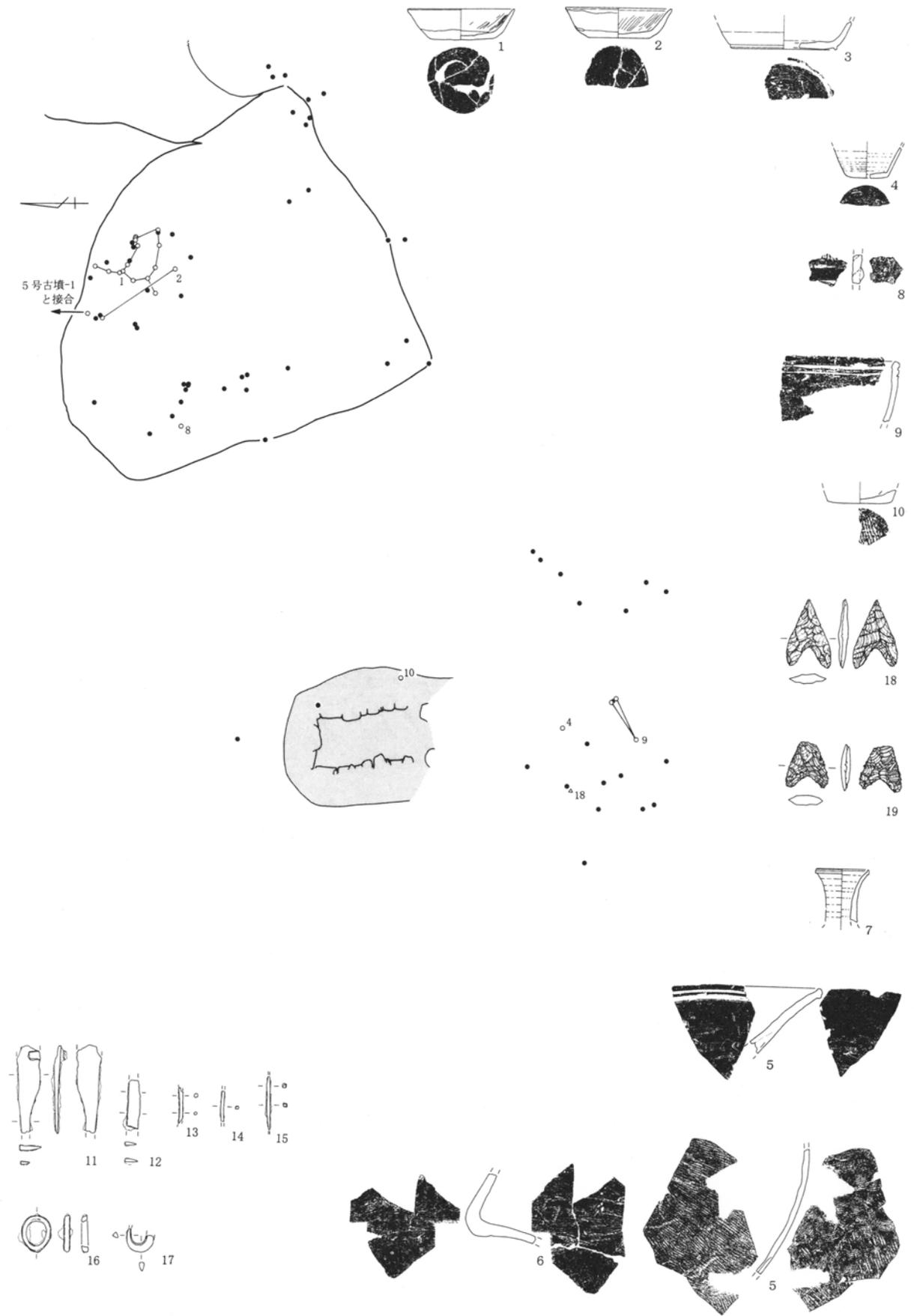
(単位はcm)

NO.	縦	横	奥行	NO.	縦	横	奥行
1	87	116	56	16	76	90	39
2	105	125	54	17	40	65	77
3	102	78	36	18		44	65
4	50	44	83	19	35	45	72
5	20	35	38	20	42	53	59
6	28	39	64	21	37	46	55
7	13	25	51	22	32	55	40
8	40	42	45	23	30	62	64
9	28	29	46	24	32	52	61
10	19	17	40	25	12	22	
11	30	28	65	26	22	36	
12	20	44		27	73	123	65
13	44	72	86	28	120	67	20
14	29	44	63	29	40	36	
15	45	83	43	30	23	44	36

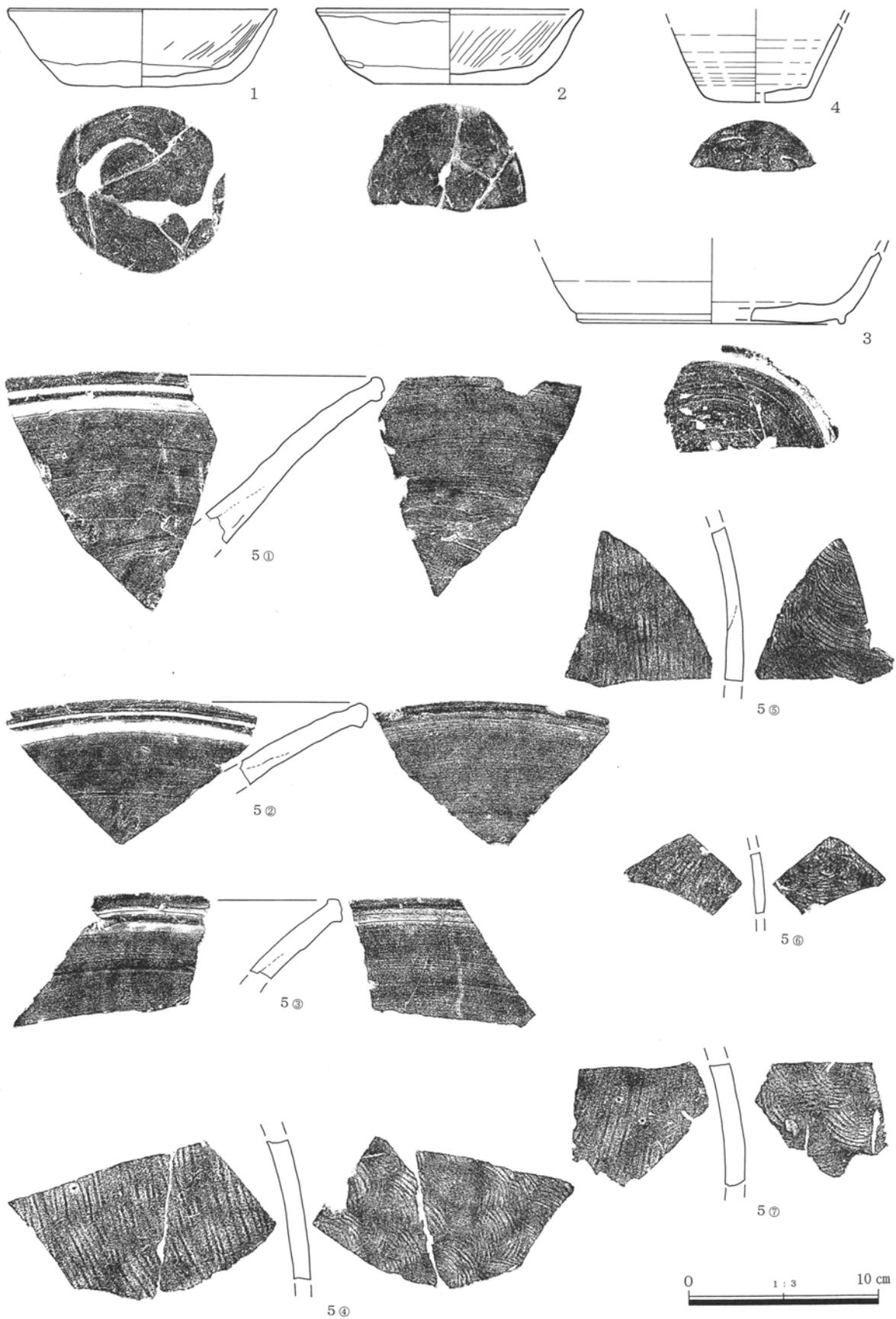
第24図 富岡竹ノ内1号古墳石室展開図



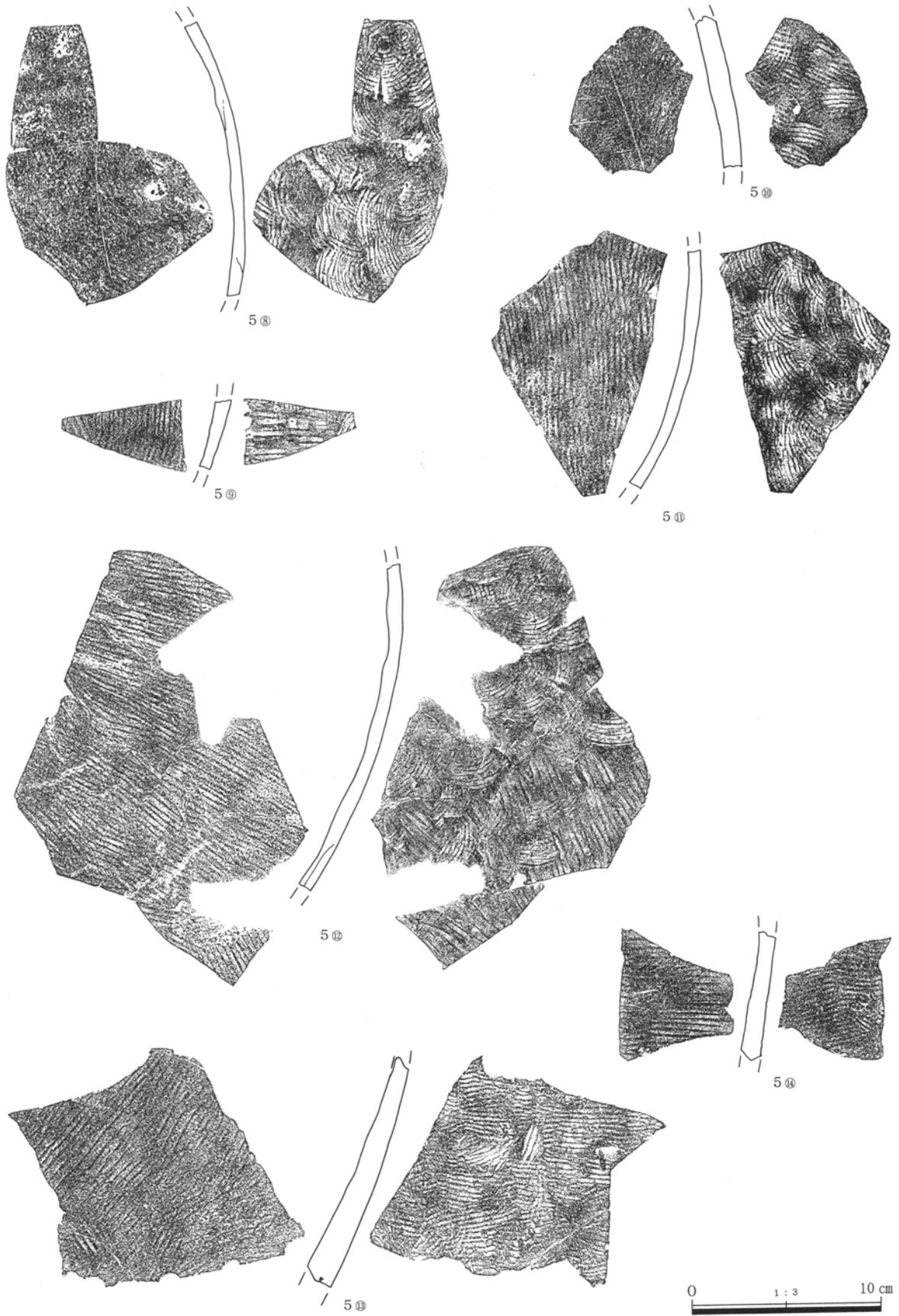
第25図 富岡竹ノ内1号古墳石室掘り方平面・断面図



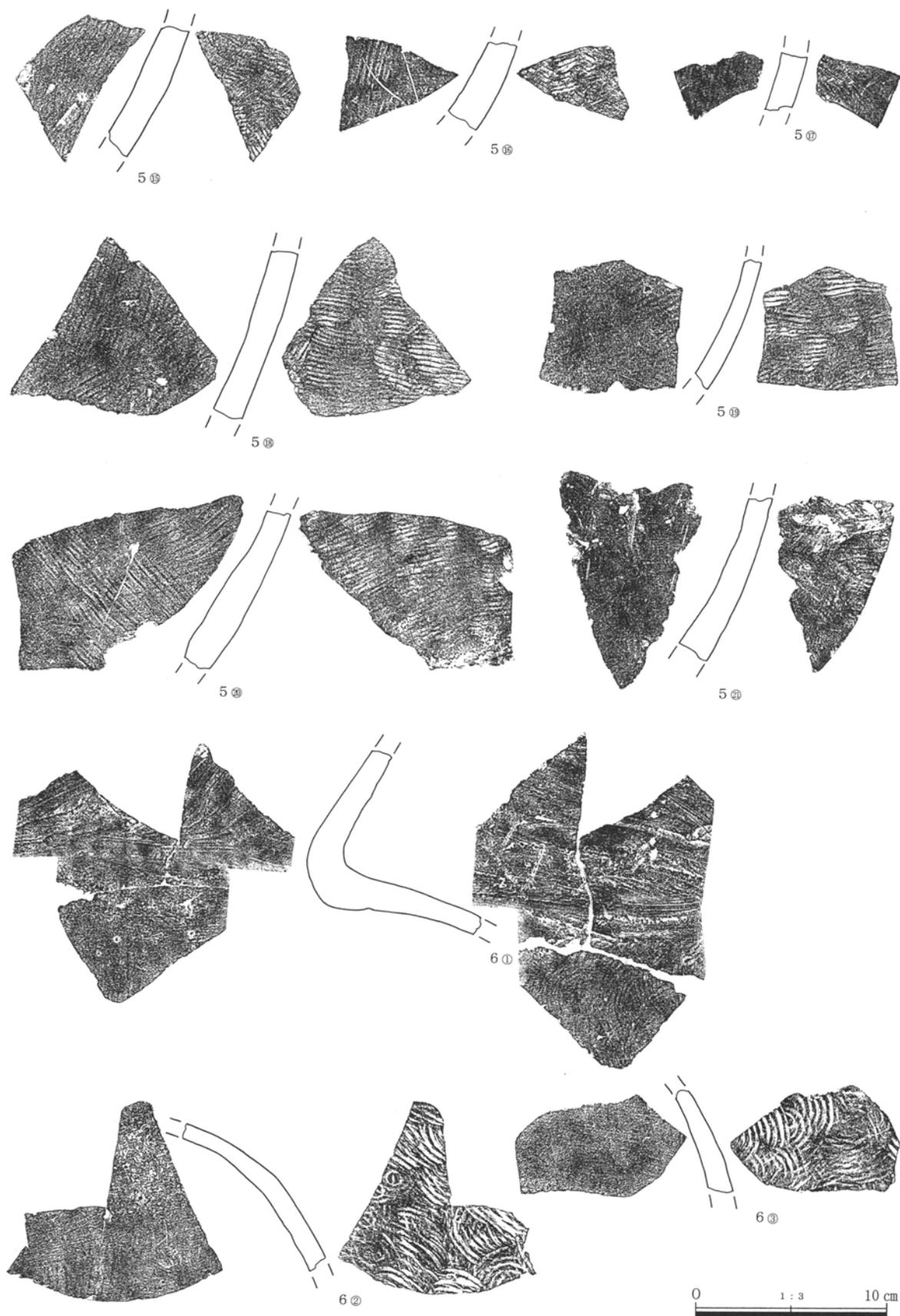
第26図 富岡竹ノ内1号古墳出土遺物分布図



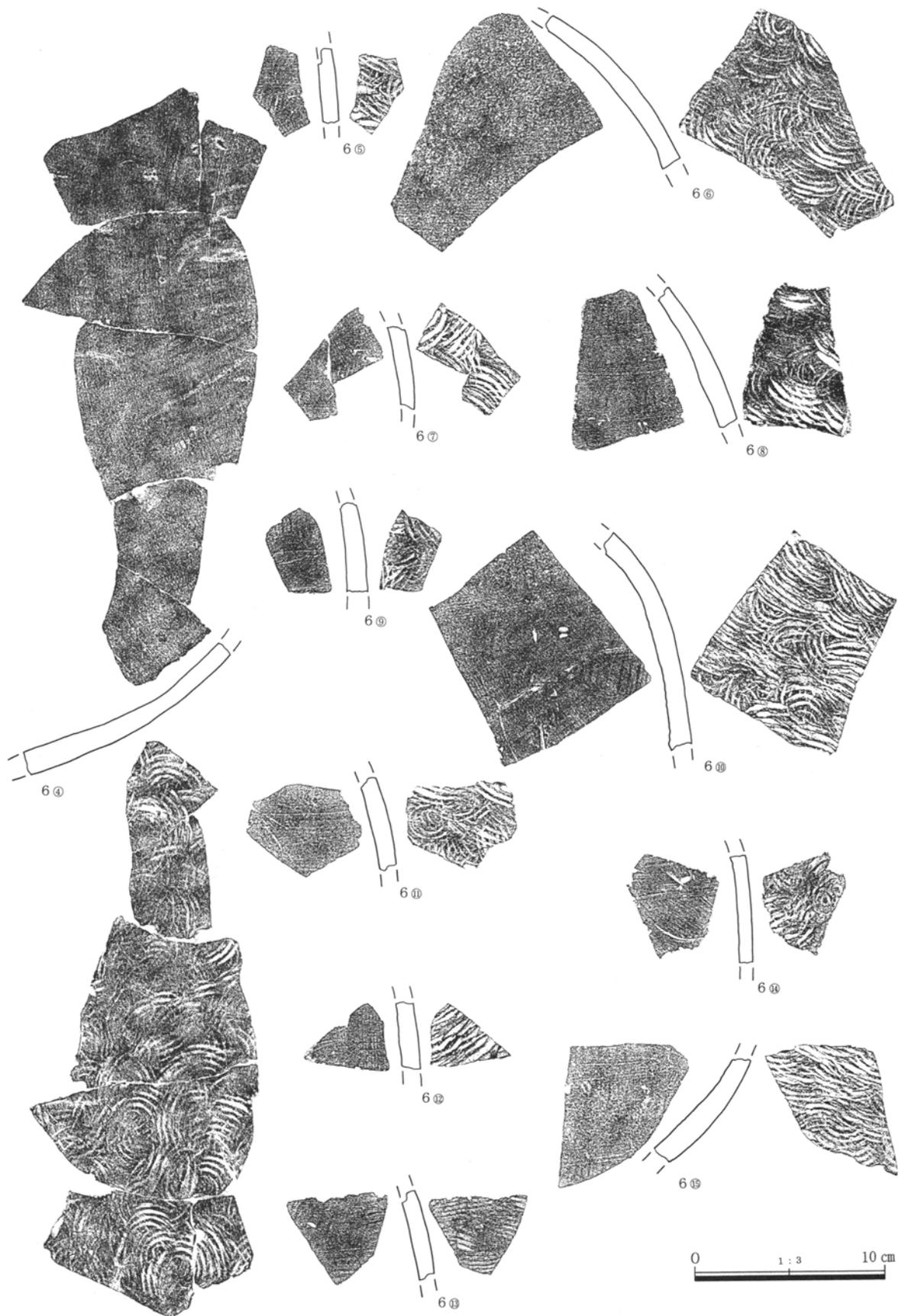
第27図 富岡竹ノ内1号古墳出土遺物図(1)



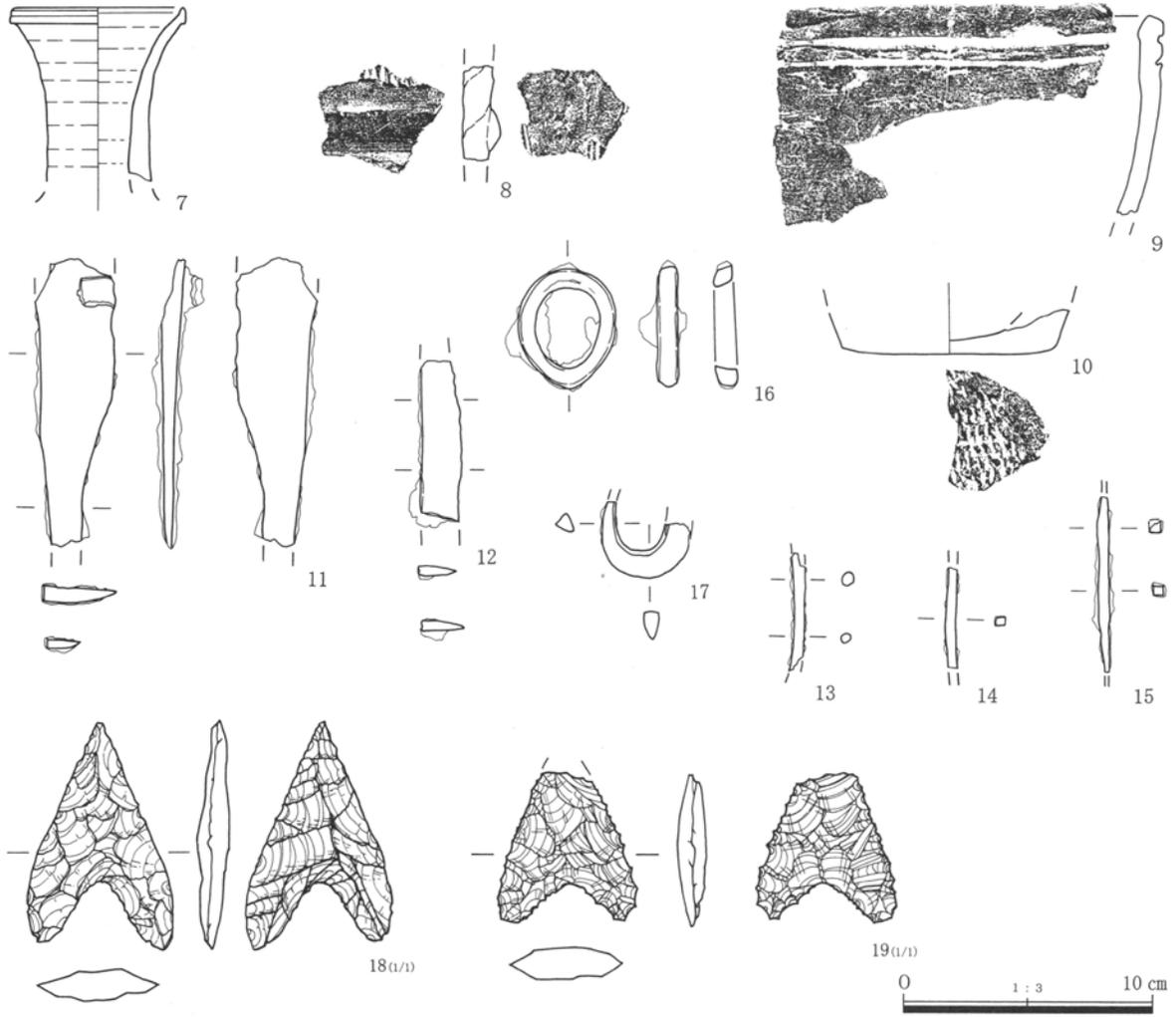
第28図 富岡竹ノ内1号古墳出土遺物図(2)



第29図 富岡竹ノ内1号古墳出土遺物図(3)



第30図 富岡竹ノ内1号古墳出土遺物図(4)



第31図 富岡竹ノ内1号古墳出土遺物図(5)

3号古墳（第32～36図 P L・10・11・13・22）

位置 10～Q—13～17 南面する斜面中段に選地、1号古墳と5号古墳の間にある。試掘で周堀が検出されてはいたが、大きく削平されているにもかかわらず、予想外にも主体部が残っていた。1号古墳の周堀とは重複しているが、新旧関係を明らかにすることはできなかった。

形状 北側の周堀と一部残る墳丘から円墳と考えられる。規模は、羨門から北側に残る墳丘までを測ると南北15m前後である。西は斜面の勾配のまま、東は見せかけの2～3段で前庭に続く。

墳丘と外部施設 墳丘は、斜面を勾配に沿って整地した上に、周堀の掘削土を盛土に代えて作っている。断面でみた限りでは、一線を引いたような整地ではなく、勾配そのままの波打った状態である。葺石はない。

前庭 西羨門の南西側に人頭大の自然石が30点近くあった。方台形の掘り方の中に、付け基壇風の低い石積みがあったのだろうか。石は粒がそろい、列を組んだ様子に見える。ただ、この石に混在して8世紀代の杯が出土しており、追葬や墓に再利用した跡とも考えられる。

周堀 北側を検出した。東側に続くことは確かであるが削平されている。西側は既に1号古墳の周堀がめぐり、墳丘の裾回りを削る程度にして前庭に続く可能性がある。北側は、南北8m、最も深い所で140cmである。底面は住居のような矩形をしているのが特徴で、貼床されたような状態であった。そこから南にむかって延びる溝のような掘り方は、掘削土を運んだ際の作業通路ではないだろうか。

主体部の構造 粗粒輝石安山岩の自然石を乱石積みした両袖型横穴式石室である。壁1～2段を残すだけで上部の構造は不明である。開口方向はS11°W。石室の規模は全長4.80mを測る。玄室は全長2.17mの撥形、幅は奥壁で推定1.90m、中央で1.62m、玄門で1.34mである。壁面構成は、東壁が1段、西壁が2段を残していた。石は、長さ40cm前後の扁平なものが多く、大きさの点では5号古墳に近い。これらを小口積、互目風に積む。床には、5cm大、粒揃いの玉石を一面に敷いている。羨道とは段差がない。

羨道 全長2.63m、幅は中央で0.98m、羨門で推定0.85mである。床の石は玄室よりも大きめである。

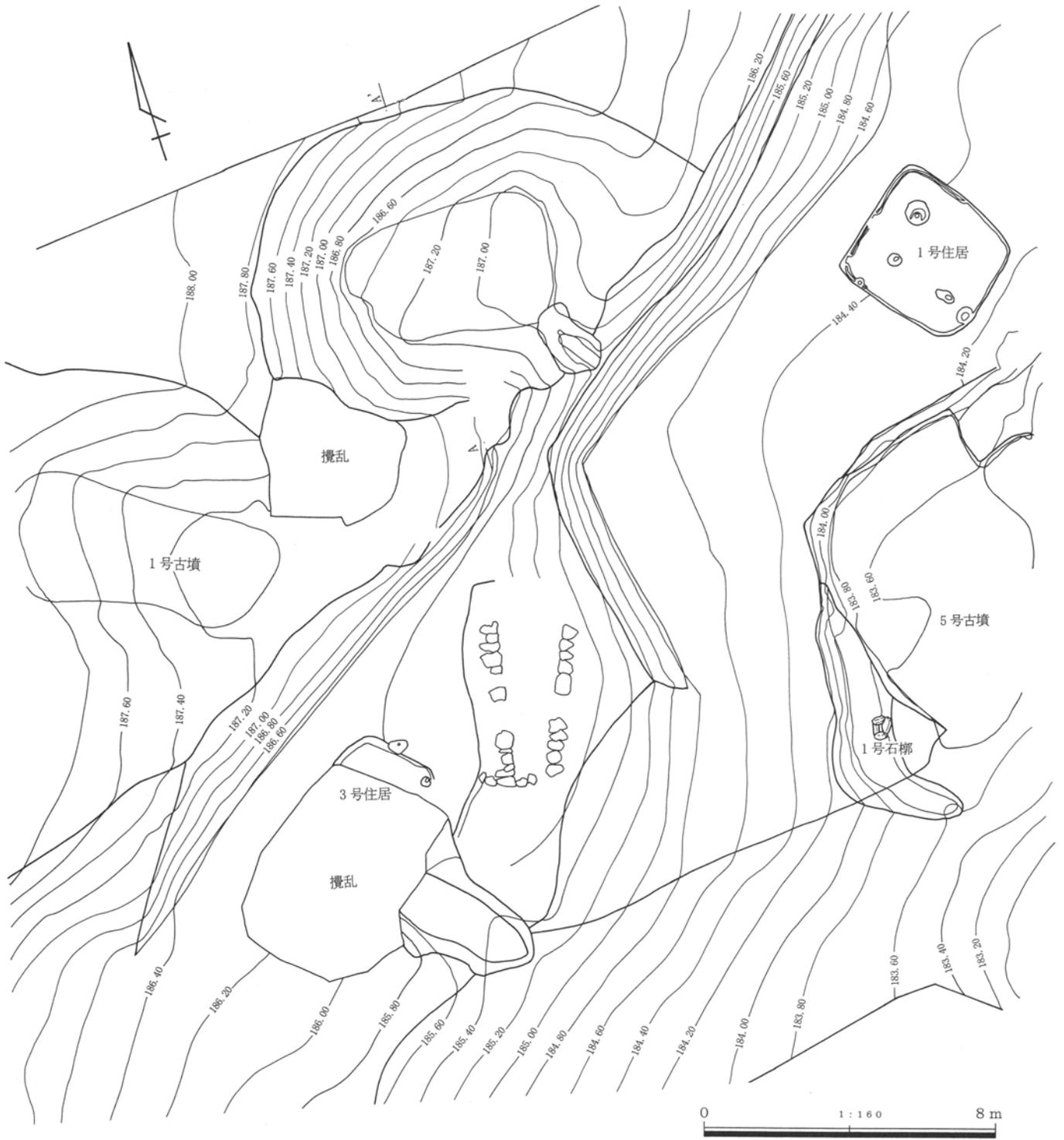
出土遺物 前庭から土師器杯1個体、須恵器杯1個体が出土、周堀で羽釜が出土している。

石室の構築状況 掘り方は、全長6.26m、幅は奥壁で4.76m、羨門で4.32mの長方形である。一旦、ローム漸移層まで掘り込み、貼床をしている。この中に石室は、掘り方の中心から東に寄せられて作られている。まず壁石を直接床に置き、奥壁から玄門にむかって小口積、多少は互目らしい積み方ではあるが、石は1号古墳の半分弱、長短不揃いでクサビ状の支え石が巧みに使われていた。

裏込めは、拳大の玉石を主に、小砂利、ロームほかを詰め込んで被覆している。総じて薄く、厚さも東西で異なる。掘り方の壁と裏込めとの間は、ロームと黒褐色土の互層で壁1段ごとにつき固められている。掘り方では、17本のピットが検出された。このうち3本のピットは玄室の壁石の外側にあり、壁面の養生か天井石を架ける際の杭の跡であろう。いずれも直立して深い掘り方である。また、掘り方の西側には、L字形に溝が続いている。構築中の排水用か壁石搬入用の造作の跡か。

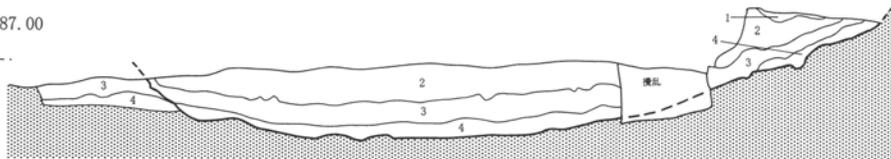
所見 大字和田山字後和田546番地、同547番地の2、同547番地の7に所在、上毛古墳綜覧漏れ。

南斜面でも東南への緩斜面を利用した山寄せ古墳である。西側の周堀が不明瞭なのに対して、北から東は弧状にめぐらして墳丘をより高く見せようと作られている。撥形の石室形態や付け基壇風の前庭に特徴がある。壁面の構築にも巧みなどところを見せ、頂上部にある1号古墳とは時差が感じられる。隣り合う4号、5号と一群をなすものであろう。時期は、7世紀でも中葉か。



L=187.00

A

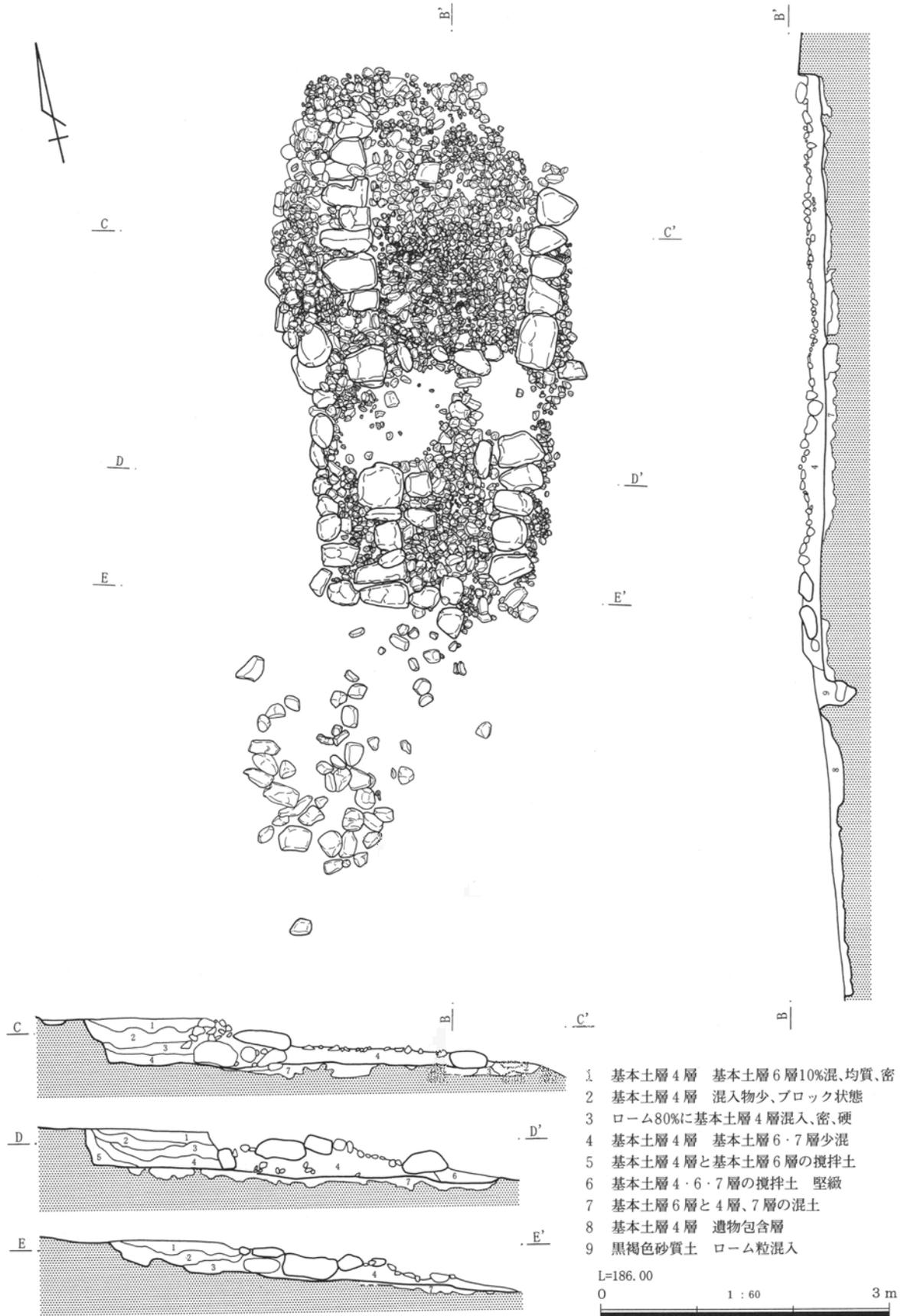


A'

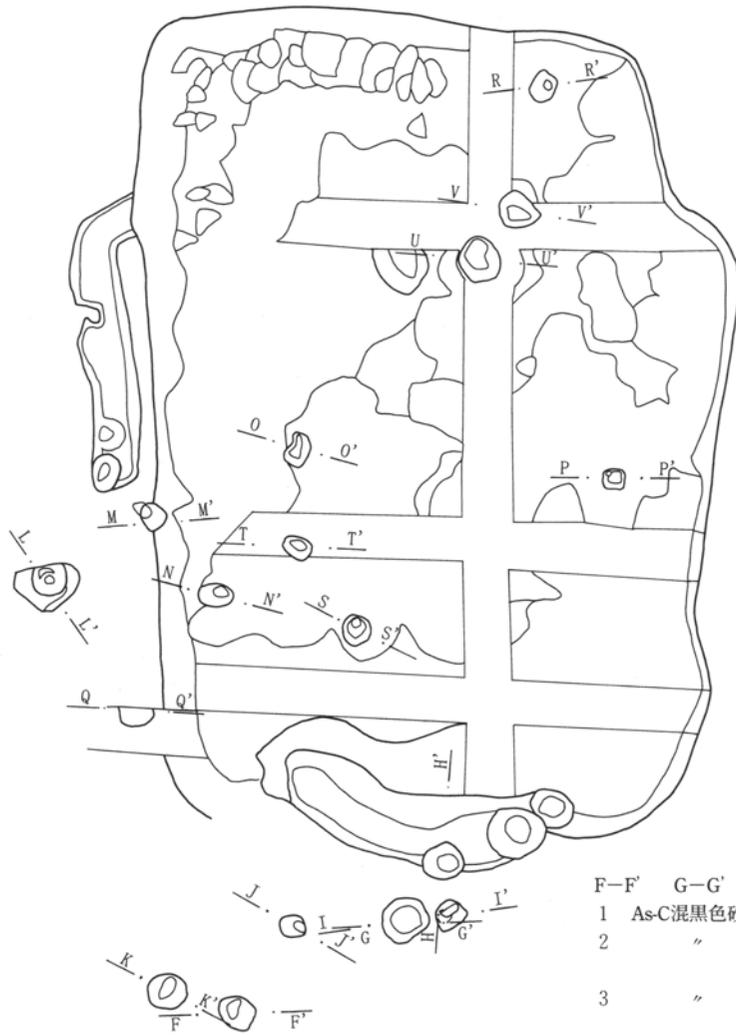
- 1 基本土層 1層
- 2 基本土層 3層
- 3 基本土層 4層
- 4 基本土層 6層



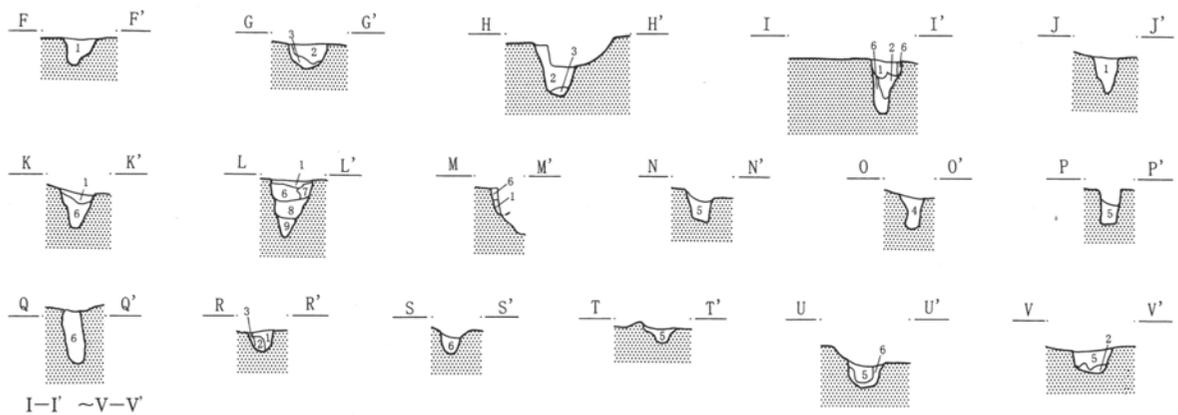
第32図 富岡竹ノ内 3号古墳平面・断面図



第33図 富岡竹ノ内3号古墳石室平面・断面図



- F-F' G-G' H-H'
- 1 As-C混黒色砂質土 細粒、密
 - 2 " 1層に基本土層6層と黒褐色砂質土が混入
 - 3 " 1層に1~2mmくらいのローム粒多混

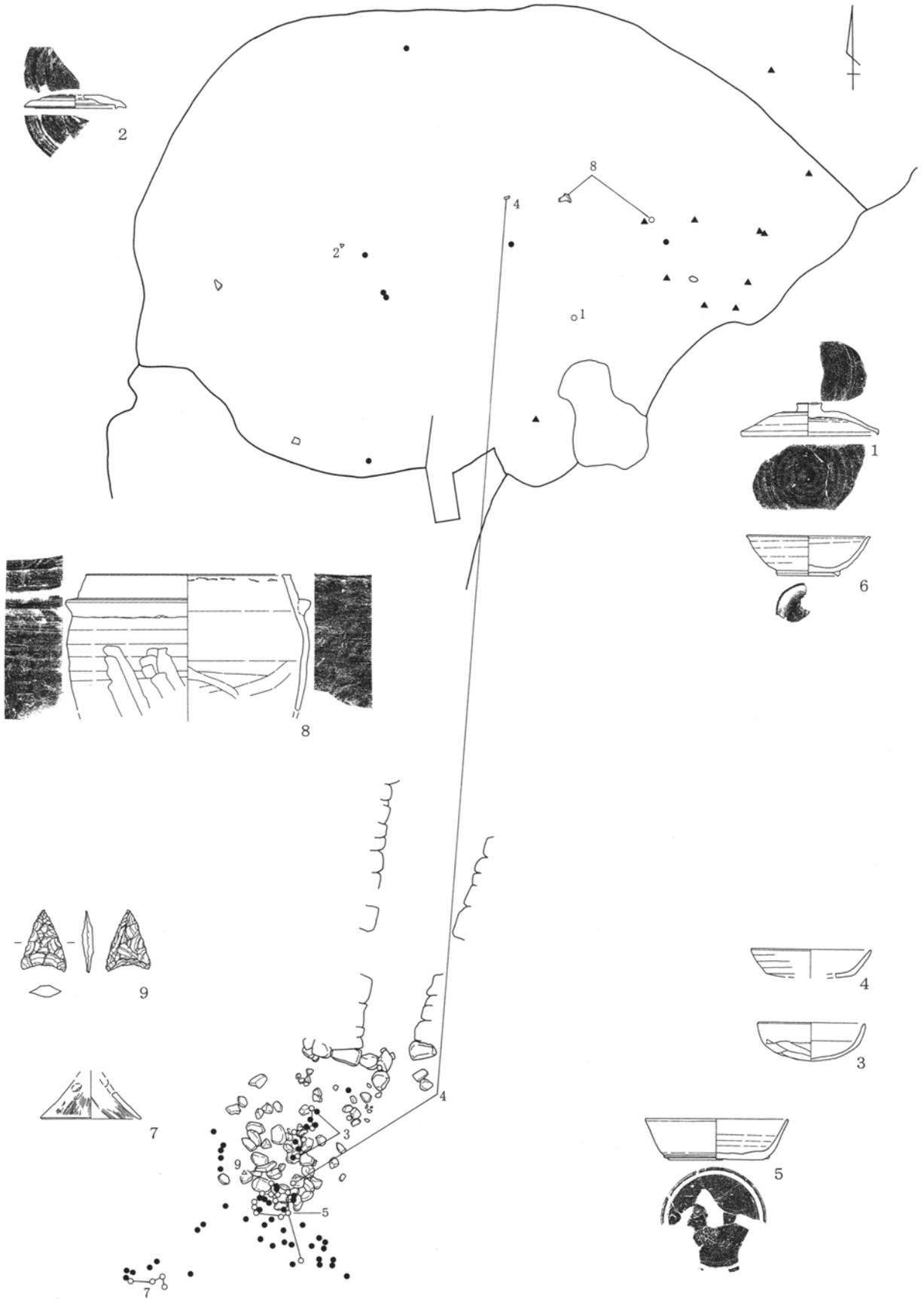


- I-I' ~V-V'
- 1 As-C混黒褐色砂質土 基本土層4層 軽石、ロームほか混入、密
 - 2 " 1層に5層と6層が混入
 - 3 " 1層にローム多混
 - 4 As-C ローム含む
 - 5 黒褐色砂質土 ローム含む、粘性あり、白色軽石粒ほか少混、密
 - 6 暗褐色砂質土 ローム含む、粘性あり
 - 7 ロームブロック
 - 8 6層と7層の混土
 - 9 暗褐色砂質土 ローム含む、粘性弱

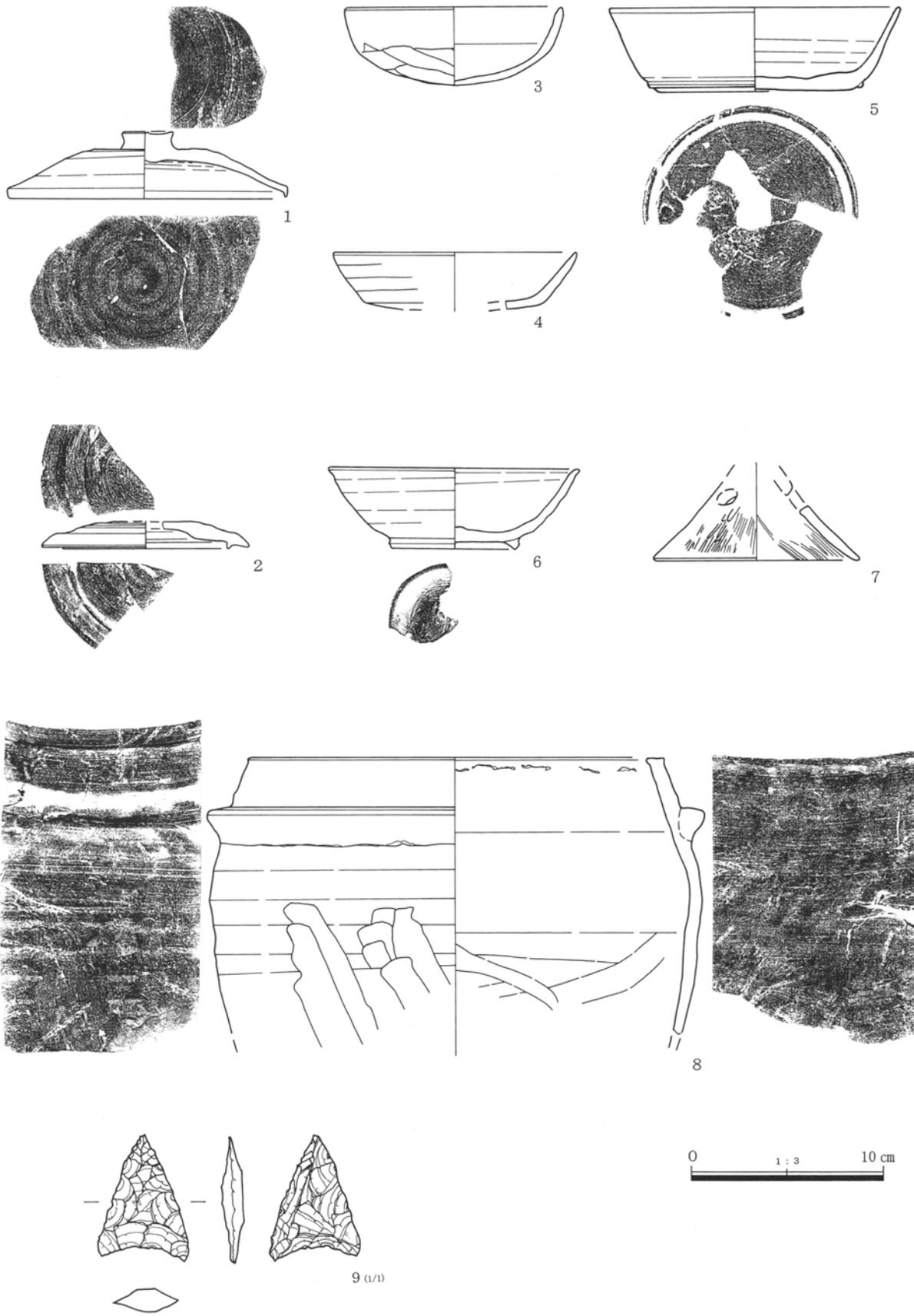
F~H.....L=185.60
 I~K・R~V...L=185.70
 L.....L=186.20
 M~O・Q.....L=185.80
 P.....L=185.50



第34図 富岡竹ノ内3号古墳石室掘り方平面・断面図



第35図 富岡竹ノ内3号古墳出土遺物分布図



第36図 富岡竹ノ内3号古墳出土遺物図

4号古墳（第37～39図 P L.11・12・22）

位置 1 I～M—14～17 南面の斜面中段に選地、3号古墳の東にあり、中間に割り込むように5号古墳がある。周堀は、北側で2号住居、4号住居、5号住居と重複し、北東から東側で7号住居、8号住居と重複している。いずれも古墳の方が新しい。墳丘は、宅地造成のために県道と同じ高さまで盛土されていたが、主体部は掘り方の一部を残して地山以下まで徹底的に壊されていた。石室の石は、そのまま詰め込まれ埋め戻されていた。上毛古墳綜覧からは漏れているが、宅地造成されるまでは石室の中段以下を残していたのではないか。

形状 円墳 規模は南北11.0m、東西方向で9.80mである。

墳丘と外部施設 南斜面を勾配に沿って整地し、これに周堀を掘削して基壇面としたものであろうが、全体は削平もしくは崩落していた。図示した等高線は、基本土層の4層中位のもので、当時の整地面には近い。東周堀の上位で葺石らしいものが数点出土した。数からすると、基壇面を縁取る程度であったろう。浅間B軽石が、周堀から墳丘にかけて水平に堆積している。墳丘が本来低いか、それとも石室が早い時期に崩落していたのではないだろうか。綜覧から漏れたのも、これが理由であろう。

周堀 全周している。東側は、幅2.50～2.60m、深さ1.10～1.30mと一定している。北側は、斜面の起伏が増すため幅も広く、一段と深く掘られていたらしいが4号住居、5号住居の掘り方との重複を厳密には区別できなかった。また、西側では東側と対をなす似た掘り方の中に、改めて一段深く掘られて長方形の土坑状になっていた箇所がある。埋没状況では、周堀との間に多少の時差がある。埋葬施設としてみるには、底面に階段式の段差があり難点がある。粘性の強い暗色帯まで掘り下げていることから、石室の裏込め養生土を採掘した跡と考えた。半円状の鋤跡が見事に残っていた。

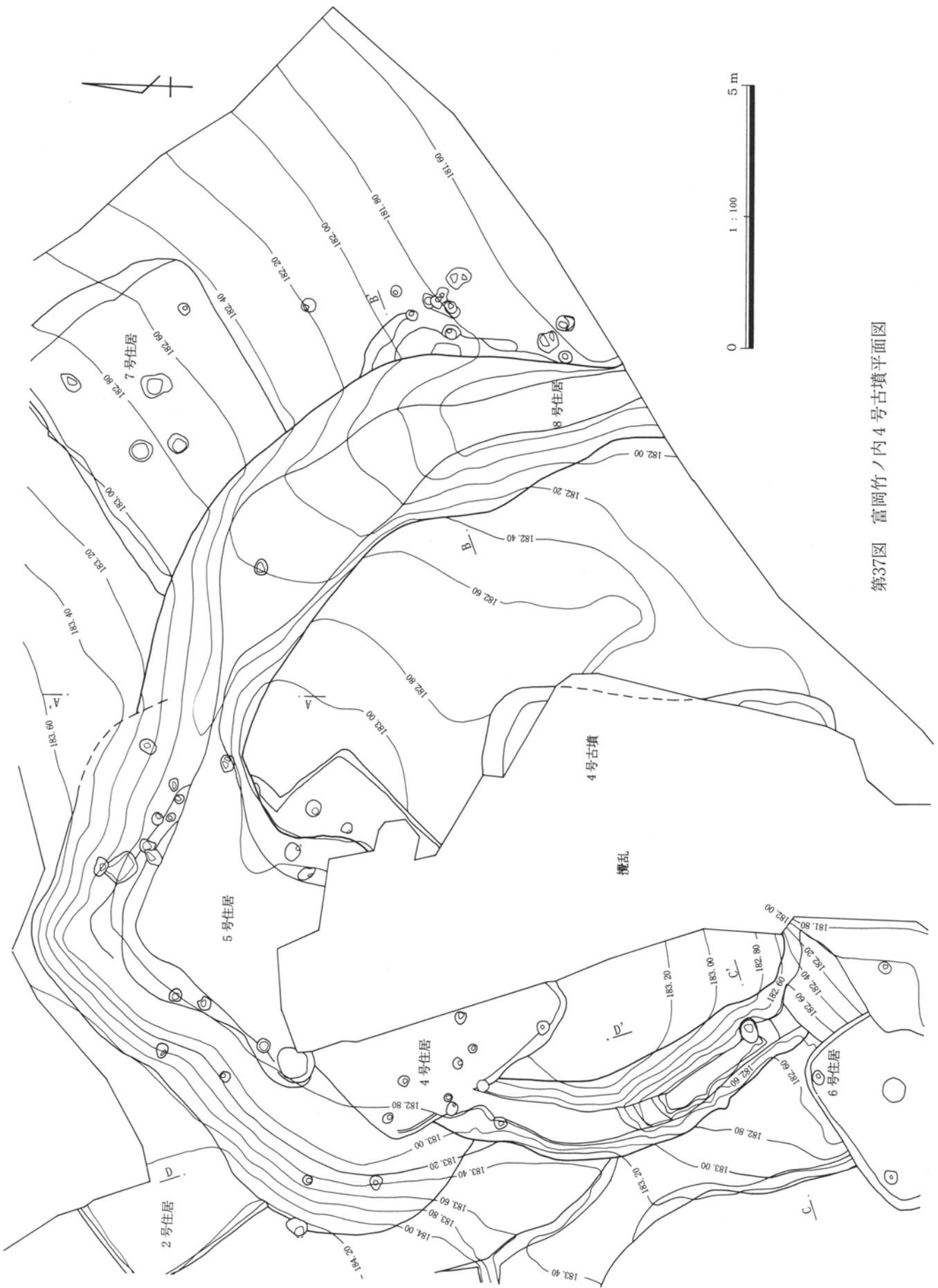
主体部の構造 掘り方だけを検出した。攪乱坑内の石を見ると、南開口、粗粒輝石安山岩を使用した両袖型横穴式石室で、壁の中段以下を良好な状態で残していた可能性が高い。

出土遺物 周堀全体から出土したが、浅間B軽石層下の高いレベルが多い。細片で、接合率は低いことから他の遺構からの流れ込みと思われる。報告1の杯は、西周堀内にある長方形土坑状の上層で出土した。4号古墳に直接関係するか、後続する5号古墳に帰属させてもよい時期である。報告3と4の敲石は、北周堀の下層から出土した。4号住居か5号住居からの埋没時の混入である。

石室の構築状況 掘り方は全長6.58mの長方形、しっかりとした掘り方であるが攪乱を受け北東隅から南東隅を残すだけであった。玄室がある北東隅では壁高が70cmもあるのに対して、南東隅では半分以下となる。そして、そのまま前庭らしい落ち込みに続いている。床は、一旦ローム漸移層まで掘りこみ、貼床して地業面を作る。南東隅にわずか拳大の石が見られただけで、石の数は少ない。壁際は、基本土層の4層～6層を攪拌した互層で充てんされている。

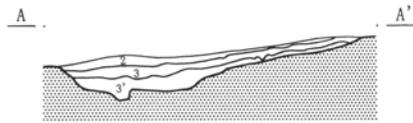
所見 大字和田山字後和田547番地の7、同596番地の5に所在、上毛古墳綜覧漏れ。

南斜面でも下位、等高線には直交して選地する。山寄せ古墳に変わらないが、周堀が全周し3号古墳までとは違う特徴となっている。時期は7世紀代、全周する周堀や長方形の石室掘り方の特徴から、5号古墳とは前後するか。上毛古墳綜覧では車郷村第43号墳が隣接する字後和田596番地の1に所在し、県道際には石室のものらしい大振りな石が並んでいる。また、本墳の東南に接して浅間B軽石が純層で堆積し、古墳の周堀を覆う状態と似ている。この台地上では崖端までの余地は少ないが、なお古墳が存在するらしい。

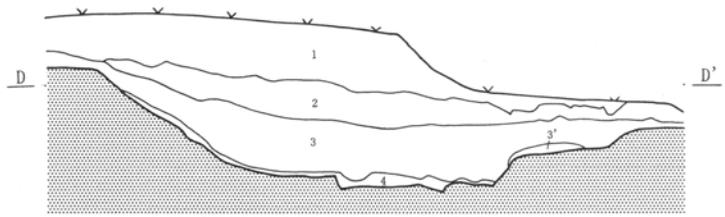


第37図 富岡竹ノ内4号古墳平面図

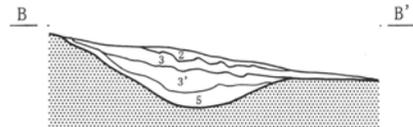
L=183.60



L=184.00



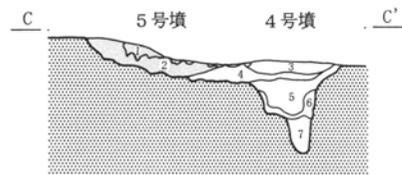
L=182.50



A-A' B-B' D-D'

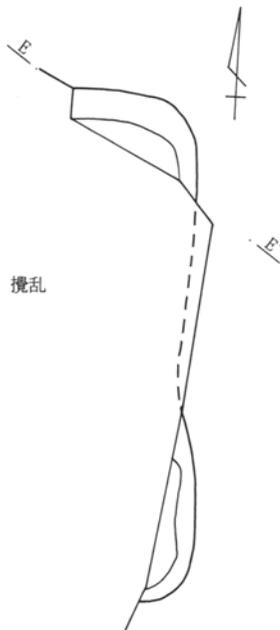
- 1 基本土層1層 表土
- 2 基本土層3層 As-B軽石純層
- 3 基本土層4層 As-C混黒褐色砂質土
- 3' 3層に類似しているが赤っぽい土4号古墳よりも古い覆土
- 4 基本土層6層 ローム漸移層
- 5 As-C混黒色砂質土 細粒、密、硬

L=183.40

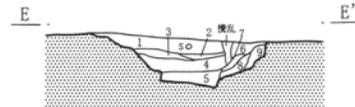


C-C'

- 1 重機による攪乱 (バケットの爪痕)
- 2 As-C混黒褐色砂質土 基本土層上層の2次堆積、均質、密、弾力のある細粒土、明るくAs-Cが少ないので地山と区別
- 3 As-C混黒褐色砂質土 弾力のある細粒土、均質、密、As-Cは1~2mm、2~4層の中で最多
- 4 As-C混黒褐色砂質土 3層と同質、As-Cの混入が少なく、上位に多いので3層と区別
- 5 As-C混黒褐色砂質土 基本土層4層の2次堆積、均質、密、壁際にローム粒少混
- 6 黒褐色砂質土 弾力のある細粒土、As-C少混、ローム漸移層斑混
- 7 6層で埋没するピットの掘り方



L=183.00

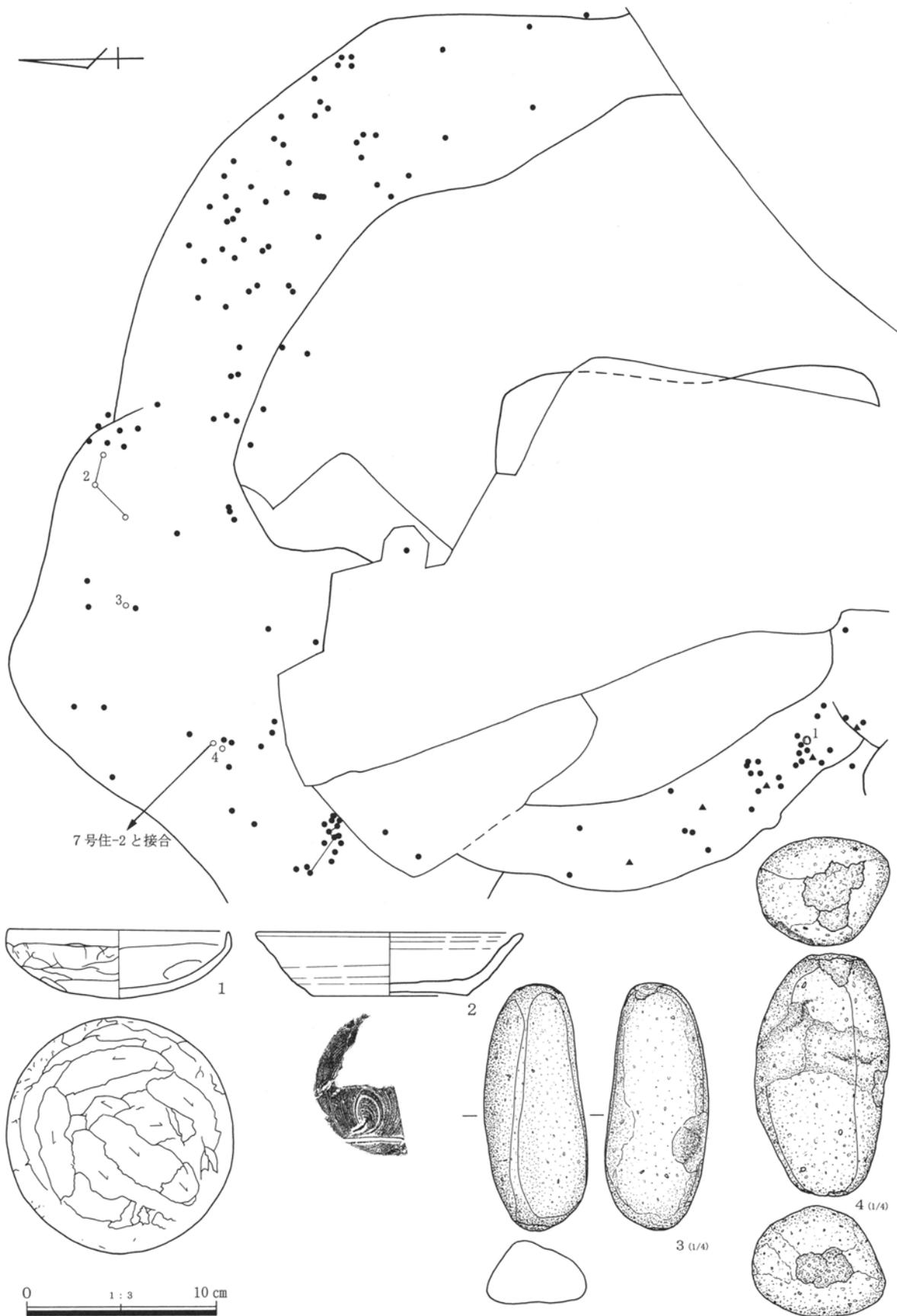


E-E'

- 1 基本土層4・5・6層の攪拌土 1~3層は微差、基本土層5層、6層の混入の量で分けた
- 2 " 2・3層は硬い
- 3 " "
- 4 1~3と同質だが特に基本土層5層が多く、5層との境に横位の縞がある
- 5 1~3と同質だが基本土層6層黒褐色砂質土の混入が多い
- 6 基本土層4層を主とした基本土層5層、6層との攪拌土
- 7 " 微差
- 8 " 明暗、As-Cの量比で分けた
- 9 " "



第38図 富岡竹ノ内4号古墳石室掘り方平面・断面・周堀断面図



第39図 富岡竹ノ内4号古墳出土遺物分布・出土遺物図

位置 1L～O—13～15 南面する斜面の中段に選地、西側の3号古墳よりはさらに一段下位にあり、東の4号古墳とはほぼ同一面にある。4号古墳より新しく、周堀の一部が重複していた。周堀は、東南で6号住居に重複し、北では1号土坑と重複している。全体は、宅地造成で石室の床近くまで削平されていたが、これ以前にも江戸時代後期の2号溝で石室の前庭が深く削平されていた。2号溝の改修時、護岸用に作られた石垣は、この古墳から抜き出されたものである。1号石槨は、埋没した西周堀内に作られている。

形状 検出した周堀から円墳、規模は南北方向で最大11m、東西方向で9.80mである。

墳丘と外部施設 墳丘は、地山のロームまですべて削平されていた。葺石のあった可能性は少ない。

前庭 羨門から左右にのびる石列がある。掘り込みは検出できなかった。

周堀 全周する。幅2m前後で、深さとともに一定している。

主体部の構造 粗粒輝石安山岩の自然石を乱石積みした両袖型横穴式石室である。壁1～3段を残すだけで、上部の構造は不明である。開口方向はS7°Wである。石室の規模は5.10mを測る。

玄室 全長2.36mの短冊形で、西壁が直線的、東壁に胴張りが見られる。幅は中央で1.35m。奥壁は、1段目が3石分のうち西の2石が残されていた。壁面の構造は転びか。床は卵大の玉石で、手の平大の羨道と大きさが区別されている。ただし、床面同士に段差はない。

羨道 全長2.74m、幅は中央で0.71m、玄門側よりも羨門の方がわずかに広がる。壁は西の方が直線的、東は崩れも入るのか弧状である。玄門から羨門にむかって段ごとに積まれ、玄室よりも長めの石が使われている。閉塞は、框石の内外両側から人頭大の転石による積み上げで、そのまま羨道全体に及ぶ様子もある。

出土遺物 周堀からは散漫に出土、報告1の蓋は1号古墳出土のものと同接合している。3、4も明らかに流れ込みである。5の鉄鏃は、攪乱されていたが唯一玄室内から出土した。

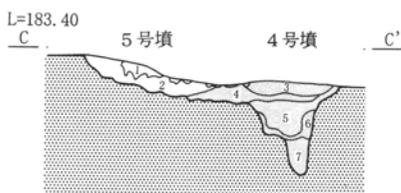
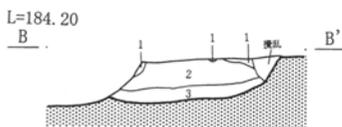
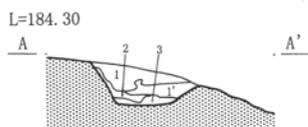
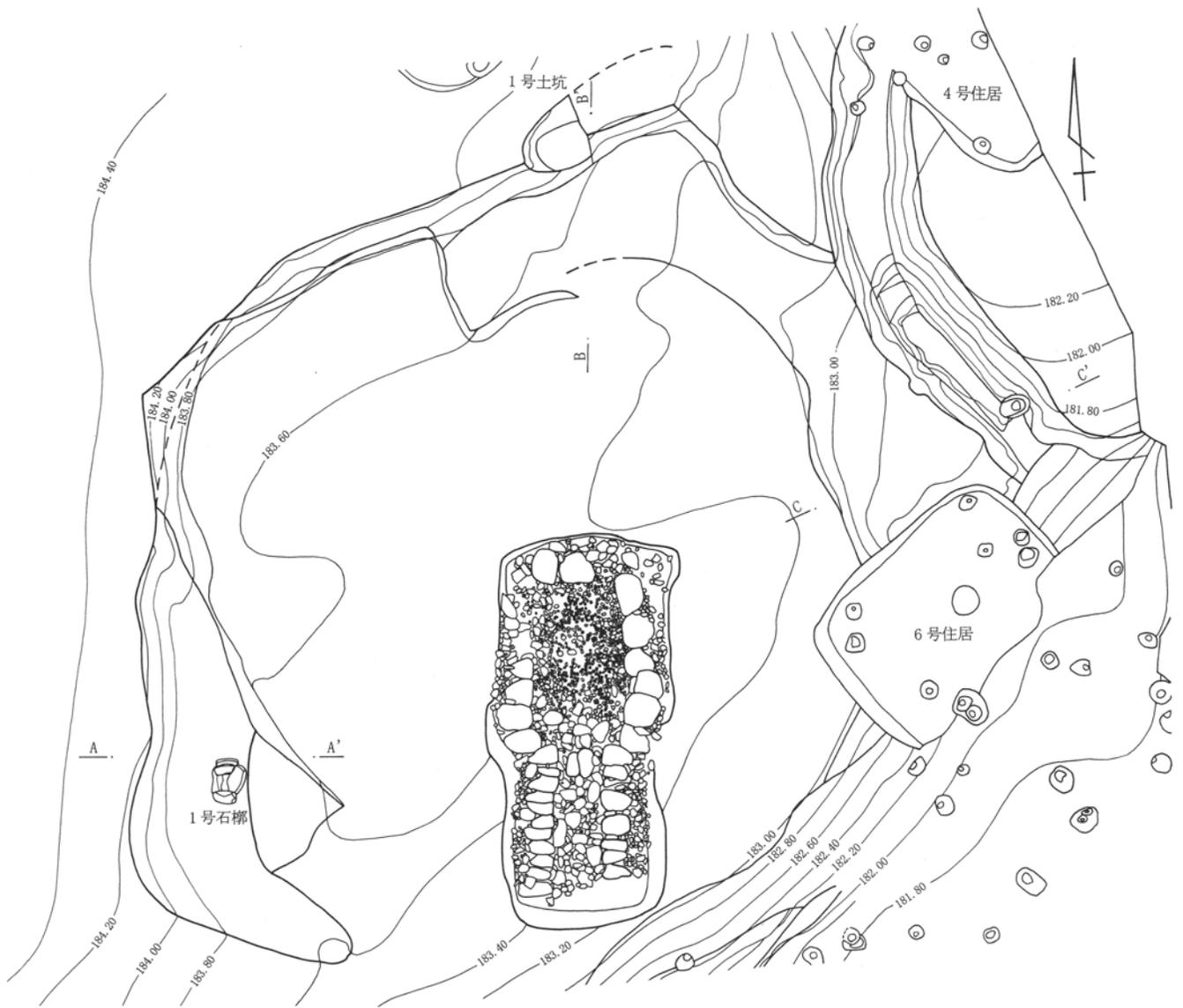
石室の構築状況 掘り方は全長6.20m、幅2.55～3.50mの長方形である。一旦、ローム漸移層まで掘りこんでロームと黒褐色土の混土で貼床をしている。壁際沿いが帯状に一段深く、貼床も密に施されている。この上に直接壁石を設置する。北東隅が横置きで大きく、これに奥壁を直交させて全体の基準にしている。

その後は、小口積、互目風に見えるが、北東隅だけでなく玄門など複数の箇所を基準にして壁面が作られている。壁石の大きさは、1号古墳を基準にすると半分以下、2石を重ねて1段にした箇所もあり統一感に欠けている。しかし、四角錐ではなく三角錐状のものまで利用しており、いかにも手慣れた職人技という印象さえ受ける。支え石も、不揃い気味の壁石の固定や重心をとるのに、実に巧みに使われていた。羨道は少なく、玄室ではロームにのる西側は少なく、盛土が厚い東壁に多い。東南隅は、人頭大の石まで使って総じてかさ上げされている。

裏込めは、羨道が拳大の玉石を詰め込む程度と少量なのに対して、玄室はそれよりも大きめで厚さ30～40cm平均、しかも被覆してちがいを見せる。掘り方との残ったすき間は黒褐色土等の互層で固めている。ロームは床面の養生まで、裏込めの中にはない。

所見 大字和田山字後和田547番地の7に所在、上毛古墳綜覧漏れ。

南斜面の中段でも下位、等高線に直交して選地する。4号古墳と同じように周堀は全周するが、1号古墳、3号古墳までに見られた掘り方の中心から右に寄るくせはなく、石室全体が掘り方にすっぽりと収まる形である。



A-A' B-B'

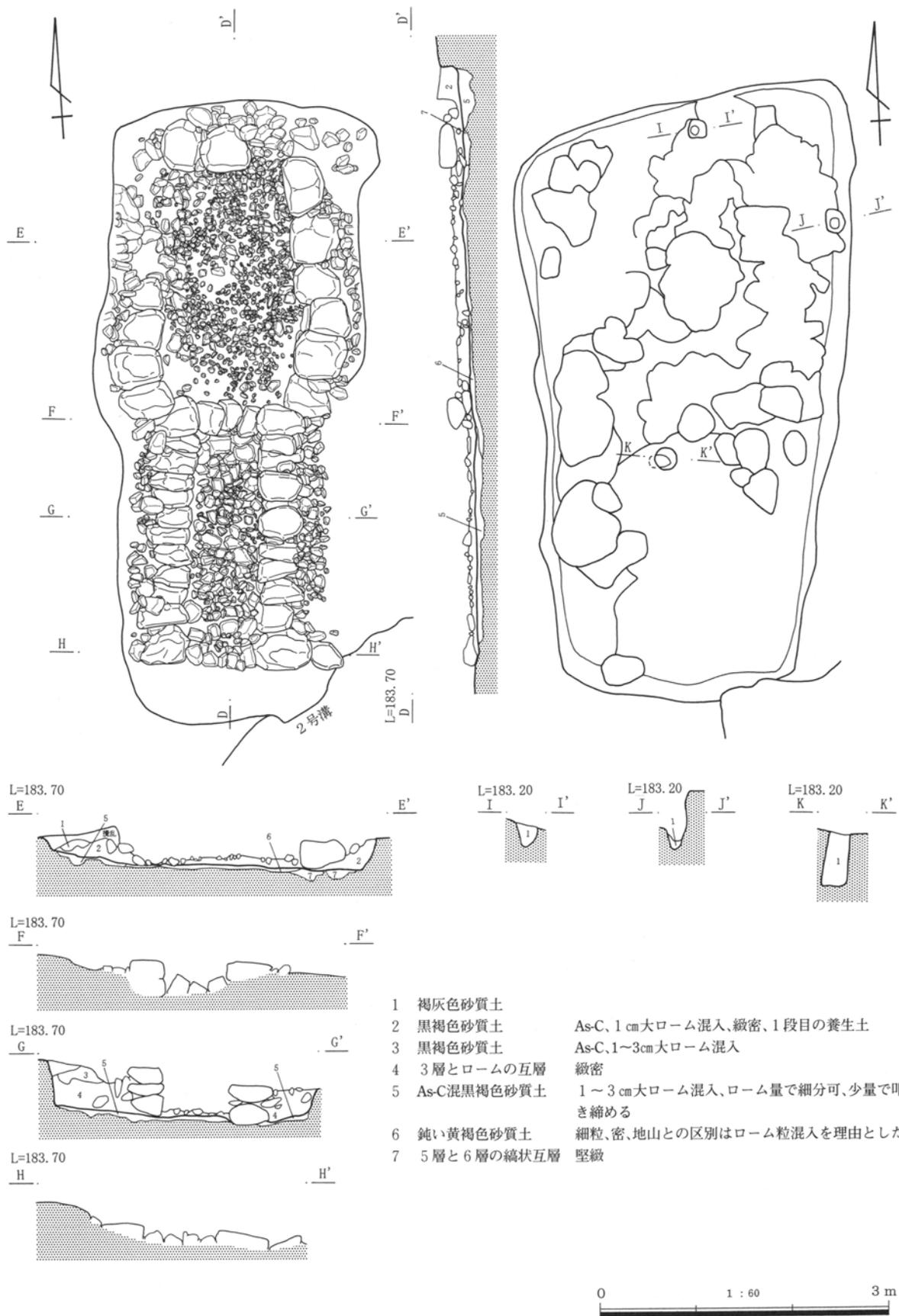
- 1 基本土層4層 As-C混黒褐色砂質土
- 1' 暗褐色土 1層に類似しているがローム含む、1層よりAs-C軽石少ない
- 2 基本土層6層 ローム漸移層
- 3 基本土層7層 ローム層

C-C'

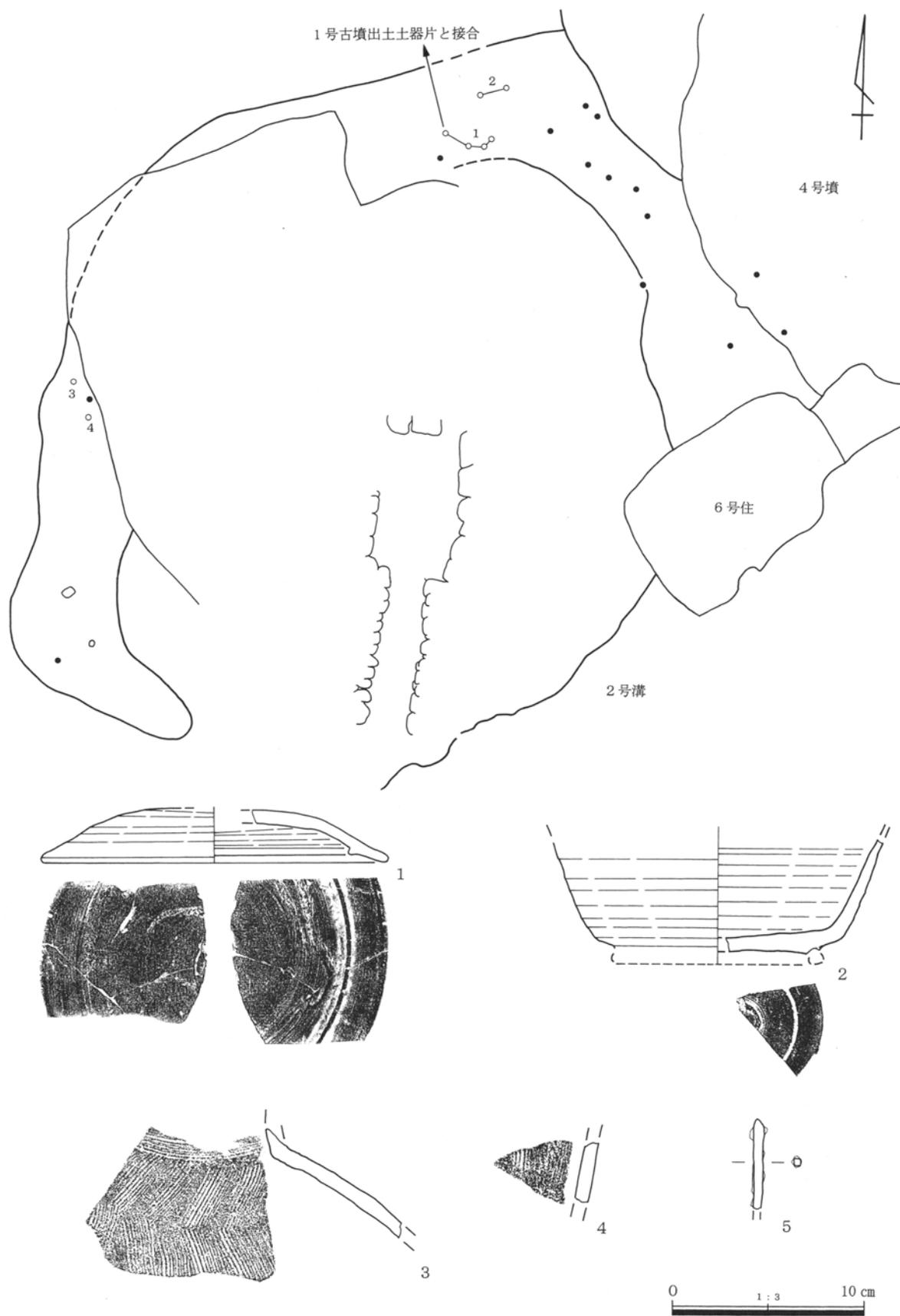
- 1 重機による攪乱 (バケットの爪痕)
- 2 As-C混黒褐色砂質土 基本土層上層の2次堆積、均質、密、弾力のある細粒土、明るくAs-Cが少ないので地山と区別
- 3 As-C混黒褐色砂質土 弾力のある細粒土、均質、密、As-Cは1~2mm、2~4層の中で最多
- 4 As-C混黒褐色砂質土 3層と同質、As-Cの混入が少なく、上位に多いので3層と区別
- 5 As-C混黒褐色砂質土 基本土層4層の2次堆積、均質、密、壁際にローム粒少混
- 6 黒褐色砂質土 弾力のある細粒土、As-C少混、ローム漸移層斑混
- 7 6層で埋没するピットの掘り方



第40図 福岡竹ノ内5号古墳平面・断面図

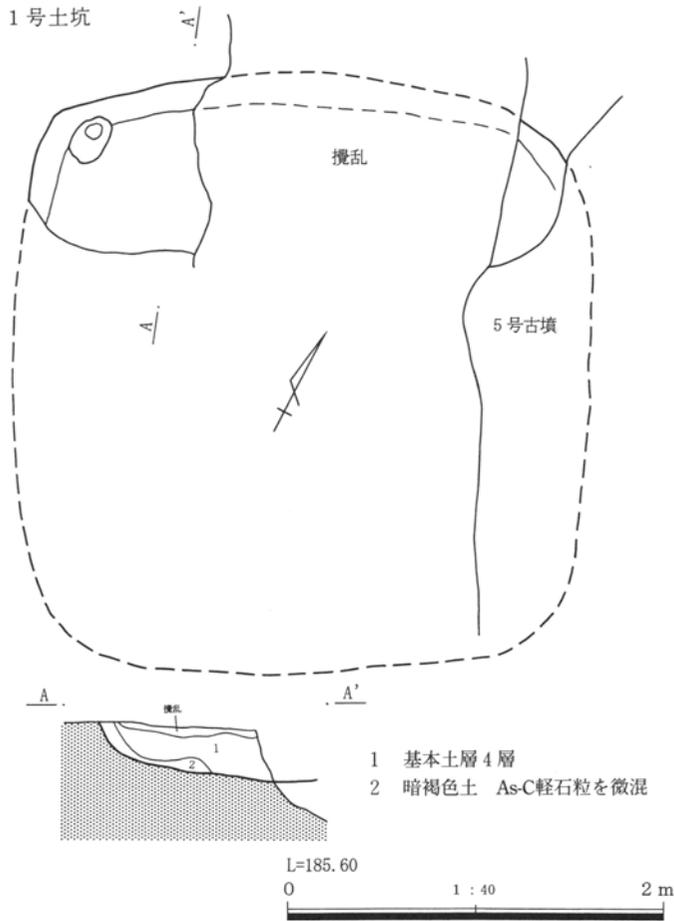


第41図 富岡竹ノ内5号古墳石室平面・断面・掘り方平面図

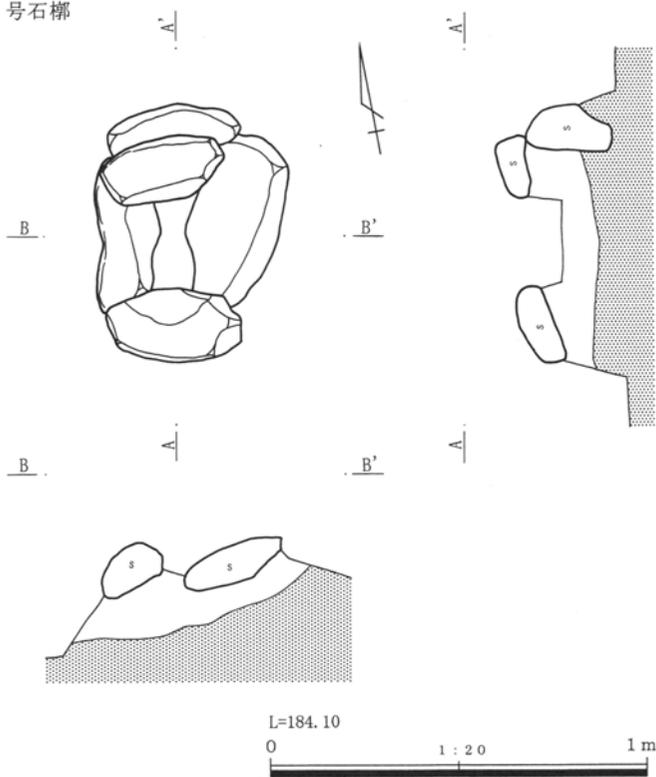


第42図 富岡竹ノ内5号古墳出土遺物分布・出土遺物図

1号土坑



1号石槨



第43図 1号土坑平面・断面、1号石槨平面・断面図

5 1号土坑 (第43図 P.L.17)

位置 1M-15 5号古墳の周堀との重複、その後の宅地造成で削平を受け、残っているのは北側の一部である。

形状 推定方形

規模 東西2.95m、南北0.56m以上、3号住居ほどの規模か。

所見 推定する形状や規模、そして覆土の類似から3号住居と同じような住居の可能性をもつ。ただし、柱穴や炉はなく、竪穴状遺構とすべきであろう。決め手は欠くが、時期は古墳時代前期である。

6 1号石槨 (第43図 P.L.13)

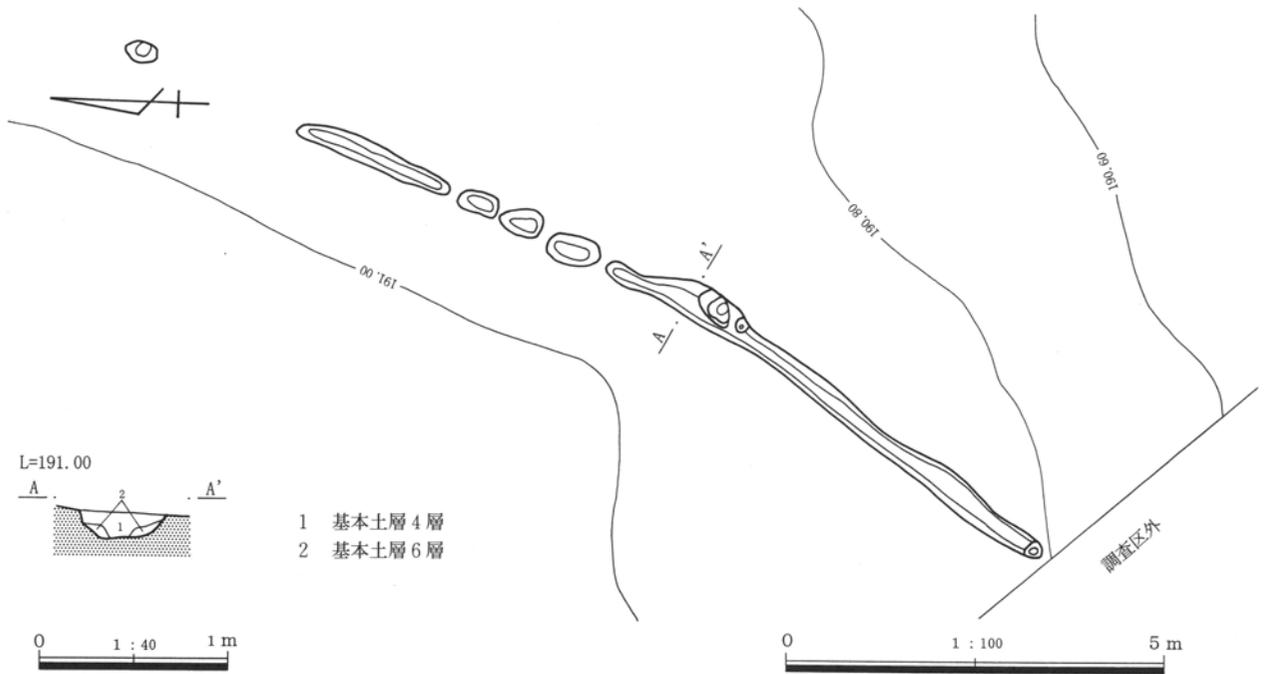
位置 1N-13 5号古墳の埋没した西側周堀内に作られている。

規模 推定長軸70cm、短軸40cm

主軸 N11° E

構造 長さ33~46cmの偏平な4枚の板石を、上下左右、対にして箱形に組んでいる。裏込め等は一切なく、素掘りの穴に石を直接すえただけの簡単な構造である。蓋と思われる石が北の小口に架かっている。出土した遺物はなく、覆土にも埋葬の跡を示す特異な様子は見られなかったが、構造上の特徴からこの名をつけた。

時期 特定できる遺物はない。5号古墳と同じ7世紀代から、周辺で遺物が出土している8世紀代まで考慮する必要がある。



第44図 1号溝平面・断面図

7 溝

1号溝 (第44図 P L. 7)

位置 3C・D—15・16 台地の頂上部、1号古墳石室の北西付近にある。現代の畑のサクとは、全く異なる北東—南西方向にのび、途切れがちではあるが長さ12mを検出した。上面は削平されていた。底面の近くが残るだけで、深さは10cmを越す程度である。幅は20cm強である。

遺物 土師器の細片が出たほか、陶磁器の椀がある。いずれも細片のため、掲載することはできなかった。

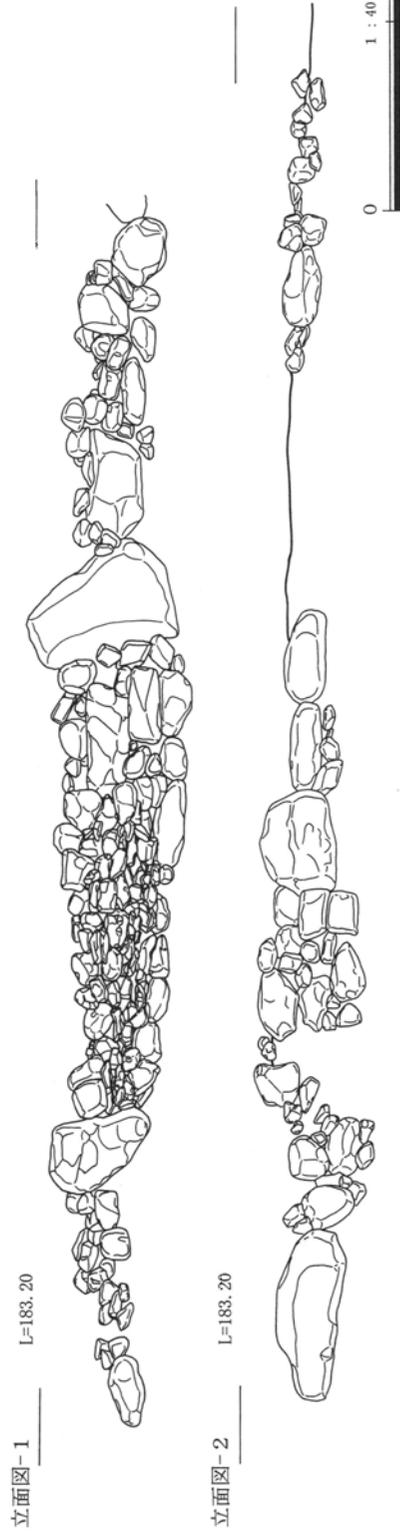
所見 底面は、水が流れて緩く波を打っているが、流すというよりは畑を区画するものである。覆土の様子から、古くても江戸時代天明年間の頃を上限とする。

2号溝 (第45～47図 P L. 7・23)

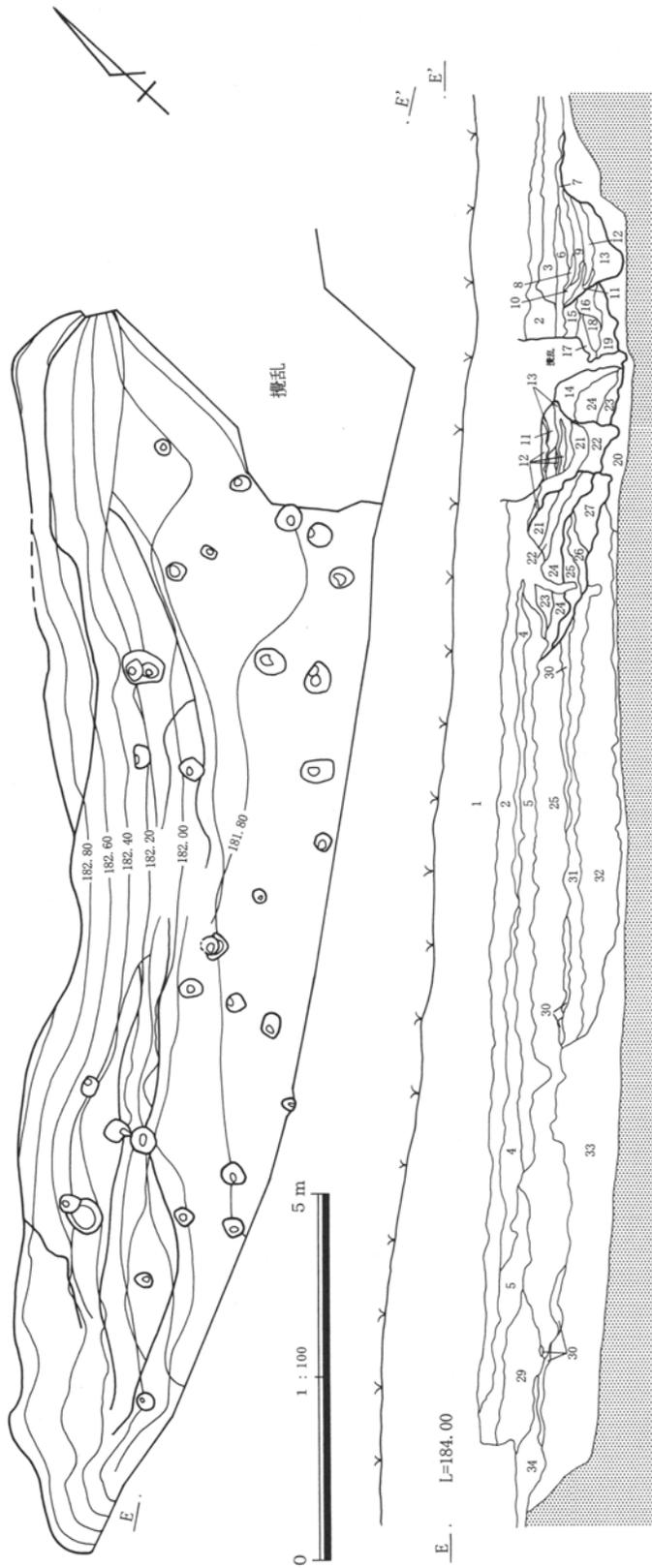
位置 1K～N—12～14 全貌は明らかではないが、5号古墳の南を東西に横切り、東は4号古墳の前庭で南に折れ曲がっている。さらに東に続くようでもあるが、現状の調査範囲では可能性にとどまる。また、南の立ち上がりは、すべて調査区外である。検出した長さは20m、最大幅4mである。浅間A軽石をはさんで連続する、新旧2つの時期がある。

新期は、天明三年(1783)浅間山の噴火後に改築されたものを指す。深さは、断面をみると古期の半分ほどで、北側に1mほど広げて作った削平段に石垣を新設している。ただし、石垣が法面を養生するためのものか、そうではなくて屋敷の裏手を囲うというような造作なのかは、判断がつかない。

石は、5号古墳から切り崩したもので、東側では4号古墳から同様なことをしている。石の積み方の特徴は3点ある。まず、石室の壁石を等間隔にすえて、その間を割石と真石で積み上げていること。次いで、垂直であること。最後が素掘りの壁に裏込めを持たずに直接積み上げていることである。崩落するよりも早く埋没してしまったらしいが、崩落の形跡もなく、実にしっかりとしている。それに対して、4号古墳前の石

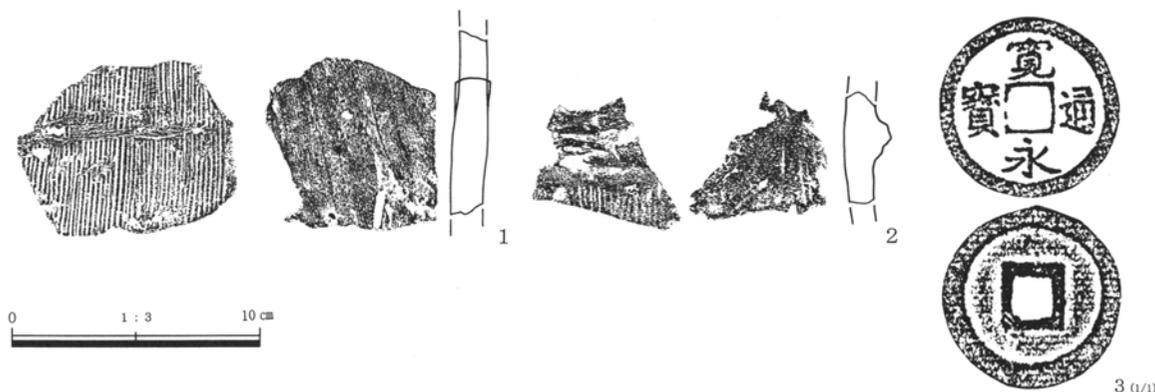


第45图 2号沟平面·断面·立面图



1	表土	暗褐色土	壤土、明黄褐色軽石を少混、褐色軽石を少混	18	黒褐色土	砂壤土、褐色軽石を多混、黄褐色砂質土粒子を微混
2	暗褐色土	砂壤土、明黄褐色軽石を少混、白色軽石を少混、黄褐色砂質土粒子を微混	19	砂壤土、As-Cを僅かに含む、褐色軽石を少混、黄褐色砂質土粒子を微混		
3	砂壤土、明黄褐色軽石を少混、褐色、白色、黄褐色砂質土粒子を微混、粘質土を微混	20	基本土層4層			
4	壤土、明黄褐色、褐色軽石を僅かに含む、褐色、粘質土を微混	21	砂壤土、褐色軽石をやや多混			
5	黒褐色土	砂壤土、明黄褐色軽石を少混、褐色、粘質土を微混、黄褐色砂質土粒子を微混	22	砂壤土、褐色軽石を少混、黄褐色砂質土粒子を微混		
6	暗褐色土	砂壤土、明黄褐色軽石を多混、褐色軽石を少混、粘質土を微混	23	壤質砂土、褐色軽石を少混、黄褐色砂質土粒子を微混		
7	砂壤土、6層より明黄褐色軽石を多混、6層より褐色軽石少ない	24	壤質砂土、褐色軽石を少混、白色軽石を微混、黄褐色砂質土粒子を微混			
8	砂壤土、6層より明黄褐色軽石を少混、6層より褐色軽石多い	25	壤質砂土、白色軽石を少混、褐色軽石をやや多混			
9	砂壤土、明黄褐色軽石多混、褐色軽石多混、前者と後者が混在している	26	砂土、褐色軽石を僅かに含む、白色軽石を微混、粘質土ブロックを少混			
10	砂壤土、明黄褐色軽石僅かに含む、褐色軽石多混	27	砂土、褐色軽石を少混、32層より粘性あり			
11	砂壤土、明黄褐色軽石少混	28	壤質砂土、As-C軽石僅かに含む、褐色軽石を少混			
12	褐色土	砂壤土、明黄褐色軽石多混	29	砂質壤土、明黄褐色軽石を僅かに含む、褐色軽石を少混		
13	鈍い黄褐色土	シルト質道土、明黄褐色軽石少混、粘性あり	30	壤質砂土、As-Aを少混、白色、褐色軽石斑混、粒径は最大7mm		
14	黒褐色土	壤質砂土、明黄褐色、褐色軽石少混、白色軽石僅か、黄褐色砂質土粒微混、粘質土斑混	31	壤質砂土、褐色軽石を32層より多混、白色軽石を微混		
15	暗褐色土	砂壤土、褐色軽石を少混、黄褐色砂質土粒子を微混、粘質土を微混	32	砂土、褐色軽石を含む		
16	暗褐色土	砂質砂土、褐色軽石を僅かに含む、黄褐色砂質土粒子を微混	33	壤質砂土、褐色軽石を含む、粘性あり		
17	黒褐色土	壤質砂土、大粒の褐色軽石を僅かに含む、黄褐色砂質土粒子を微混	34	砂質壤土、褐色軽石を少混、明黄褐色軽石を僅かに含む		

第46図 2号溝平面・断面図



第47図 2号溝出土遺物図

垣は若干様相が異なる。

その石垣とは、4号古墳石室の前庭のくぼみを利用したためなのか、階段的に斜めに付設されている。埋没に伴い崩落や改修の跡もある。この改修の理由は、断面図だけに残る2本の側溝の維持である。側溝は、上端部の幅が1m強、葉研状の掘り方で都合4時期にわたって埋没している。台地上から流入する土砂を掻き出しては改修したのであろうが、最終的には放棄されている。ノロや細砂が互層でしかも複数見られるように、側溝としては十分機能していたことがわかる。

古期は、新期が北へふくらんでいることからわかるように、少し南に中心があるらしい。石垣の有無は不明で、現状では素掘りとみるのが妥当である。同質の土で漸次埋没していることから、比較的短期間のうちに改修されたのではないだろうか。水の流れた形跡が乏しい上に、底に多数のピットがあげられている。大小31本、概して直立する円筒形か角形で柱穴の可能性が高い。橋脚も検討してみたが、一定の幅で対にはならず、断定するには至らなかった。

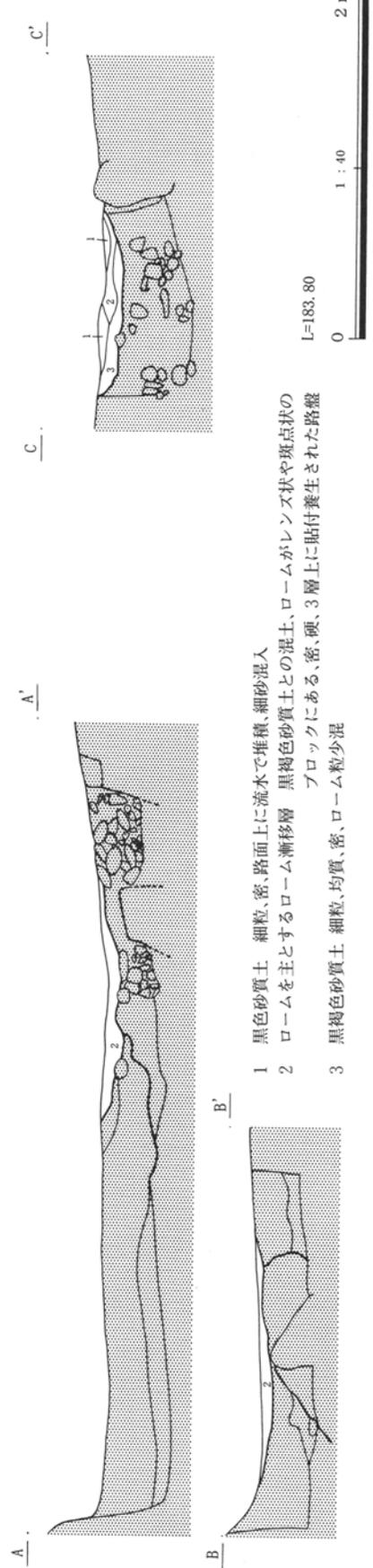
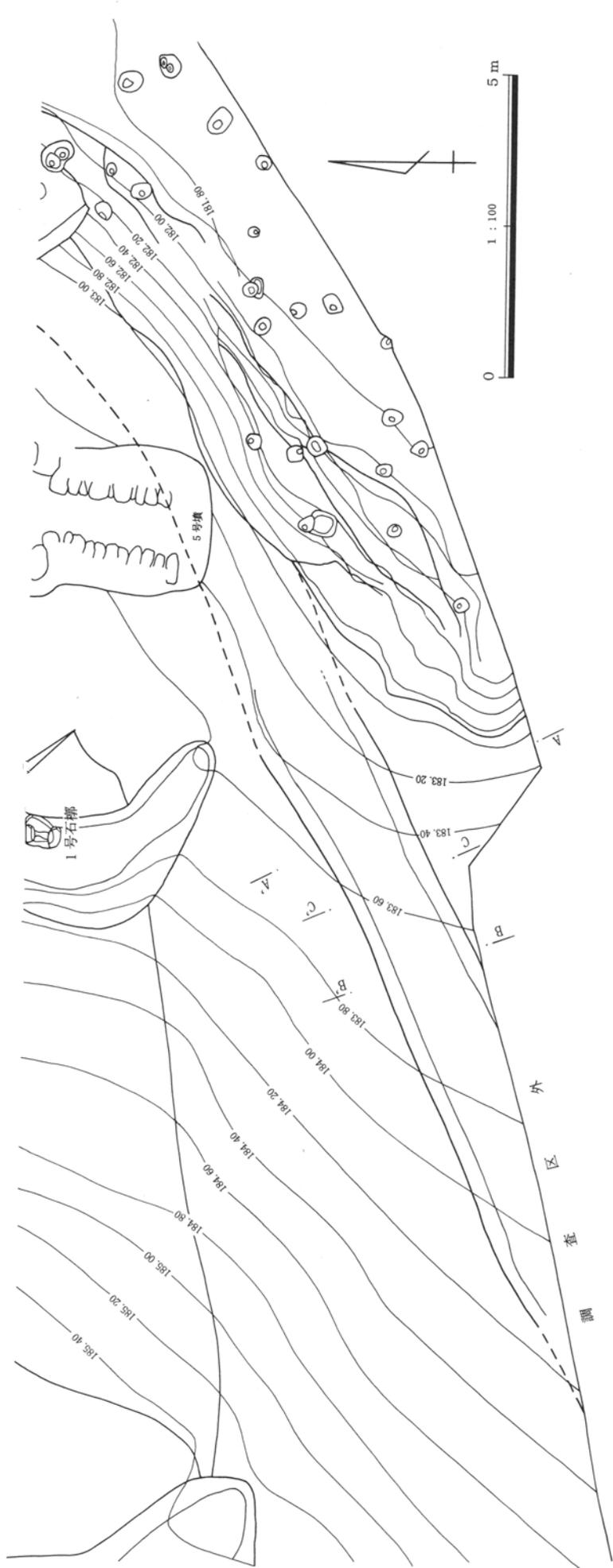
所見 以上の内容からすると、溝として機能したのは新期の方で、前身の古期は別の用途を考えた方がよい。その一例として、箕郷町誌で紹介されている猪土手に伴う堀切をあてておきたい。本調査区の2つ南の台地には、猪土手と呼ばれるものが現存しており、集落との位置関係を考慮すると、ここでの可能性は高い。

8 1号道 (第48図 P.L.5)

位置 1N~P-12・13 3号古墳の南で、一段下がった斜面から5号古墳石室の羨門まで、長さ12mを検出した。幅員が1.10~1.60mの直線路で、浅い掘りこみの上にロームや黒褐色土を貼って路面としている。さらに西に続き、東も2号溝新期に併走するか重複して現道まで達しているらしい。南へは、2号溝の断面にある2本の側溝にはさまれた範囲が相当し、これも現道に続く。

時期 2号溝新期よりも新しいが、時差は少ない。2号溝新期の石垣も、この道の路肩養生策か。その意味では、路面の普請を考慮しておく必要がある。

所見 県道として利用されている道の前身である。天明三年、浅間山噴火後の復旧策、普請された溝や道のひとつである。路盤の作り方に特徴があって、沈下対策に古墳の石を敷き込んでいる。大きなものでは、断面AやCにあるような石室の壁か天井のものまでがある。ちなみに5号古墳の削平は、この道の普請で大々的に行われている。個人が長い時間をかけてというのではなく、短時間の組織的な仕事である。



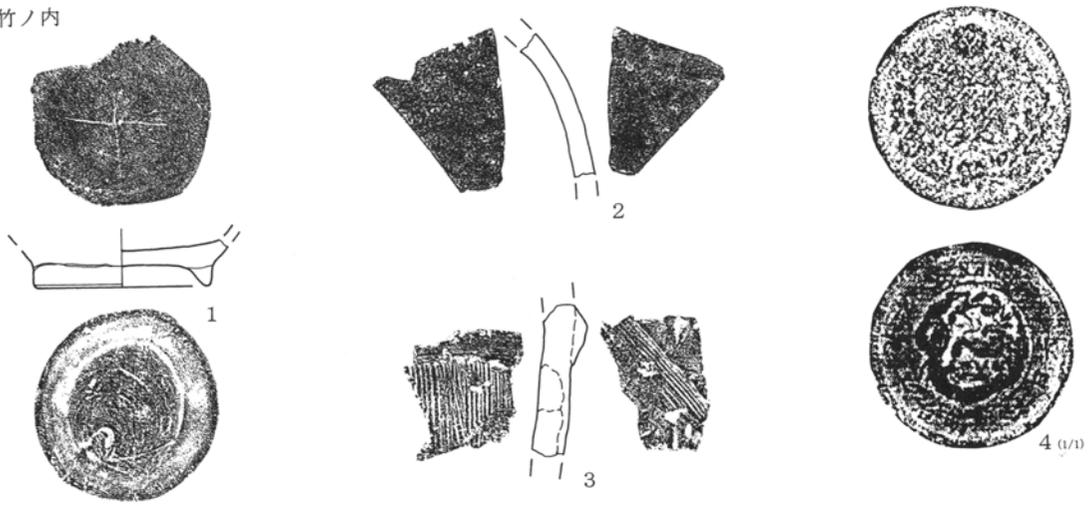
- 1 黒色砂質土 細粒、密、路面上に流水で堆積、細砂混入
- 2 ロームを主とするローム漸移層 黒褐色砂質土との混土、ロームがレンズ状や斑点状のブロックにある、密、硬、3層上に貼付養生された路盤
- 3 黒褐色砂質土 細粒、均質、密、ローム粒少混

L=183.80

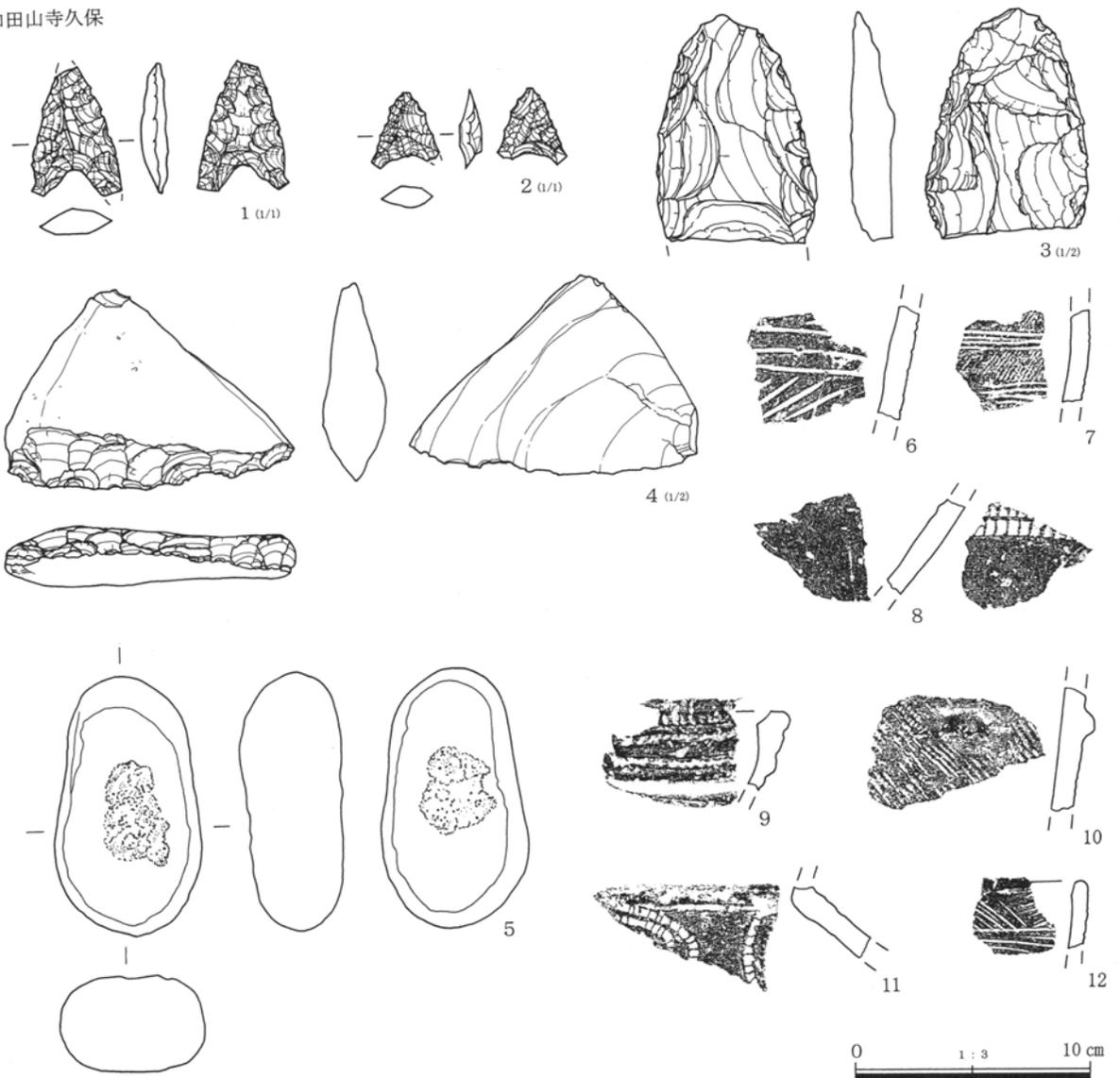


第48図 1号道平面・断面図

富岡竹ノ内



和田山寺久保



第49図 遺構外出土遺物図

第6章 和田山寺久保遺跡の調査

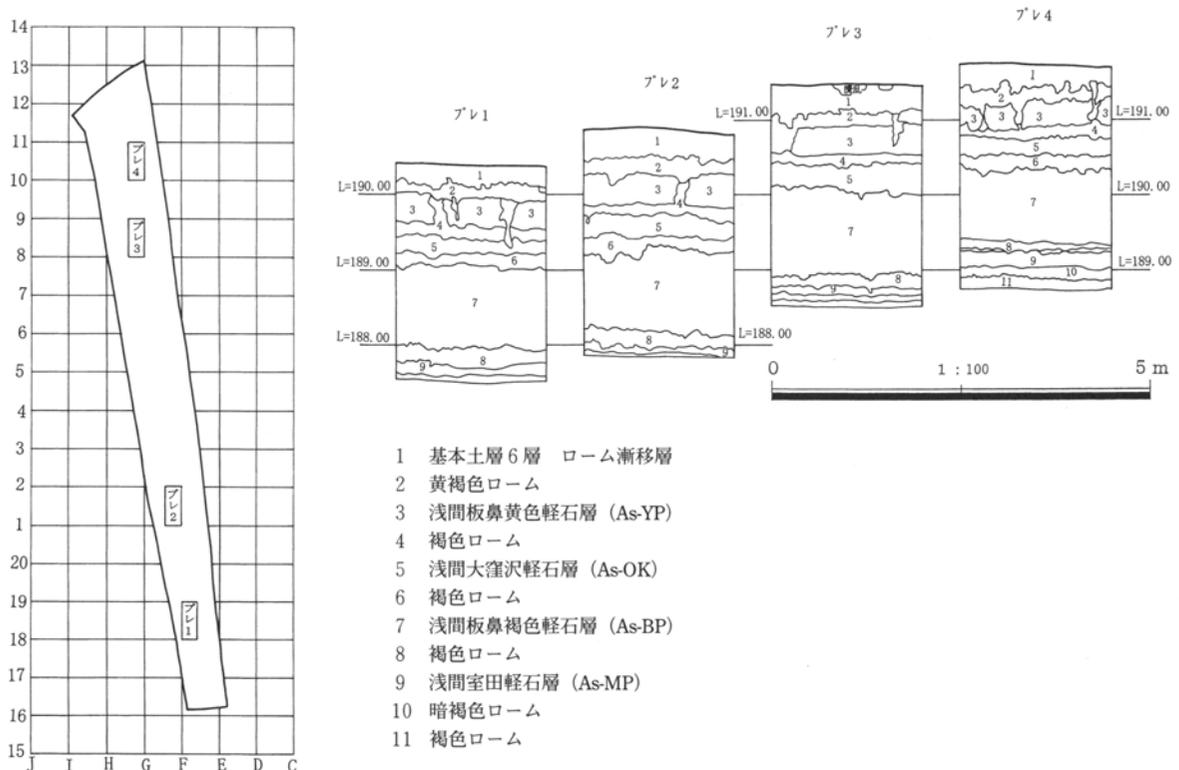
1 概要

県道とともに改良工事される町道用地が、調査の対象である。富岡竹ノ内遺跡から見て、県道をはさんで南西にある。調査範囲を含む一帯は、本来町道を頂点とする馬の背状であったものが、長年にわたる切土と盛土の繰り返しで現在に至っている。調査区も基本土層4層の上部付近まで削平され、耕作土が直接のるような状態であった。調査した面積は680㎡、梅を主にした畑地の中にある。

調査は、重機による表土を除去した掘削面を遺構確認して1面とよび、そこから縄文遺構の確認を目的にしたトレンチ調査、そのトレンチを利用した旧石器試掘をへて、作業を終えた。検出した遺構は、円墳2基、道2条、土器埋納土坑1基、土坑5基である。

町道の東側にも、2箇所の調査対象用地があったが、北は宅地に接して2mを越す段差があり調査自身が危険なためと、あまりに少面積であることから断念した。それに対して残る南には、トレンチを設定してほぼ全域を調査し、2号道を検出している。

古墳がぼつんとあるだけにも見えるが、固く踏みしめられた道や土器を納めたまつりの跡に、往来していた人の気配が感じられる。墓域の中央を南北に貫いたようで、富岡竹ノ内遺跡の古墳とは、またひと味違った雰囲気である。



第50図 和田山寺久保旧石器試掘トレンチ配置・土層柱状図

2 旧石器確認調査

調査区は、台地の頂上部にあり、厚くロームの堆積していることが周囲にある崖面の様子から判明していた。旧石器のあることも予想されたことから、5m×2mのトレンチを4箇所を設定して試掘を行った。台地を縦断するように、南から1トレンチが2E18グリッド、2トレンチが3F1グリッド、3トレンチが3G8グリッド、4トレンチが3G10グリッドである(第50図)。結果、暗色帯の上部までの間、出土した遺物はなかった。

成果のひとつは、県道の付近に鞍部のあることが判明した。県道そのものが、これを通過している。標高差にして2m足らずではあるが、地形の上で富岡竹ノ内遺跡と分ける目安になり、古墳群を台地ごとに細かく分ける際にも利用できる特徴である。2つめは、十文字面の形成過程を知る資料が得られたことである。ロームの堆積は安定しており、基盤の近くは八崎軽石層に相当する。また、板鼻黄色軽石層の最上層には、厚さ5cmの硬化したアッシュが一面に堆積していた。

近くの白川傘松遺跡、和田山天神前遺跡では、暗色帯で黒曜石や黒色安山岩の石器が出土している。ここでは、台地の頂上部で眺望には優れるものの、生活する場としては台地の幅が狭いため、選択の余地がなく敬遠されたためであろう。

3 縄文トレンチ調査

縄文時代の遺物が、古墳の周堀やその他から出土した。中期阿玉台式が多く、次に早期や前期のものが出土している。石器では、短冊形打製石斧、石鏃、スクレイパー、凹石がある。このため1面終了後、遺物を包含する可能性が高いローム漸移層を対象にトレンチ調査を行った。トレンチは、幅1m、南北方向に3本を設定した。1トレンチは2E18~19グリッド、2トレンチは3F1~3グリッド、3トレンチは3G8~11グリッドである。このうち1トレンチ、2トレンチは、拡張、精査をした。

1号~5号土坑のうち、3号は1トレンチ、4号と5号は2トレンチの調査で検出した。いずれも掘り方の特徴から、自然にできたしみ状の土坑である可能性の方が高い(第51図)。

1号土坑 2E16グリッドで検出した。長軸90cm、短軸78cm、深さ25cmの楕円形。出土遺物はない。

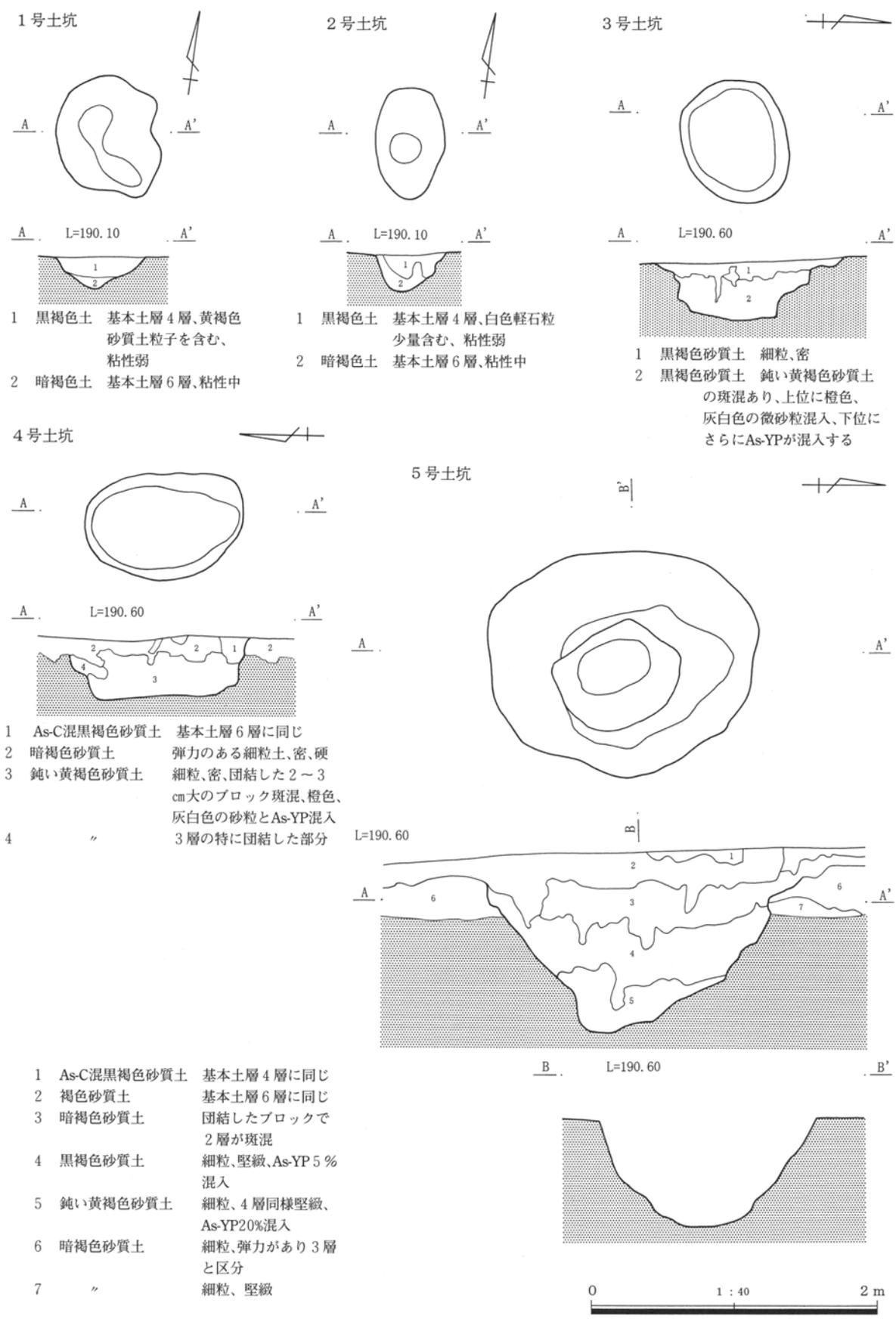
2号土坑 3F2グリッドで検出した。長軸77cm、短軸49cm、深さ25cmの楕円形。出土遺物はない。

3号土坑 1トレンチ、2E19グリッドで検出した。長軸92cm、短軸73cm、深さ40cmの楕円形。板鼻黄色軽石層の最上層まで掘り込む。黒褐色砂質土で埋没、出土遺物はない。

4号土坑 2トレンチ、2E19グリッドで検出した。長軸110cm、短軸76cm、深さ40cmの楕円形。板鼻黄色軽石層の最上層まで掘りこむ。にぶい黄褐色砂質土で埋没、出土遺物はない。

5号土坑 2トレンチ、3F2グリッドで検出した。長軸190cm、短軸155cm、深さ125cmの楕円形。断面ロート状、覆土は堅く締まり、唯一落とし穴の可能性を持つ。出土遺物はない。

以上のほかに、調査区全体から若干量の遺物が出土した。中でも注目は、珪質変質岩製の石鏃である。珪質変質岩は、六合村から長野原町を流れる吾妻川支流、白砂川の流域で採取できることが知られている。この時代は、旧石器時代以来の伝統的石材である長野県産黒曜石やチャートを中心に言及されることが多い。こういった中、いくなれば地場の石材が、どのように流通したかを知ることができる一例である。石材の鑑定には、当事業団渡辺弘幸氏の協力をえた。



1 黒褐色土 基本土層 4 層、黄褐色砂質土粒子を含む、粘性弱
2 暗褐色土 基本土層 6 層、粘性中

1 黒褐色土 基本土層 4 層、白色軽石粒少量含む、粘性弱
2 暗褐色土 基本土層 6 層、粘性中

1 黒褐色砂質土 細粒、密
2 黒褐色砂質土 鈍い黄褐色砂質土の斑混あり、上位に橙色、灰白色の微砂粒混入、下位にさらにAs-YPが混入する

1 As-C混黒褐色砂質土 基本土層 6 層に同じ
2 暗褐色砂質土 弾力のある細粒土、密、硬
3 鈍い黄褐色砂質土 細粒、密、団結した 2~3 cm 大のブロック斑混、橙色、灰白色の砂粒とAs-YP混入
4 " 3 層の特に団結した部分

1 As-C混黒褐色砂質土 基本土層 4 層に同じ
2 褐色砂質土 基本土層 6 層に同じ
3 暗褐色砂質土 団結したブロックで 2 層が斑混
4 黒褐色砂質土 細粒、堅緻、As-YP 5% 混入
5 鈍い黄褐色砂質土 細粒、4 層同様堅緻、As-YP 20% 混入
6 暗褐色砂質土 細粒、弾力があり 3 層と区分
7 " 細粒、堅緻

第51図 和田山寺久保 1号～5号土坑平面・断面図

4 古墳

1号古墳（第52図 P L.16）

位置 3F・G—2～5 調査区のほぼ中央、台地頂上部の平坦面の中でも、南西への傾斜が始まるあたりに選地している。北は今回報告する2号古墳、南には上毛古墳綜覧車郷村第50号墳や第51号墳がある。町道をはさんだ東には、上毛古墳綜覧車郷村第47号～49号墳がある。頂上部で輪をつくる一群の中で、中央に当たるような位置にある。

この中で石室が露出しているなど古墳とわかるのは、第49号桜塚古墳と第51号墳の2基だけである。そのほかは耕作の障害となるため、石は抜かれて見事なまでに削平されている。畑の境界に残る石垣が、所在を知る唯一の手がかりに等しい。本墳もこれらのうちのひとつで、古墳らしい形跡はなく、試掘で改めて所在が明らかとなる。

形状 墳丘の東縁と周堀を検出した。円墳と思われ、葺石がある整った形状である。推定される直径は21～22mと、やや大型である。

墳丘と外部施設 基壇以下を残していた。浅間B軽石層が、周堀を横断して基壇の天端にかかる状態で堆積していた。この状態をみると整地面は標高191.20m付近で、基壇のテラス面にほぼ相当している。墳丘の東西では、1m弱の高低差がある。この差を解消するため、石室の東側では地山を削平して1段目としているのに対して、低い西側は盛土で高さを調整していると推定される。

最大の特徴が、周堀の内側の法面に直接施された葺石である。本来ならば法面は素掘りのままで、平坦面を設けて基壇と分ける箇所である。ここに石を葺くというのは、東西の高低差解消のためにやむを得ぬ措置として採用されたものか、それともただ単に墳丘を2段にしたいという思いなのか、あまり例を見ない。墳丘の規模から見て、後者が有力である。あえて、斜面にかけて選地する理由もこの点にある。

推定するに、墳丘の西側では傾斜する分を基壇とし、その上に葺石を持つ2段の墳丘がのるのではないだろうか。東は周堀の法面に葺石を施して2段構造とし、西は地形が傾斜する分、周堀の法面がむき出しにされたままとなり、都合3段の構造である。

葺石 検出したのは、墳丘の1段目に相当する、全体の3分の1弱である。全周すると考えられる。先述のとおり、基壇に直接石を積み上げたもので、高さは50cm、傾斜角34度である。その特徴は

- 1 地山を削りだしたところに裏込めをしないで、積み上げている。断ち割りをしたところ、石は一切使わず土を詰め込んでいる。
- 2 石は、9割強が角閃石安山岩、残りは粗粒安山岩である。大きさは、30～40cm前後のものが多く、転石をそのまま使うか一部になじみをつける程度の打ち欠きをして使っている。明らかに面取りをしているのは2点だけである。
- 3 積み方は、周堀の底面に大振りなものをすえて根石列とし、平らな面を表にした横置き、平積みである。しかし、根石列とした以外は、大きさも不揃いで段も整っていない。小間割をした形跡もあるが、間隔としては一定していない。
- 4 浅間B軽石が、石の上面を覆うように堆積していた。

以上のことから、検出した石積みは基壇を被覆する葺石で、天端がそのまま基壇のテラス面に相当すると考えられる。



第52図 和田山寺久保1号古墳平面・断面図

周堀 幅が2m前後と一定し、断面も逆方台形で整っている。墳丘に沿って全周すると考えられる。掘削の基準は、調査区外にある前庭であろう。全体は、地形のとおり南から北への上り勾配で掘られているが、小間割をして掘っているのか、一律の勾配ではなく3～4mほどの範囲で床が波打っている。一部に搬入路のような溝になっている箇所もある。中でも、北東にあたる一画だけがわずかに幅を広げ一段深い。石室の正面に立った時、古墳に奥行きを出し、高さをより印象付ける視覚効果が生まれたのであろう。また、外側の肩口には、浅間C軽石を混入した黒褐色砂質土で埋まる不整形な落ち込みが5～6箇所あった。うち2箇所を調査したが木の根らしく、はっきりとした掘り方ではなかった。

主体部の構造 調査区の外側、西5m付近に角閃石安山岩が散乱している。人頭大から拳大のものまで数は多く、主体部としても妥当な位置である。梅の木を残してまで、あえて目立つようにしてあるのを見ると、根石程度が残されているのではないだろうか。地権者の箕郷町富岡坂口修二氏からも、同様な指摘を得た。

出土遺物 周堀から縄文土器や石器が出土している。埴輪はない。

所見 大字和田山字寺久保544番地の1に所在、上毛古墳綜覧車郷村第45号墳に該当推定規模が直径20mをこし、古墳群の中では大型の円墳である。角閃石安山岩を葺石に使い、しかも周堀の法面に直接葺くという特徴がある。時期は、葺石の特徴から7世紀の初めか前半である。

2号古墳（第53図 P L.17）

位置 3G・H—7～11 調査区の北端に近い、台地頂上部の平坦面から西への斜面にかけて選地する。県道を北限とした、1号古墳や桜塚古墳を中心にしてまとまる一群の中でも北端の古墳にあたる。既に平坦になるまで削平されて古墳らしい形跡はなく、試掘で存在が明らかとなる。

形状 円墳と考えられ、東側をめぐる途切れた周堀の一部を検出した。

墳丘と外部施設 墳丘は調査区外にあり、すべて削平されている。規模は不明である。整地面は、浅間B軽石の堆積状態からみて、検出面の標高191.60mよりやや高い程度、墳丘の大半は盛土によると考えられる。

周堀 検出した範囲の中央が陸橋様に途切れている。途切れた部分の幅は、3.40mである。東にある1号道と関係するのか、それとも帆立貝式のような陸橋そのものと理解するのか、墳丘の検出がないので決定することができなかった。

扁平なという印象を受ける掘り方で、幅は北が最大7m、深さは65cmである。北側の方がわずかな差で深い。覆土は自然埋没しており底面から40cmほど上に浅間B軽石が堆積している。覆土中に、1点だけ人頭大の角閃石安山岩の転石が含まれていた。1号古墳同様、主体部か葺石に使われていたものが崩落したとも考えられる。

主体部の構造 完全に削平されている。畑の表面に石は散乱していないが、5mほど離れた県道に面した畑の境界には長さ60cm大の粗粒輝石安山岩が数点並べられている。石室から抜き取られた石らしく、人頭大の角閃石安山岩の転石も混じっていた。主体部は粗粒輝石安山岩、葺石は角閃石安山岩という可能性もある。

出土遺物 覆土中への混入遺物もなく、埴輪もない。

所見 大字和田山字寺久保544番地の1に所在、上毛古墳綜覧車郷村第45号の可能性もあるが、目立つ主体部や全体の状態からみて綜覧漏れの可能性の方が高い。時期を特定する出土遺物はないが、選地、想定される墳丘構築の様子、僅少ではあるが角閃石安山岩の存在から7世紀前半、周堀の掘り方にやや乱雑さを認めて1号古墳よりは新しいものと考えられる。



第53図 和田山寺久保2号古墳平面・断面図

5 道

1号道 (第54図 PL.16・18)

調査区の南端から1号古墳の近くまで、長さ41mあまりを検出した。北は、富岡竹ノ内遺跡の古墳に通じるか、間にある谷地を東に下るものではないだろうか。緩く蛇行する様子を見せ、中ほどで1号古墳に向かって支道が分岐している。基本土層4層の中位から掘りこまれ、掘削した面をそのまま路面としている。深さは、残りの良い所で最大16cmである。幅は、南端近くで1m前後、中央で60cmと細くなり差がある。断面は、偏平な凹面形をしている(第54図)。

路面は、ミリ単位の厚さでありながら、叩くと金属的な音がするほどの硬さである。目立つような凹凸はないが、改修されたような跡もない。表面は、鉄分で固く締まった薄い砂の互層に覆われていた。流れ込んだ砂がその都度踏み締められてきたという様子で、硬い路面とともに、使われていた時間の長さを感じさせる。覆土は薄いと感ぜられるが、土砂が移動しやすく溜まりにくい頂上部という立地のせいだけではなく、掘りこみ自身が本来浅いのかもしれない。浅間B軽石層の下に、基本土層4層が10cmほどの厚さで二次堆積して路面となる。

構築の時期は、浅間B軽石層下にある古墳の周堀とよく似た埋没状況から古墳と同時期と判断した。ただし、時期を直接示すような遺物は出土していない。用途は、古墳築造時の作業道とその後の墓参を兼ねたと見るのが妥当で、古墳と古墳の間をぬうように台地を縦走する幹線道の趣がある。

一方、分岐した支道は、硬化した状態に乏しい。このちがいは使用頻度の問題で、支道が1号古墳などに特定されるため使用した回数に限りがあったからであろう。支道としての限度を示すもので、もう一方をより幹線道らしく印象付けている。

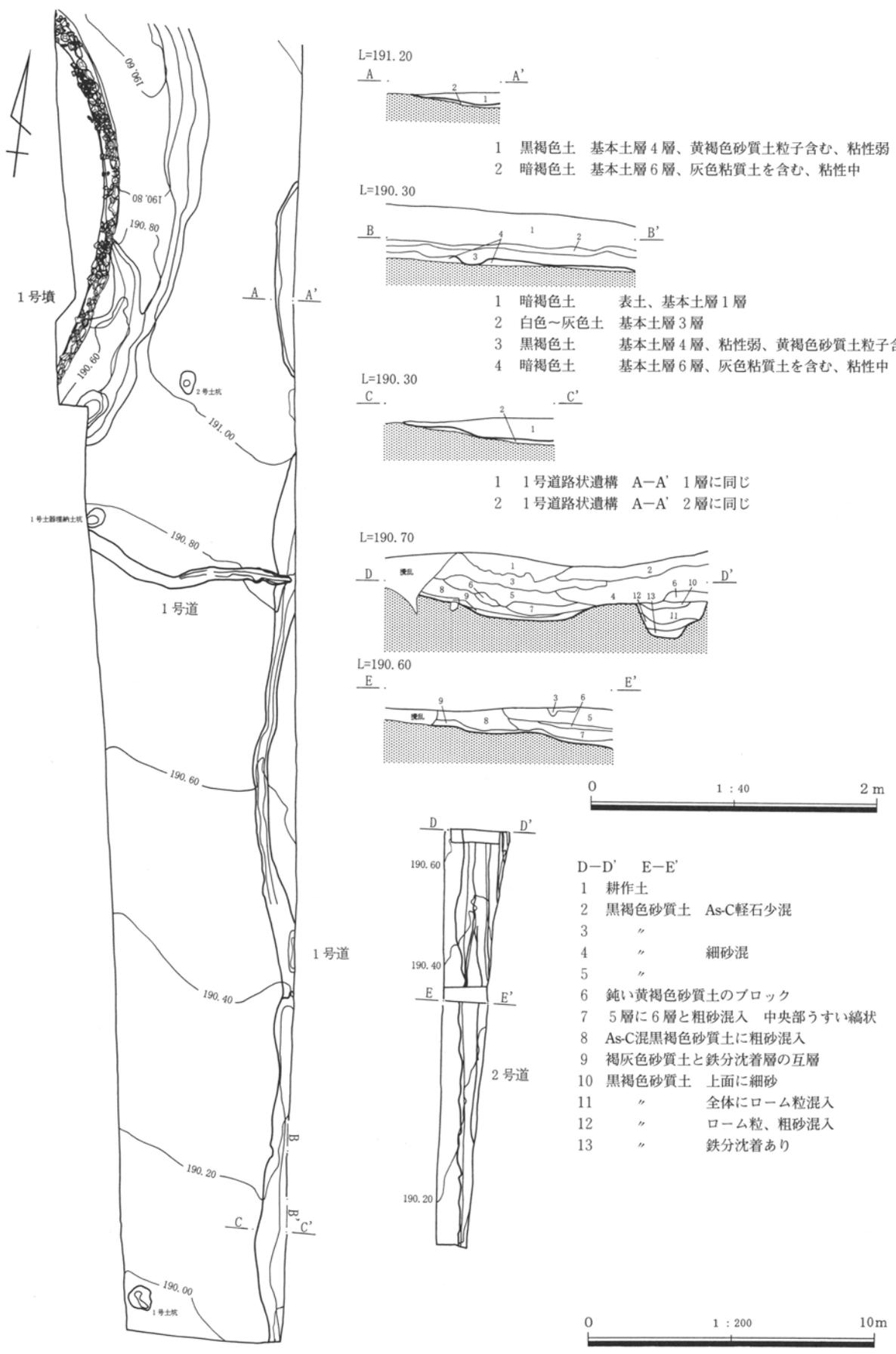
2号道 (第54図 PL.18)

町道をはさんだ東の畑には、石室が露出している桜塚古墳がある。上毛古墳総覧によると、全長二百尺の円型、高さ十尺とある。調査対象地は、その半径内、真偽を確かめる意味もあって調査した。検出されたのが2号道である。調査した範囲内に古墳があった形跡はなく、桜塚古墳の二百尺という規模は疑問である。

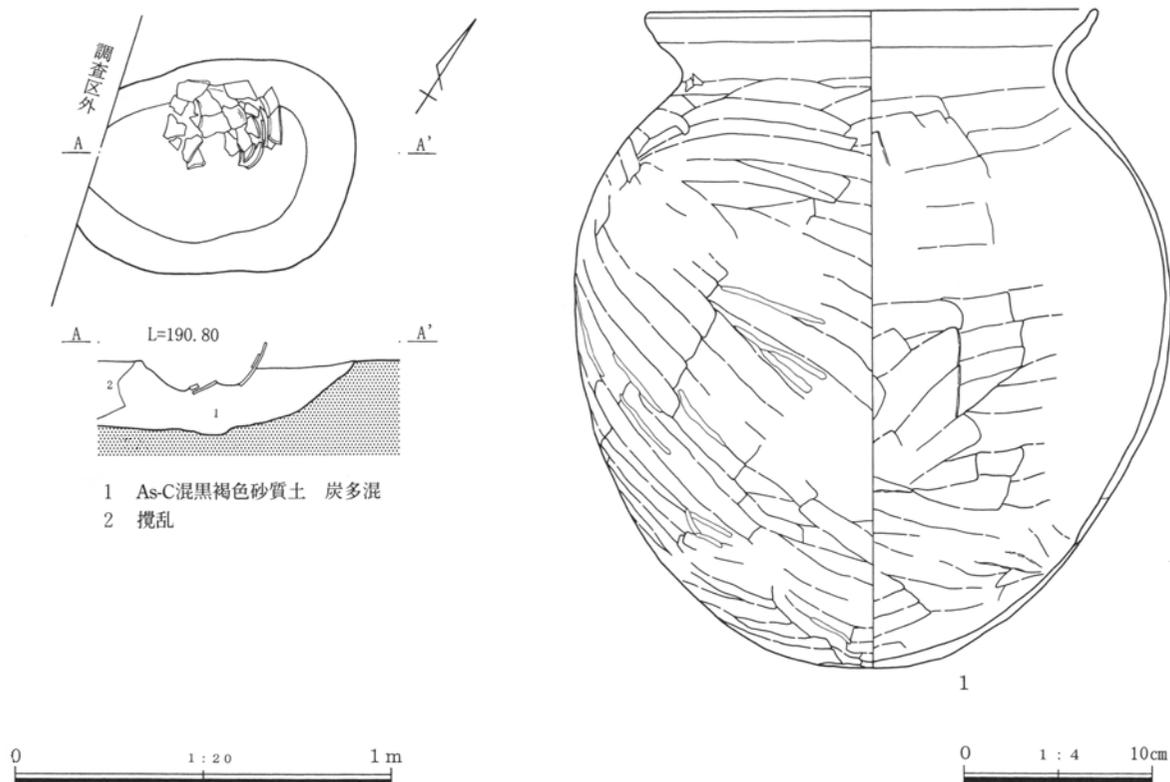
道は、南北14mを検出した(第54図)。同一のものと思われる道が、南10mで箕郷町教育委員会により既に調査されている(同教育委員会 田口一郎氏教示)。

1期に始まり、埋没と修築を繰り返して、ほぼ連続する4期にわたる変遷がある。まず、現状でわかる当初の姿は、路幅が1m前後、東には側溝がつけられている。路面は、ローム漸移層まで掘り下げて断面が凹面状になるように作られている。平滑で堅緻、長期にわたる使用が推定できる。西側が町道で攪乱されたので、両側に側溝が付くかどうかは不明である。

2～4期は、路幅が50cm前後と一定、各々が上下左右わずかに位置をずらさただけで作られている。内容に継続性が読み取れる構築状況である。しかし、1期にくらべると路幅は半減、しかも路面は平坦である。1期との間に、若干の時差が感ぜられる。時期は特定できなかったが、覆土の大半は浅間B軽石を給源とする細砂であること、逆に浅間A軽石を含む表土とは明らかに区別できることの2点から、中世、下っても近世前半の頃かと考えられる。



第54図 和田山寺久保1号・2号道平面・断面図



第55図 1号土器埋納土坑平面・断面・出土遺物図

6 1号土器埋納土坑 (第55図 P L.17)

位置 3 F 1 1号古墳の周堀から東南にわずか2m離れた所で、一部が1号道の支道と重複して検出された。1号古墳の石室近くの墓前か、墓道の脇で行った祭祀の跡である。支道とは同質の土で埋没しており、両者を分けるのはむずかしく併存していたか、土坑の方がやや先行するといった前後関係である。火を焚いた形跡があり、架けた甕も倒れたままになっていた。

規模と特徴 長軸75cm、短軸56cmのほぼ円形、深さ16cmである。深さは倍以上あったと思われるが、重機により土器とともに上面部分は削平されている。壁は一部が焼け、炭が底近くに塊や薄い層となって残っていた。焼け方は、うっすらと赤みを帯びる程度でカマドとは明らかに異質である。火力が弱いのか、何度もという回数ではないのだろう。炭の中には、最大で長さ4cm、厚さ1cmというものもあり単なる薪なのか、それとも箱のようなものが炭化したのか注意を要する状態である。火を焚いたとしても一時的とみたいが、不自然な炭の量の多さである。

遺物 甕は、口縁を北東にして倒れ、割れた状態で出土した。土坑の底からは完全に浮いている。使用痕に乏しいこと、火を受けたためか底部から下胴部にかけて煤が付着している点に特徴がある。

所見 墓前祭祀の跡とみたのは、古墳が密集する中にあること、住居というような生活跡に乏しい中で火を焚くという異色な行為をしていること、至近距離に古墳があり、墓道にも面していることの3点からである。土器の年代観は7世紀前半、1号古墳の年代観とも齟齬はない。

1号古墳の脇には、2号土坑がある。土器こそ出土していないが、掘り方の特徴は本土坑と同じで類例の可能性はある。

第7章 調査の成果と課題

1 はじめに

試掘では、古墳4基、中世の溝1条があるという内容であった。調査区は、和田山古墳群の北の端にあたる。早速、地番を頼りに上毛古墳綜覧（以下綜覧）にあたると、車郷村第44号墳、同第45号墳が該当していた。とはいえ、現地に立つと台地は籬壇のように削られ、てっぺんに奥壁がポツンとしていた。

しかし、遺跡は掘ってみないとわからない。表土を剥ぐと、古墳は6基となり、残りが悪いとはいえ主体部が3基で残っていた。そして斜面の中段では、住居が8軒もあった。古墳があるのは当然とはいえ、古墳時代前期の集落は予想外の成果であった。遺構は、試掘の予想数をはるかに上回り、調査の対象外とした範囲にまで広がる様子である。旧石器はなかったものの、縄文時代や弥生時代については少量の遺物が出土した。近くに遺構のある可能性は高い。

和田山では、これまで古墳群を念頭に置いて、台地の頂上や斜面に関心が向けられてきた。今回の調査成果は、その見方に変更を迫るものである。斜面であっても集落があることを明らかにし、さらに谷地から低地に水田や畠を推定させる点で意義深い。

ここでは、従来の内容を検証することになった古墳と、箕郷地域では初めてとなった古墳時代前期の集落の2つについて分析し、まとめたい。

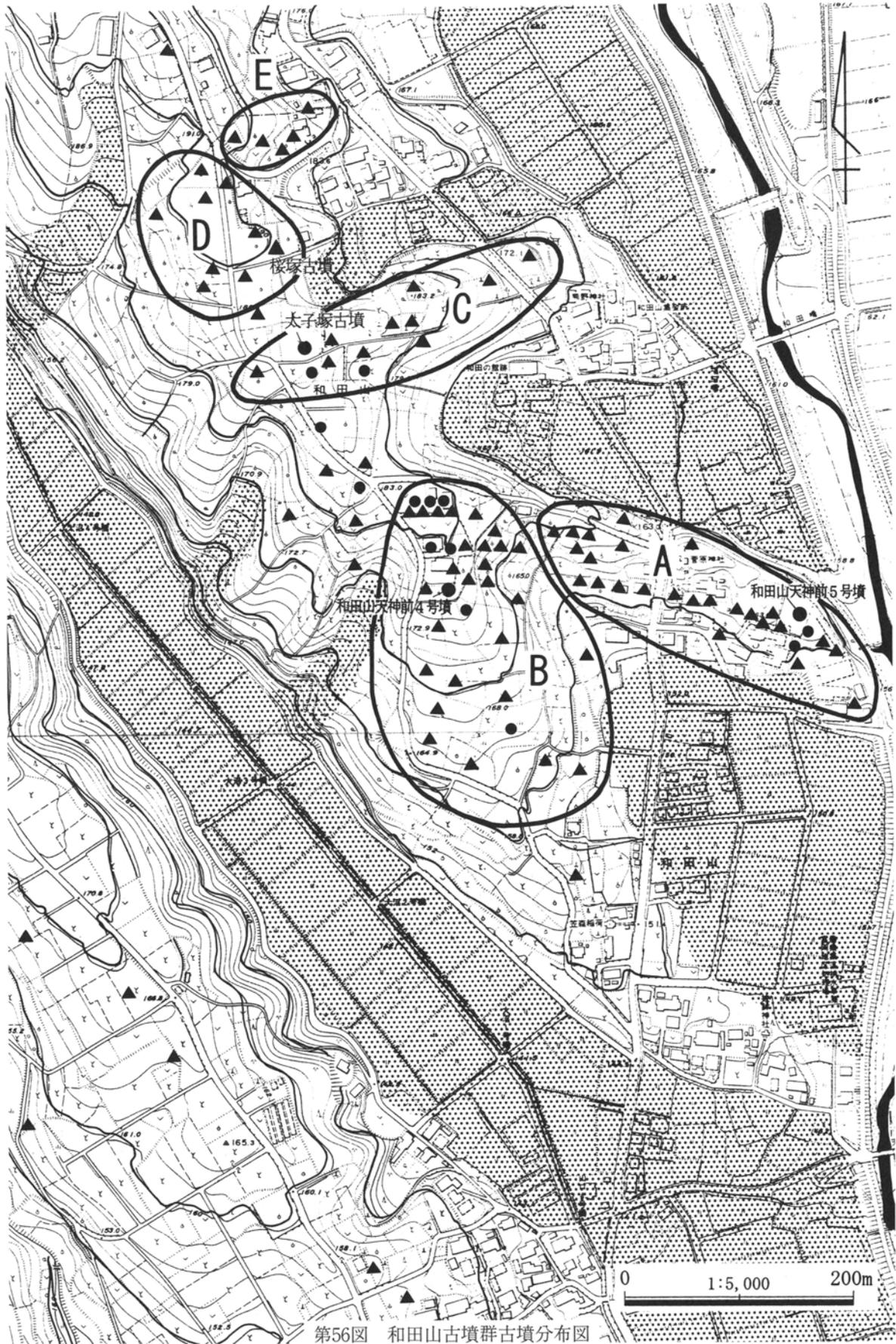
2 古墳について

箕郷町和田山には、綜覧によると87基の古墳がある。これまで、北陸新幹線の建設や町道の改良工事に伴い40基あまりが調査されている。

その結果、下記のことが判明した。

- 1 古墳群の形成は5世紀に始まる。台地の頂上部や先端部には、帆立貝形古墳がある。4世紀の方形周溝墓も検出されているが、この間をつなぐ資料は今のところない。しかし、同じ所に選地しているのを見れば、前代を踏襲して始まったのであろう。
- 2 墓域は、樹枝状に開析された台地を利用し、台地ごとに造墓が繰り返されている。
- 3 古墳は、6世紀後半から徐々に数を増し、7世紀代を通じて作られている。
- 4 墳丘の規模は直径10～15m、頂上部のものは平地と差のない構築方法を採用しているが、斜面に作られたものは山寄せ工法を採用している。
- 5 石室は、狭長袖無形—両袖狭長短冊形—両袖短冊形—両袖胴張形と変遷する。両袖胴張形は、羨門や玄門での角閃石安山岩の使用具合によって、さらに細分ができる。

群集墳は、地域中間層の自立を反映したといわれる。和田山では、二ッ岳噴火後の地域再建が付け加わる。これが契機で、拍車をかけたことは間違いない。それまでは眺望の良さにひかれて点在するだけであった古墳が、泥流を避けてここに集められたというところであろう。どれも群集墳らしく、均質な規模と内容を持っている。自立の象徴であり、再建をはたした結果である。ただし、出土遺物に乏しいのがこれまでの実態で、年代の裏付けが課題である。



第56図 和田山古墳群古墳分布図

第56図は、総覧をもとに箕郷町教育委員会、当事業団が調査したものを加えた古墳分布図である。記号の●が埴輪を副葬する古墳、▲が埴輪のない古墳を現している。太子塚古墳や和田山天神前5号墳は、5世紀の帆立貝形古墳である。造墓の基点であろうか。桜塚古墳は副葬品がわかり、和田山天神前4号墳は埴輪の組成がわかる例として示した。それぞれが、A～D群の盟主墳的な存在である。

造墓の単位をA、B、C、D、Eと仮称した。AとBが北陸新幹線の建設で調査した和田山天神前遺跡を含み、CやDが町道の改良工事、Eが今回調査した富岡竹ノ内遺跡である。墓域の拡大していく様子が読み取れる。総覧では87基とあるが漏れも多く、全体では100基を越す数があったのではないだろうか。

今回は、D群の中央部とE群を調査することができた。検出した6基は、いずれも円墳と思われる。総覧には2基が比定され、残りは総覧漏れ古墳である。富岡竹ノ内遺跡は、一つの台地での変遷がわかる好資料であり、和田山寺久保遺跡では古墳だけでなく、墓道や墓前祭祀の跡まで発見された。

選地について

古墳群の北は、南よりも一歩遅れて7世紀前後から形成が始まった。高低差が大きく、東端が崖で切られている。南は、偏平で川にも接している。この立地条件の違いが遅れた原因であろう。しかし、台地の頂上部に始まり斜面への構築順序は、ここでも変わらない。富岡竹ノ内遺跡では、7世紀初めの1号から、以下3号、4号、5号の順である。頂上部は高さを強調するため、斜面は山寄せ工法の普及に適應するためである。ほかには総覧車郷村第43号墳と、さらに斜面の下位で数基の可能性があり、E群は10基近い数で構成されていたとみられる。

3基で周堀が重複していた。同系列という共有意識なのか、それとも単に台地の狭さが理由なのか。ここE群の傾向である。石室は、南の谷地に面して開口する。谷地には墓道があって、枝道で結ばれていたのだろう。道を登りつめると正面に立つという設計で、墳丘の東側が強調され、裏に回る西側が手抜きのように見えるのも、この正面観に理由があるのだろう。

その墓道との関係は、和田山寺久保遺跡で見ることができた。総覧のとおりならば、墓域の中央部は意外にも閑散としていたことになる。ここには桜塚古墳もある。頂上部は、群の有力者にのみ許された空間とも考えてみたが、山寄せ工法を採用したいがために敬遠されたというのが、実態ではないだろうか。

墳丘の構築方法について

台地頂上部では、盛土主体の構築方法が採用されている。前庭の掘り込みが浅いため、基壇までは地山を利用できても、それ以上になると盛土せざるを得ない。そこで省力化への工夫が、主体部は平坦面の地山に作り、周堀を斜面に作るという方法である。富岡竹ノ内遺跡1号古墳が代表例で、和田山寺久保遺跡の2基もそれである。

斜面では、2つの例がある。一方は上記1号古墳と同様に、特定箇所だけを深く掘り下げ周堀に代えるというもの、3号古墳の例である。もう一方は、周堀を全周させる方法である。4号古墳、5号古墳がそれにあたる。どちらも斜面の勾配を活かして、墳丘の半分近くは地山のままである。違いは、石室の床の高さで分かるように墳丘をいかに高く見せようとしたかである。

石室の平面形

両袖短冊形—両袖撥形—両袖胴張形と変遷している。これまで短冊形は埴輪を副葬した古墳に見られ、7世紀前後という年代観の傍証となろう。撥形は新知見で、短冊形との時差に検討を残す。胴張形は、これまでどおり古墳群終末期の様相である。

構築方法や掘り方を比較すると、短冊形は大型石材を使用、裏込めも厚く、被覆も十分である。これに対

して撥形や胴張形は、差異はあるが石材は小型・軽量化し、掘り方も小さい。裏込めは薄くなり、被覆は玄室か特定の箇所だけとなっている。特に胴張形では、1号古墳や3号古墳で見られた掘り方の西側を広く開けるようなことはなく、小型化が一層顕著である。共通するのは、壁石を補強する支え石が実に効果的に使われ、技に巧みなどところを見せている。

3 古墳時代前期の集落

周辺遺跡でふれたように、井野川流域では弥生時代の伝統の上に立つ拠点集落や水田、畠が点在している(第4図参照)。それに対して箕郷地区では、泥流に埋没しているのか、それとも開発の対象から外れていたのか、至近距離にありながら古墳時代前期の集落は未発見であった。しかし、和田山でも古墳群内の2箇所でも方形周溝墓が検出されていた。平地に比べても遜色がなく、1箇所では重複もしている。どこに基盤があるのか課題となっていた。この発見は、答えの一つである。

住居の構造

長方形と方形、2つのタイプがある。ともに4本主柱穴で、中央付近に炉を持ち、隅に寄せて貯蔵穴がある。そして台地側に周溝がめぐらされている。特記されるのは、周堤帯と思われる外周のある削平の跡である。7号住居を典型例とし、相当する範囲では浅間C軽石の純層が削られていた。傾斜地に住居を作る際、周堤帯は不可欠の排水対策と思われるが、盛土の痕跡など具体的な裏付けを欠き、調査方法に課題を残した。

同じように、疑問のままとなったのが5号住居である。台地側の壁が直立せず弧状に立ち上がり、柱穴や炉など主要施設が攪乱で失われていたこともあって、重複する古墳の周堀との区別がつけられずに調査が終わった。

集落の構造

斜面にあることが最大の特徴である。斜面の一角には、中段以上で浅間C軽石が純層のまま残っている。その分布状況からすると、住居を検出した範囲は集落の北端、上段に相当し、それから上は畠地でもなく、植栽のままだったのだろう。そこで浮上するのが、目の前の谷地とそこに続く低地である。今回の調査からは全て対象から除外されたが、当然水田か畠として利用されていた可能性が出てくる。台地の頂上が墓域、斜面の中段以下が居住域、そして足元の谷地、低地が生産域という構成である。

集落内の様子として、等高線との関係が目を引く。長方形、方形どちらのプランでも、等高線とは平行するように選地されている。7号住居のような長方形プランに、その関係がよく現れている。そして、住居同士も平行するか、直交するような位置にある。たとえば、長方形では7号と4号が平行している。方形では、6号と8号が平行し、1号が直交している。

集落は、段と列とを基本に構成され、建て替えをしている7号や重複する4号、5号の例からすると、一定範囲の区画があるのではないだろうか。そして、その中には、生活痕跡に乏しい堅穴状の2号や3号が付随する、主屋と納屋のような建物配置が推定される。

土器について

出土状態で注意されるのが、甕、壺の大型器種をはじめ遺物が少ないこと。次いで遺構間で土器が接合することである。接合は、4号古墳をはさんだ6号と7号のように、傾斜地特有の埋没時の混入とは考えにくい。土器の組成は、壺、台付甕、単口縁と折り返し口縁の甕、高杯、器台、埴がある。壺と甕は、口縁の折り返しと簾状文が特徴である。また、この時期に特徴的なS字状口縁台付甕は、稀な存在である。

富岡竹ノ内遺物観察表

1号住居（第9図）P L. 20

（ ）内は推定値・〔 〕内は現存値

No	種別 器種	出土状態 ① 平面 ② 垂直	残存状況 法量(cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
1	土師器 壺	① 炉の北ほか ② 床直	口縁～胴部 口 16.6 底 - 高(口) [6.1] (体) [19.0]	①微砂粒混入 ②酸化炎焼成 ③橙 2.5YR6/6	外面 口縁折り返しヨコナデ、下半タテ方向ヘラナデ、胴部上半ヨコ方向ヘラナデ、下半ナメ方向ヘラナデ 内面 口縁口唇部面取り、ヨコナデ後タテ方向ヘラナデ、胴部ヨコ方向ヘラナデ	7号住居土器片と 接合
2	縄文 深鉢	①フク土	波状口縁部破 片	①砂粒混入 ②良好 ③にぶい黄橙 10YR7/3	外面 無地に木の葉状の平行爪形文を施す	諸磯b式 厚さ6mm

4号住居（第14図）P L. 20

No	種別 器種	出土状態 ① 平面 ② 垂直	残存状況 法量(cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
1	土師器 器台	①南部 ②床直	器受部口縁と 脚裾の一部を 欠損 口 7.8 底 12.0 高 7.8	①微砂粒混入 ②酸化炎焼成 ③橙 7.5YR6/6	外面 器受部ヨコナデ、接合部から脚部タテ方向ヘラミガキ 内面 器受部ヨコナデ、脚部ヨコ方向ヘラナデ 穿孔部周辺指ナデ	
2	土師器 台付甕	①南部 ②床直	口縁～脚部、 胴部ほか一部 欠損 口 16.0 底 10.5 高 19.7	①微砂粒混入 ②酸化炎焼成 ③にぶい黄褐 10YR5/3	外面 口縁折り返し、下方ヨコナデ、胴部上方ナメ方向ヘラナデ、下方ヨコ方向ヘラナデ、台部ナメ方向ヘラナデ 内面 口縁～胴部、ヨコ方向ヘラナデ 台部、ヨコ方向ヘラナデ	2号溝土器片と接 合

5号住居（第14図）P L. 20

No	種別 器種	出土状態 ① 平面 ② 垂直	残存状況 法量(cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
1	敲石	①西部 ②-3cm	完形 長 [17.8] 幅 8.4 厚 5.0		棒状の自然礫の一端を打ち欠き形状を整えている。側面に紐かけ用の打ち欠きがあり、手に持つ使用法と柄をつける2つの方法がある	粗粒安山岩 重量 960g

6号住居（第16図）P L. 20

No	種別 器種	出土状態 ① 平面 ② 垂直	残存状況 法量(cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
1	土師器 小型甕	①北半部 ②4～8cm	胴部～底部欠 損あり 口 11.0 底 (4.3) 高 10.6	①微砂粒混入 ②酸化炎焼成 ③明赤褐 5YR5/6	外面 ナデ整形後タテ方向ミガキ 内面 ナデ整形後ヨコ方向ミガキ	7号住居土器片と 接合
2	土師器 甕	①中央～北西 ②2～7cm	口縁～上胴部 1/4 口 (20.2) 高 [6.9]	①微砂粒混入 ②酸化炎焼成 ③にぶい褐 7.5YR5/4	外面 ナデ整形後タテハケ 内面 ナデ整形後ヨコハケ	くの字状口縁

No	種別 器種	出土状態 ① 平面 ② 垂直	残存状況 法量(cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
3	弥生 甕	①北東部 ②床直	口縁部破片	①細砂粒混入 ②酸化炎焼成 ③灰黄褐 10YR4/2	外面 ナデ整形後タテ方向ヘラナデ 内面 ナデ整形後ヨコ方向ヘラナデ	厚さ4mm 8と同一個体か
4	土師器 鉢	①北部中央 ②9cm	口縁部破片	①微砂粒混入 ②酸化炎焼成 ③橙 5YR6/6	折り返し口縁でやや肥厚	厚さ4mm
5	土師器 甕	①北東部 ②6cm	口縁部破片	①微砂粒混入 ②酸化炎焼成 ③にぶい黄橙 10YR7/4	折り返し口縁でやや肥厚	
6	土師器 壺	①北部中央 ②6～39cm	頸部～上胴部 破片 高 [7.5]	①微砂粒混入 ②酸化炎焼成 ③橙 7.5YR6/6	外面 ナデ整形後頸部に3連止め簾状文、胴部 タテハケ 内面 ナデ整形、被熱で器面が荒れている	
7	土師器 壺	①西部 ②6～39cm	口縁部～頸部 破片 高 [5.6]	①微砂粒混入 ②酸化炎焼成 ③橙 5YR6/6	外面 ナデ整形後タテ方向のミガキ 内面 ヨコ方向のナデ	
8	弥生 甕	①中央部 ②13cm	胴部上半破片	①微砂粒混入 ②焼成良好 ③にぶい褐 7.5YR6/3	櫛歯状工具による6条単位の波状文施文	3と同一個体か

7号住居（第19図）P L. 20

No	種別 器種	出土状態 ① 平面 ② 垂直	残存状況 法量(cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
1	須恵器 杯	①北西部 ②-2cm	口縁部～底部 1/5 口 (10.0) 底 (6.0) 高 2.8	①細砂粒混入 ②還元炎焼成、良好、硬 ③灰 10Y6/1	内外面 回転ナデ調整 底部外面 回転ナデ後一部ヘラナデ	
2	土師器 高杯(杯)	①南部 ②45cm	口縁部破片 口 (22.0) 高 7.5	①砂粒混入 ②酸化炎焼成 ③明黄褐 7.5YR6/6	外面 ナデ整形後ヨコとナナメ方向のミガキ 内面 ナデ整形後タテ方向のミガキ	
3	土師器 高杯(脚)	①中央西寄り ②11cm	脚部破片 最大脚径 6.0 器高 [9.2]	①砂粒混入 ②酸化炎焼成 ③明黄褐 7.5YR6/8	外面 整形後全面にタテ方向のミガキ 内面 指頭によるナデ整形	
4	土師器 小型甕	①中央部 ②床直～19cm	口縁～底部 体部欠損多 口 7.4 底 4.0 高 10.1	①微砂粒やや多混 ②酸化炎焼成 ③にぶい橙 7.5YR6/4	内外面 ナデ整形後ヨコ方向ヘラナデ	4号古墳土器片と と接合
5	須恵器 瓶	①北西部 ②52cm	底部 3/4 底 11.0 高 [5.4]	①微砂粒混入 ②還元炎焼成 ③灰黄 2.5Y6/2	底部 紐作り後ロクロ回転ナデ整形付高台	
6	縄文 深鉢	①北・南西部 ②32～85cm	口縁部破片 高 [7.0]	③黒褐 2.5Y3/2	単口縁無文 外面 タテにナデ整形後ヨコナデ 内面 ナデ整形、口唇部に白色粘土帯を貼付	後期堀之内式 厚さ9mm 7と同一個体

No	種別 器種	出土状態 ① 平面 ② 垂直	残存状況 法量(cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
7	縄文 深鉢	①南部 ②63cm	口縁部破片 高 [6.7]	③にぶい黄褐 10YR5/3	外面 タテにナデ整形後ヨコナデ 内面 ナデ整形、口唇部に白色粘土帯を貼付	後期堀之内式
8	縄文 深鉢	①東部 ②—5cm	口縁部破片 高 [4.0]	③灰黄褐 10YR5/2	単口縁無文 内外面 ナデ整形	後期堀之内式
9	石鎌	①北西部 ②56cm	右基部欠損 長 2.3 幅 1.15 厚 0.4		無茎三角腹袂式 腹袂は浅い	チャート 重量 0.76g
10	磨石		完形 長 13.3 幅 7.4 厚 4.7		棒状の自然礫をそのまま使用し、特に加工痕なし。図の上端部に敲打による摩耗、下端面の側稜にも同様な痕が見られる	粗粒安山岩 重量 671g

1号古墳(第27~31図) P.L. 20

No	種別 器種	出土状態 ① 平面 ② 垂直	残存状況 法量(cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
1	土師器 杯	①周堀北東部 ②フク土	略完 口縁の 一部欠損 口 14.0 底 8.4 高 4.1	①微砂粒少混 ②酸化炎焼成 ③橙 5YR6/8	外面 ナデ整形後底部立ち上がりにヨコ方向の ヘラケズリ 内面 ナデ整形後棒状工具による放射状暗文を 施す	
2	土師器 杯	①周堀北東部 ②フク土	口縁~底部 1/2 口 (14.0) 底 (8.0) 高 4.0	①砂粒混入 ②酸化炎焼成 ③橙 7.5YR7/6	外面 ナデ整形後底部立ち上がりヨコ方向ヘラ ケズリ、底部ヘラケズリ 内面 ナデ整形後棒状工具による放射状暗文を 施す	
3	須恵器 杯	①周堀 ②フク土	体部~底部 1/4 底 (14.0) 高 [3.8]	①細砂粒混入 ②還元炎焼成 ③灰黄 2.5Y7/2	体部 内外面ナデ 底部 内面ナデ、外面回転ヘラケズリ 底部の外周に細い高台を貼付する	
4	須恵器 杯	①石室前庭 ②フク土	体部~底部 1/2 口 — 底 (6.0) 高 [4.1]	①微砂粒混入 ②還元炎焼成良好・硬 ③灰オリーブ 5Y6/2	内外面回転ナデ調整 底部外面回転ナデ調整後ヘラナデ	
5	須恵器 大甕	①石室 ②フク土	上胴部破片	①微砂粒混入 ②還元炎焼成 ③灰白 2.5Y7/1~ 黄灰 2.5Y5/1	外面 平行タタキ 内面 同心円状のアテ目	④~⑧⑪ ⑫⑰
	須恵器 大甕	①石室 ②フク土	上胴部破片	③灰黄 2.5Y6/2	外面 ナデ調整 内面 ナデ調整後ヨコ方向の平行タタキ	⑱
	須恵器 大甕	①石室 ②フク土	体部破片	③黄灰 2.5Y6/1~ 灰オリーブ 5Y6/2	外面 平行タタキ 内面 平行タタキのアテ目	⑨⑩⑬~⑮ ⑲~⑳
	須恵器 大甕	①石室 ②フク土	口縁部破片	③にぶい黄 2.5Y6/3	口頸部は基部太く外弯気味に開き端部に至る。 端部外面に凸線を巡らせ端部は丸く仕上げられて いる	①~③

No	種別 器種	出土状態 ①平面 ②垂直	残存状況 法量(cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
6	須恵器 壺	①周堀 ②フク土	口縁頸部破片	③灰黄 2.5Y6/1	外面 ヘラナデ 内面 ナデ	①
	須恵器 壺	①周堀 ②フク土	胴部破片	③灰白～黄灰 2.5Y6/1～7/2	外面 平行タタキ後回転によるナデ調整 内面 同心円状のアテ目	②～⑮
7	須恵器 長頸壺	①周堀 ②フク土	口縁部破片 口 (6.8) 高 [6.9]	①微砂粒混入 ②還元炎焼成、良好、 硬 ③灰白 2.5Y7/1	内外面 回転ナデ調整	
8	円筒埴輪	①周堀 ②フク土	体部破片 高 [3.8]	①細砂粒混入 ②焼成良好、硬 ③にぶい橙 2.5YR6/4	外面 タテハケ調整 内面 ナデ調整	突帯断面三角
9	縄文 深鉢	①石室前庭 ②フク土	口縁部破片 高 [7.8]	①細砂粒混入 ②焼成良好 ③にぶい黄橙 10YR7/2	内外面 粗雑なナデ整形 外面 口縁に平行して半裁竹管工具で2条の 沈線を施文	後期堀之内式
10	縄文 深鉢	①前庭部 ②フク土	底部破片 底 (8.4) 高 [1.7]	①微砂粒混入 ②焼成良好 ③にぶい橙 7.5YR6/4	外面 網代痕	後期
11	鉄製品 大刀	①玄室 ②フク土	柄と刀身の一部残 長 [11.5] 幅 [3.3] 厚 [0.9]		平練造 刀身部に黄金具が錆着	無関か 刀身部の幅 2.9cm 重量 62g
12	鉄製品 刀子	①玄室内カク 乱坑	刀身中央残存 長 [5.3] 幅 [1.7] 厚 [0.7]			重量 11g
13	鉄製品 鉄鏃	①玄室 ②フク土	頸の一部 長 [4.7] 幅 [0.5] 厚 [0.45]			重量 2g
14	鉄製品 鉄鏃	①玄室 ②フク土	頸の一部 長 [4.0] 幅 [0.4] 厚 [0.4]			断面方形 重量 2g
15	鉄製品 鉄鏃	①玄室 ②フク土	頸の一部 長 [7.0] 幅 [0.9] 厚 [0.6]			瑞刃式か 重量 4g
16	鉄製品 刀装具	①玄室 ②フク土	完形 長 5.1 幅 3.9 厚 0.8			重量 19g
17	鉄製品 刀装具	①玄室 ②フク土	1/2残 長 [2.0] 幅 [2.5] 厚 [0.6]			左右非対称 断面三角 重量 11.0g

No	種別 器種	出土状態 ①平面 ②垂直	残存状況 法量(cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
18	石鏃	①前庭部 ②フク土	先端一部欠損 長 [3.05] 幅 2.0 厚 0.4		無茎三角腹挾式	ガラス質 重量 4.0g
19	石鏃	①石室 ②フク土	先端欠損 長 [2.0] 幅 [1.9] 厚 [0.4]		無茎三角腹挾式	黒曜石 重量 1.15g

3号古墳(第36図) P L. 22

No	種別 器種	出土状態 ①平面 ②垂直	残存状況 法量(cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
1	須恵器 蓋	①周堀 ②フク土	つまみ～端部 2/3 口 (14.3) つまみ 2.5 高 3.4	①微砂粒混入 ②還元炎焼成 ③黄灰 2.5Y6/1	外面 回転ナデ整形後天井の中央部ロクロ右回 転ヘラケズリ、端部折り返し 内面 回転ナデ整形、摩耗して一部光沢あり	硯に転用
2	須恵器 蓋	①周堀 ②フク土	天井部～端部 1/2 口 (11.0) 高 [1.5]	①微砂粒少混 ②還元炎焼成 ③灰白 2.5Y8/2	外面 回転ナデ整形後天井の中央部ヘラケズリ 内面 回転ナデ整形、端部身受けのかえりを持 つ	
3	土師器 杯	①前庭部 ②フク土	口縁～底部 2/3 口 (11.3) 高 4.0	①砂粒やや多混 ②酸化炎焼成 ③橙 5YR6/6	外面 口縁ヨコ方向ナデ、体部から底部ヘラケ ズリ 内面 ヨコ方向のナデ	
4	土師器 杯	①前庭部 ②フク土	口縁～底部破 片 口 (12.6) 底 (9.4) 高 2.9	①微砂粒少混 ②酸化炎焼成 ③橙 7.5YR6/6	外面 ナデ整形後ヨコ方向ヘラケズリ 内面 ナデ整形	
5	須恵器 杯	①前庭部 ②フク土	口縁～底部 1/2欠損多 口 (15.0) 底 (10.0) 高 4.3	①微砂粒混入 ②還元炎焼成 ③明褐 7.5YR5/6	外面 回転ナデ整形、底部回転ヘラナデ、削り 出し高台。工具を当てて低い高台を作り 出している 内面 回転ナデ整形	
6	須恵器 椀	①周堀 ②フク土	口縁～底部 1/4 口 (13.0) 底 (6.5) 高 4.2	①微砂粒混入 ②酸化炎焼成 ③明黄褐 10YR6/6	外面 体部丸味がある、ロクロ右回転ナデ整形 底部回転糸切 内面 ロクロ右回転ナデ整形	
7	土師器 器台	①前庭 ②フク土	脚部破片 底 (10.6) 高 [4.1]	①微砂粒やや多混 ②酸化炎焼成 ③橙 5YR7/6	外面 ナデ整形後タテ方向のミガキ 内面 ナデ整形後ナメ方向のミガキ	
8	須恵器 羽釜	①周堀 ②フク土	口縁～胴部 1/4 口 (21.0) 高 [14.3]	①砂粒混入 ②還元炎焼成 ③浅黄 2.5Y7/4	胴上半から口縁内傾気味 外面 ロクロ整形後タテのヘラケズリ 内面 ロクロ整形後一部ナデ	

No	種別 器種	出土状態 ① 平面 ② 垂直	残存状況 法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
9	石鉢	①前庭部 ②フク土	完形 長 2.1 幅 1.6 厚 0.4		無茎三角腹扶式 腹袂は浅い	黒色安山岩 重量 0.98g

4号古墳 (第39図) P L. 22

No	種別 器種	出土状態 ① 平面 ② 垂直	残存状況 法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
1	土師器 杯	①周堀 ②フク土	完形 口 11.4 高 3.5	①砂粒やや多混 ②酸化炎焼成 ③明赤褐 2.5YR5/6	内面 口縁部ヨコナデ 外面 ナデ整形後ヘラケズリ型作り、体部に型 膚を残す	
2	須恵器 杯	①周堀 ②フク土	口縁～底部 1/4 口 (14.0) 底 (8.0) 高 3.3	①砂粒混入 ②還元炎焼成、良好、硬 ③灰白 2.5Y7/1	内外面 回転ナデ調整 底部外面 右回転糸切り	底部外面にカマ印
3	敲石	①周堀 ②フク土	完形 長 17.2 幅 7.2 厚 4.4		棒状の自然礫を使用、特に加工痕はない、上下 両端面に敲打と摩耗の痕が見られる	粗粒安山岩 重量 810g
4	敲石	①周堀 ②フク土	完形 長 16.8 幅 9.2 厚 7.6		棒状の自然礫を使用し、上下両端に敲打で磨り 減った平坦面、側面の中程にも敲打や打ち欠き らしい痕も見える	粗粒安山岩 重量 1430g

5号古墳 (第42図) P L. 23

No	種別 器種	出土状態 ① 平面 ② 垂直	残存状況 法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
1	須恵器 蓋	①周堀 ②フク土	天井～端部 口 (17.8) 高 [2.7]	①微砂粒混入 ②還元炎焼成 ③灰 5Y6/1	ロクロ回転整形後、天井部つまみ回り回転ヘラ ケズリ、端部身受けのかえりを持つ	1号古墳土器片と 接合
2	須恵器 椀	①周堀 ②フク土	口縁～底部 1/5 口 - 底 (9.0) 高 [5.85]	①微砂粒混入 ②還元炎焼成、良好、硬 ③灰 5Y5/1	体部内外面 回転によるナデ 底部内面 ナデ 外面 回転によるナデ調整後高台貼付	
3	土師器 甕	①周堀 ②フク土	頸部～胴部 破片	①径1mmの砂粒多 ②酸化炎焼成、良好、 やや硬 ③にぶい黄橙 10YR6/4	外面 く字状のタテハケ (5本/1cm) 頸部 との接合部ヨコハケ 内面 ヨコ方向のヘラナデ	
4	土師器 甕	①周堀 ②フク土	胴部破片	①径1mmの砂粒多 ②酸化炎焼成、良好、 やや硬 ③橙 7.5YR6/6	外面 タテハケ (6本/1cm) 後横描波状文を 施す 内面 ナデ	
5	鉄製品 鉄鉢	①玄室 ②フク土	茎の一部 長 [4.7] 厚 [0.45]			重量 5.33g

2号溝 (第47図) P L. 23

No	種別 器種	出土状態 ① 平面 ② 垂直	残存状況 法量(cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
1	円筒埴輪	②フク土	体部破片	①砂粒混入 ②焼成良好、硬 ③明褐 7.5YR5/6	外面 タテハケ調整 (6本 / 1cm) 内面 ナデ調整	透孔円か 形象埴輪基部の 可能性あり
2	円筒埴輪	②フク土	体部破片	①結晶質片岩粒混入 ②焼成良好、硬 ③橙 5YR6/6	外面 タテハケ調整 (5~6本 / 1cm) 内面 ナデ調整後一部ハケ調整	突帯断面台形
3	寛永通宝	②フク土	完形		外径 内径 郭外幅 内幅 厚さ タテ 16.00 20.28 6.74 5.61 1.24 ヨコ 24.48 19.98 6.61 5.43 (単位:mm)	古寛永銭 重量 3.01g

遺構外 (第49図) P L. 23

No	種別 器種	出土状態 ① 平面 ② 垂直	残存状況 法量(cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
1	須恵器 椀	① 1 I 16グリ ッド ②フク土	底部破片	①微砂粒混入 ②還元炎焼成 ③にぶい黄橙 0YR7/3	右回転糸切り後付高台	内面に線刻「十」
2	陶器 甕	① 4号古墳 ②フク土	胴部破片	①微砂粒混入 ②焼締、硬 ③にぶい赤褐2.5YR4/3	自然釉が胡麻状にふりかかる	常滑焼
3	円筒埴輪	① 1 M12グリ ッド ②フク土	胴部破片	①結晶質片岩ほかさ粒 混入 ②焼成良好、硬 ③明赤褐 5YR5/6	外面 タテハケ (7~8本 / 1cm) 内面 ナデ調整後一部ハケ調整	突帯断面三角
4	1銭銅貨	① 1 M13グリ ッド ②フク土	完形			明治十七年 重量 6.66g

和田山寺久保遺物観察表

1号土器埋納土坑(第55図) P L. 23

()内は推定値・[]内は現存値

No	種別 器種	出土状態 ①平面 ②垂直	残存状況 法量(cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
1	土師器 甕	②床直	口縁～底部 口 23.8 高 34.9	①微砂粒混入 ②酸化炎焼成 ③明赤褐 5YR5/6	外面 口縁ヨコナデ、胴部～底部ヨコからナナメ方向ヘラナデ 内面 口縁ヨコナデ、胴部～底部ヨコ方向ヘラナデ	

遺構外出土遺物(第49図) P L. 23

No	種別 器種	出土状態 ①平面 ②垂直	残存状況 法量(cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
1	石鏃	①1トレンチ ②フク土	一部欠 長 [1.89] 幅 [1.26] 厚 0.35		無頸三角腹袂式 腹袂は丸味を帯びる 右の基部と先端を欠損	珪質変質岩 吾妻川支流白砂川 (六合村～中之条) 重量 0.51g
2	石鏃	①3G7グリッド ②フク土	ほぼ完形 長 1.05 幅 [0.95] 厚 0.30		無茎平根三角腹袂式、腹袂は浅い 右の基部を欠損	黒曜石 重量 0.20g
3	打製石斧	①3F2グリッド ②フク土	刃部欠損 長 [6.4] 幅 4.5 厚 1.2		短冊形、扁平で反り身少ない	頁岩 重量 49.05g
4	スクレイパー	①1トレンチ2 E19グリッド ②フク土	完形 長 5.6 幅 8.1 厚 1.8		縦剥ぎ剥片を素材とする。1側縁に刃部を付ける	頁岩 重量 69.27g
5	凹石	①2トレンチ ②フク土	完形 長 10.9 幅 6.0 厚 4.3		表裏に各2個の凹穴があいている	粗粒輝石安山岩 重量 410g
6	縄文 深鉢	①3トレンチ ②フク土	胴部破片	①砂粒多混 ②焼成良好、硬 ③にぶい褐 7.5YR5/4	平滑に器面調整後棒状工具により3条単位の横位の沈線で区画した間を斜位の沈線を充填	早期田戸下層式
7	縄文 深鉢	①2F20グリッド ②フク土	胴部破片	①微砂粒混入 ②焼成良好、硬 ③褐 7.5YR4/3	縄文地に半裁竹管工具で平行沈線を施文	諸磯b式
8	縄文 浅鉢	①3F1グリッド ②フク土	胴部破片	①砂粒多混 ②焼成良好、硬 ③にぶい褐 7.5YR5/4	内外面平滑、内面に2条単位の角押文を施文	阿玉台式
9	縄文 深鉢	①3E1グリッド ②フク土	口縁部破片	①砂粒多混 ②焼成良好、硬 ③にぶい赤褐 5YR5/4	細い粘土紐を貼付して楕円に区画、竹管で隆帯脇を一例に押し引くように飾る。口唇部にも同じ刻みを施す。口唇に貼付した突起は剥落	阿玉台式
10	縄文 深鉢	①3F5グリッド ②フク土	胴部破片	①微砂粒混入 ②焼成良好、硬 ③明赤褐 5YR3/3	L R単節縄文	前期末
11	縄文 深鉢	①3G9グリッド ②フク土	胴部破片	①砂粒多混 ②焼成良好、硬 ③にぶい黄褐 10YR5/4	無文地に2条単位の角押文を楕円に施文	阿玉台式
12	縄文 深鉢	①3G11グリッド ②フク土	口縁部破片	①砂粒多混 ②焼成良好、硬 ③にぶい褐 7.5YR5/4	波状口縁 無文地に半裁竹管工具により平行沈線を施文	諸磯b式

写真図版





1 東上空からの富岡竹ノ内遺跡全景（右にカーブするむこうには、起伏に富んだ台地が続いている。）



2 和田山寺久保遺跡南西上空から富岡竹ノ内遺跡を望む（手前の梅林の中は桜塚古墳、北東は榛名白川沿いの低地である。）



1 富岡竹ノ内遺跡4号古墳、5号古墳上空からの全景（4号古墳のまわりには、1号、6号、7号などの住居がある。）



2 北上空からの和田山寺久保遺跡全景（正面が観音山丘陵、右端には長野新幹線の高架橋が見える。）



1 富岡1号住居跡全景 西から



2 富岡1号住居跡遺物出土状態 西から



3 富岡1号住居跡炉全景 北から



4 富岡1号住居跡セクション 南から



5 富岡2号住居跡全景 西から



6 富岡2号住居跡セクション 西から



7 富岡3号住居跡全景 北から



8 富岡3号住居跡全景 西から



1 富岡4号住居跡全景 北から



2 富岡4号住居跡Eセクション 東から



3 富岡4号住居跡遺物出土状態 北西から



4 富岡4号住居跡遺物出土状態 北から



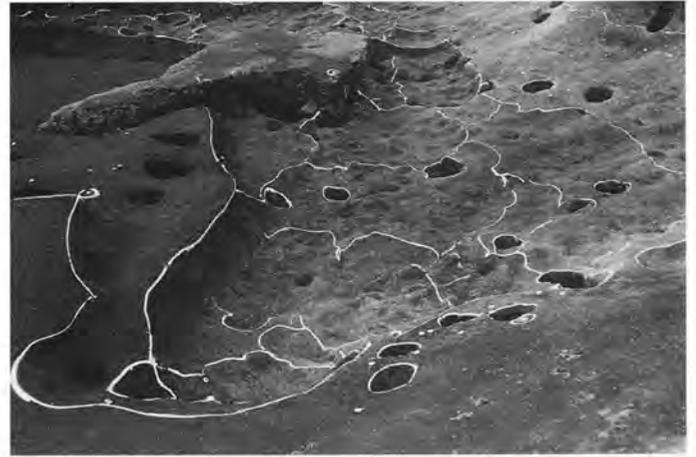
5 富岡4号住居跡全景 東から



6 富岡4・5号住居跡全景 南から



7 富岡4・5号住居跡掘り方全景 東から



8 富岡4・5号住居跡掘り方全景 東から



1 富岡5号住居跡全景 東から



2 富岡5号住居跡遺物出土状態 東から



3 富岡6号住居跡遺物出土状態 南から



4 富岡6号住居跡炉セクション 南から



5 富岡6号住居跡Aセクション 東から



6 富岡6号住居跡掘り方全景 南から



7 富岡7号住居跡遺物出土状態 南から



8 富岡7号住居跡全景 西から



1 富岡7号住居跡掘り方全景 南から



2 富岡7号住居跡Bセクション 南から



3 富岡7号住居跡全景 東から



4 富岡7号住居跡炉確認状態 東から



5 富岡7号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 南から



6 富岡8号住居跡全景 南東から



7 富岡8号住居跡遺物出土状態 南東から



8 富岡8号住居跡Aセクション 南東から



1 富岡4号住居跡南東隅遺物出土状態 北から



2 富岡1号溝全景 南から



3 富岡2号溝全景 東から



4 富岡2号溝全景 西から



5 富岡2号溝石垣近影 西から



6 富岡2号溝石垣近影 南から



7 富岡1号土坑全景 西から



8 富岡1号道Aセクション 東から



1 富岡1号古墳上空からの全景



2 富岡1号古墳上空からの石室全景



3 富岡1号古墳石室全景 南西から



4 富岡1号古墳石室全景 西から



5 富岡1号古墳石室掘り方北西隅検出状況 西から



6 富岡1号古墳石室西側掘り方 南から



7 富岡1号古墳石室掘り方全景 南から



8 富岡1号古墳石室掘り方全景 南から



1 富岡1号古墳石室掘り方セクション 南から



2 富岡1号古墳石室掘り方セクション 南から



3 富岡1号古墳石室掘り方セクション 南から



4 富岡1号古墳周堀Aセクション 南から



5 富岡1号古墳周堀遺物出土状態 北西から



6 富岡1号古墳作業風景 南から



7 富岡1号古墳作業風景 西から



8 富岡1号古墳作業風景 北から



1 富岡3号古墳上空からの全景



2 富岡3号古墳石室上空からの全景



3 富岡3号古墳石室全景 北から



4 富岡3号古墳石室掘り方セクション 南から



5 富岡3号古墳石室掘り方セクション 南から



6 富岡3号古墳石室掘り方裏込め被覆の状態 南西から



7 富岡3号古墳石室掘り方裏込め被覆の状態 西から



8 富岡3号古墳玄室北西隅検出状況 東から



1 富岡3号古墳掘り方全景 南から



2 富岡3号古墳石室掘り方全景 南から



3 富岡3号古墳前庭遺物出土状態 南から



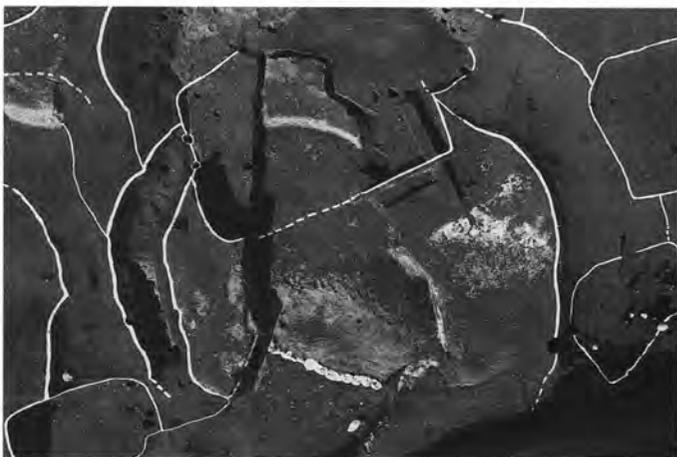
4 富岡3号古墳周堀遺物出土状態 南西から



5 富岡3号古墳Aセクション 東から



6 富岡3号古墳作業風景 北から



7 富岡4号古墳上空からの全景



8 富岡4号古墳全景 南から



1 富岡4号古墳Dセクション 西から



2 富岡4号古墳Cセクション 北から



3 富岡4号古墳周堀遺物出土状態 東から



4 富岡4号古墳作業風景 北から



5 富岡5号古墳上空からの全景



6 富岡5号古墳石室上空からの全景



7 富岡5号古墳石室全景 南から



8 富岡5号古墳石室全景 東から



1 富岡5号古墳石室閉塞状態 南から



2 富岡5号古墳石室西玄門 北東から



3 富岡5号古墳石室掘り方全景 南から



4 富岡5号古墳石室作業風景 南から



5 富岡1号石槨全景 北西から



6 富岡1号古墳石室作業風景 南西から



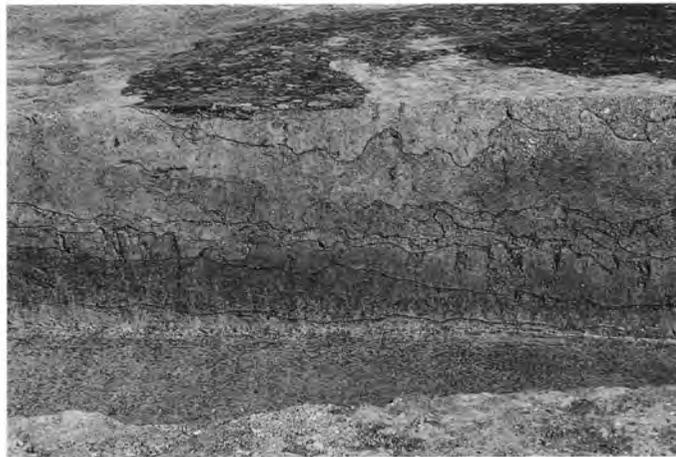
7 富岡3号古墳玄室西壁 南東から



8 富岡3号古墳周掘遺物出土状態 北西から



1 富岡旧石器試掘1号トレンチ 東から



2 富岡旧石器試掘2号トレンチ 南から



3 富岡旧石器試掘3号トレンチ 南から



4 富岡全景 北西から



5 富岡作業風景 北西から



6 富岡作業風景 北西から



7 富岡作業風景 東から



8 富岡作業風景 南西から



1 富岡作業風景 南から



2 富岡作業風景 東から



3 富岡作業風景 北から



4 富岡作業風景 東から



5 富岡作業風景 北西から



6 富岡作業風景 北東から



7 富岡作業風景 南から



8 富岡作業風景 北東から



1 和田山全景 南から



2 和田山1号古墳全景 南から



3 和田山1号古墳南側セクション 北東から



4 和田山1号古墳北側セクション 東から



5 和田山1号古墳近影 北東から



6 和田山1号古墳近影 東から



7 和田山1号古墳墳丘断面 南から



8 和田山1号古墳と1号道全景 南から



1 和田山2号古墳全景 南から



2 和田山2号古墳南側セクション 南東から



3 和田山2号古墳北側セクション 南東から



4 和田山1号土器埋納土坑遺物出土状態 南から



5 和田山1号土器埋納土坑セクション 南から



6 和田山1号土器埋納土坑遺物出土状態 南から



7 和田山1号土器埋納土坑掘り方 南から



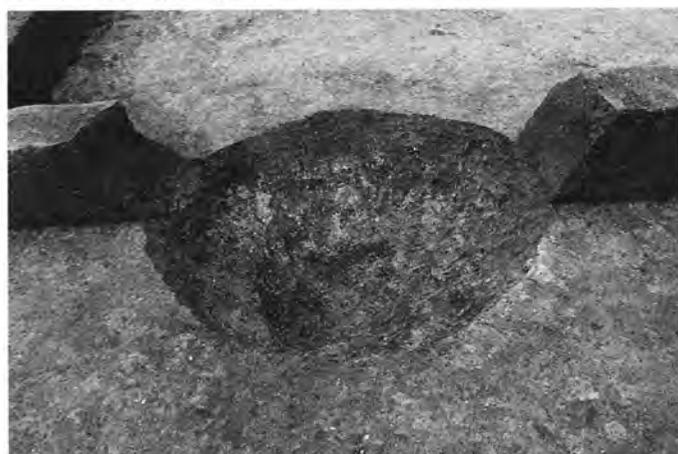
8 和田山2号土坑全景 南から



1 和田山3号土坑全景 南から



2 和田山4号土坑全景 南から



3 和田山5号土坑全景 南から



4 和田山1号道Bセクション 西から



5 和田山2号道確認状態 北から



6 和田山2号道全景 北から



7 和田山2号道Dセクション 南から



8 和田山1号トレンチ全景 北から



1 和田山旧石器試掘1号トレンチ 南から



2 和田山旧石器試掘1号トレンチ 南西から



3 和田山2号トレンチ全景 北から



4 和田山旧石器試掘2号トレンチ 南から



5 和田山3号トレンチ全景 南から



6 和田山旧石器試掘3号トレンチ 南西から



7 和田山旧石器試掘4号トレンチ 南西から



8 和田山作業風景 北から



1住-1①



1住-2



4住-2



1住-1②



4住-1



5住-1



6住-1



6住-2



6住-3



6住-4



6住-8



6住-5



6住-6



6住-7



7住-1



7住-9



7住-5



7住-6



7住-7



7住-4



7住-10



1墳-3



7住-8



1墳-4



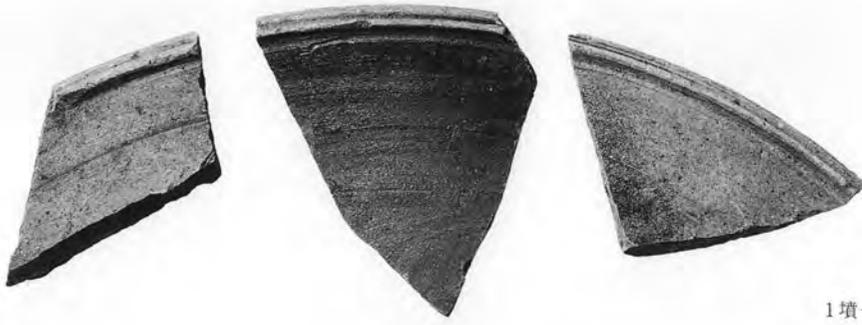
1墳-1



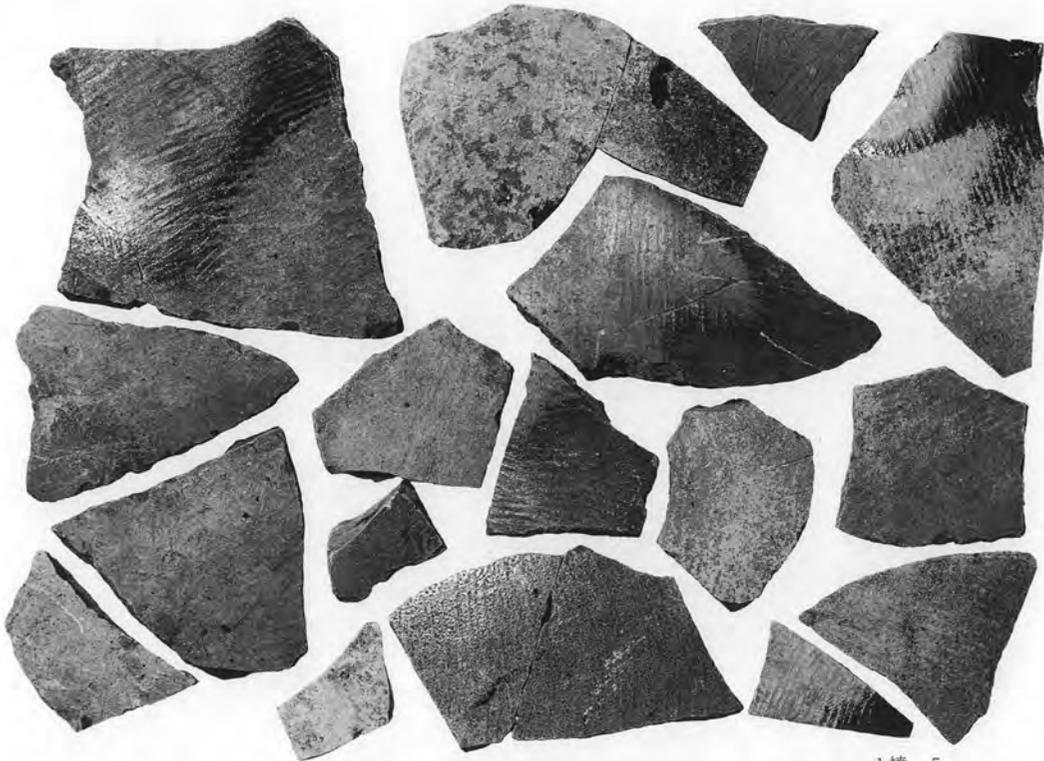
1墳-2



1墳-5



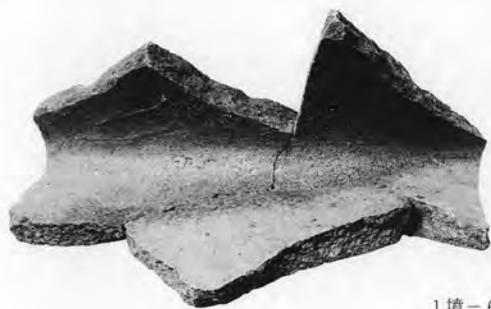
1墳-5



1墳-5



1墳-6



1墳-6



1墳-6



1墳-7



1墳-8



1墳-9



1墳-10



1墳-11



1墳-12



1墳-13



1墳-14



1墳-15



1墳-16



1墳-18



1墳-19



3墳-1



3墳-2



3墳-3



3墳-4



3墳-5



3墳-6



3墳-7



3墳-8



3墳-9



4墳-3



4墳-4



4墳-2



4墳-1



5墳-1



5墳-2



5墳-3



5墳-4



5墳-5



2溝-1



2溝-2



遺構外-1



遺構外-2



遺構外-3



2溝-3



遺構外-3

和田山寺久保



遺構外-1



遺構外-2



遺構外-3



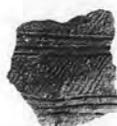
遺構外-4



遺構外-5



遺構外-6



遺構外-7



遺構外-8



遺構外-9



遺構外-10



遺構外-11



遺構外-12



1号土器 埋納土坑-1

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告書第380集

富岡竹ノ内・和田山寺久保遺跡 一般県道箕郷板鼻線地方特定道路整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成18年(2006)7月21日 印刷

平成18年(2006)7月28日 発行

編集／発行 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

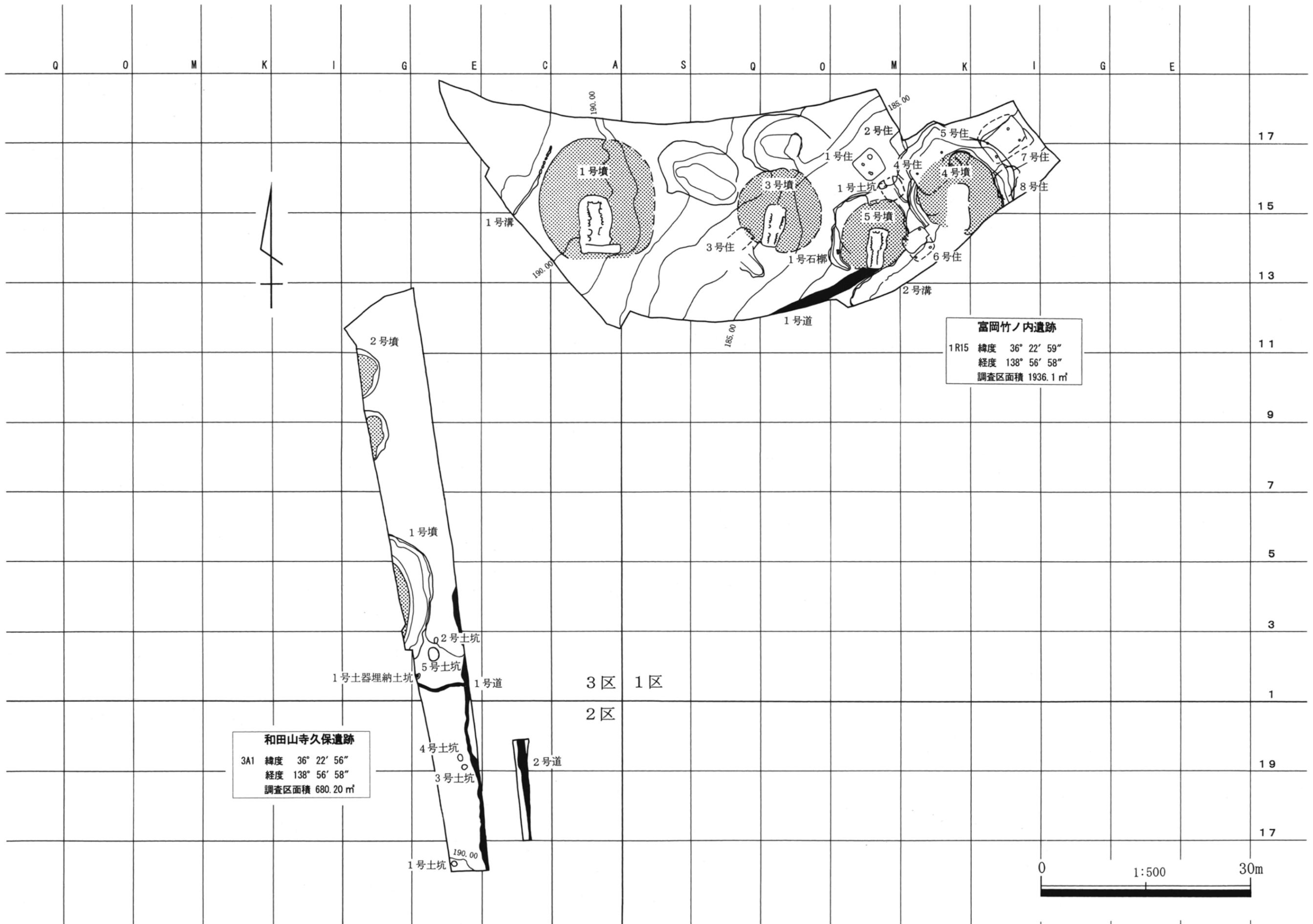
〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784-2

電話 (0279) 52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／杉浦印刷株式会社





富岡竹ノ内遺跡
 1R15 緯度 36° 22' 59"
 経度 138° 56' 58"
 調査区面積 1936.1 m²

和田山寺久保遺跡
 3A1 緯度 36° 22' 56"
 経度 138° 56' 58"
 調査区面積 680.20 m²

付図 富岡竹ノ内・和田山寺久保遺跡 全体図